

千葉市辺田山谷遺跡

—千葉県小児医療センター(仮称)建設予定地内埋蔵文化財調査報告書—

1 9 8 6

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉市の市街地を流れ、東京湾に注ぐ都川流域は、自然環境にめぐまれ、先土器時代から歴史時代に至る多くの遺跡が所在しております。特に縄文時代の貝塚が集中し、なかでも、加曾利貝塚は全国的に著名です。

このたび、千葉県衛生部は、医療の急速な進歩に伴い、高度な医療を必要とする小児疾患のための総合医療施設の建設を千葉市辻田町に計画しました。

そこで、千葉県教育委員会は、建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県衛生部保健予防課をはじめ関係諸機関と慎重な協議を重ねた結果、止むを得ず、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが当たることとなり、昭和59年10月から昭和60年3月まで実施しました。

調査の結果、先土器時代から歴史時代に至る生活の跡が検出され、なかでも、縄文時代早期の遺物が多量に出土したことは特筆されます。

これらの遺構や出土遺物は、当地域の歴史を解明する上で、極めて貴重な資料を提供することとなりました。

このたび、その発掘成果を「千葉市辻田山谷遺跡」として刊行することとなりましたが、本書が学術資料としてはもとより、郷土を知る教育資料として、広く活用されることを望んでやみません。

終りに、発掘調査から整理に至るまで多大な御協力、御支援をいただきました、千葉県衛生部、千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会をはじめ、関係諸機関に深く御礼申し上げるとともに、発掘調査及び整理作業に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和61年3月31日

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 山本 孝也

例　　言

1. 本書は、千葉県衛生部保健予防課による、小児医療センター建設工事に伴い事前調査した、
千葉市辺田山谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、下記の担当により昭和59年10月1日より昭和60年3月31日まで実施した。
調査部長 鈴木道之助、部長補佐 岡川宏道、班長 清藤一頼、調査研究員 柴田龍司・関根重夫
3. 整理作業は、下記の担当により昭和60年4月1日より9月30日まで実施した。
調査部長 鈴木道之助、部長補佐兼班長 古内 茂、調査研究員 柴田龍司
4. 本書の編集は、鈴木道之助・古内茂の指導、助言のもと、宮重行の協力を得ながら柴田龍司が行った。
5. 本書の執筆は下記のとおりである。
柴田龍司 I, II (縄文時代遺物除く), IV-1(1)・2
宮 重行 II (縄文時代遺物), III, IV-1(2)
6. 遺跡コードは、201 (市町村コード)、056 (遺跡コード)とした。
7. 本書に使用している図面の方位は、すべて座標北を指している。
8. 本書における遺構番号は、報告書作成時新たに付けたものであるため、調査時の番号を本文中に()で表示した。又一部欠番も存在する。
9. 本書に収録した遺物および記録類は、千葉県文化財センターに所蔵・保管している。
10. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜りました。ここに謝意を表します。

千葉県衛生部保健予防課、千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会、千葉県リハビリテーションセンター。

本文目次

序 文

例 言

目 次

I 序 説

1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 調査の方法と経過	3

II 検出した遺構と遺物

1. 先土器時代	11
2. 縄文時代	15
3. 歴史時代	32

III 遺物包含層出土の遺物

1. 土 器	51
2. 土製品・石製品	83
3. 石 器	85

IV まとめ

1. 縄文時代	102
2. 歴史時代	110

挿図目次

第1図	辺田山谷遺跡及び周辺主要遺跡位置図	2
第2図	辺田山谷遺跡周辺地形図	4
第3図	検出遺構配置図	7
第4図	先土器時代調査区配置図	9
第5図	A地点遺物出土状況図	11
第6図	B地点遺物出土状況図	12
第7図	C地点遺物出土状況図	13
第8図	A・B・C地点出土遺物実測図	14
第9図	001号址実測図	16
第10図	001号址出土遺物実測図	16
第11図	002号址実測図	17
第12図	002・003号址出土遺物実測図	18
第13図	003号址実測図	19
第14図	004号址実測図	20
第15図	005・006号址実測図	21
第16図	005・006号址出土遺物実測図	22
第17図	007・008号址実測図	23
第18図	009・010号址実測図	24
第19図	009号址出土遺物実測図	25
第20図	011～018号址実測図	28
第21図	019～026号址実測図	30
第22図	021・026号址出土遺物実測図	31
第23図	027号址実測図(1)	33
第24図	027号址実測図(2)	34
第25図	027号址出土遺物実測図	35
第26図	028号址実測図	37
第27図	029号址実測図・029号址出土遺物実測図	38
第28図	030号址実測図	39
第29図	031号址実測図	40
第30図	032号址実測図	42
第31図	033号址実測図	43

第32図	034号址実測図	44
第33図	034号址出土遺物実測図	44
第34図	035号址実測図	45
第35図	036号址実測図	46
第36図	037号址出土遺物実測図	46
第37図	037号址実測図	47
第38図	038号址実測図	48
第39図	039号址実測図	49
第40図	040号址実測図	50
第41図	第Ⅰ群土器拓影図(1)	52
第42図	第Ⅰ群土器拓影図(2)	53
第43図	第Ⅰ群土器拓影図(3)	55
第44図	第Ⅰ群土器拓影図(4)	56
第45図	第Ⅰ群土器拓影図(5)	57
第46図	第Ⅰ群土器拓影図(6)	58
第47図	第Ⅰ群土器拓影図(7)	59
第48図	第Ⅱ群土器拓影図(1)	61
第49図	第Ⅱ群土器拓影図(2)	62
第50図	第Ⅰ・Ⅱ群底部実測図	63
第51図	第Ⅲ群土器拓影図	63
第52図	第Ⅱ・Ⅳ群土器拓影図	64
第53図	第Ⅴ群土器拓影図(1)	66
第54図	第Ⅴ群土器拓影図(2)	67
第55図	第Ⅵ群土器拓影図	68
第56図	第Ⅶ群土器拓影図	69
第57図	第Ⅷ群土器拓影図(1)	71
第58図	第Ⅷ群土器拓影図(2)	72
第59図	第Ⅷ群土器拓影図(3)	73
第60図	第Ⅳ・Ⅸ群土器実測図	74
第61図	第Ⅸ群土器拓影図	75
第62図	第Ⅹ群土器拓影図	76
第63図	第Ⅺ・Ⅻ群土器実測図	77
第64図	第Ⅺ群土器拓影図・実測図	78

第65図 第XII群土器拓影図	80
第66図 第XIII群土器実測図	81
第67図 第XIV群土器拓影図	82
第68図 土器片鍾拓影図	84
第69図 積状耳鉢実測図	85
第70図 グリッド出土石器実測図(1)	86
第71図 グリッド出土石器実測図(2)	87
第72図 グリッド出土石器実測図(3)	88
第73図 グリッド出土石器実測図(4)	89
第74図 グリッド出土石器実測図(5)	91
第75図 グリッド出土石器実測図(6)	92
第76図 グリッド出土石器実測図(7)	94
第77図 グリッド出土石器実測図(8)	95
第78図 グリッド出土石器実測図(9)	97
第79図 繩文土器平面分布図(1)	106
第80図 繩文土器平面分布図(2)	109

表 目 次

第1表 石器観察表	98
第2表 千葉県内押型文土器出土遺跡一覧表	105

図版目次

- 図版1. 遺跡航空写真
図版2. 遺跡全景
図版3. 1. 確認調査開始時（北東から）
2. 確認調査開始時（南西から）
3. 遺跡南西部（北東から）
図版4. 先土器B地点遺物出土状況
先土器C地点遺物出土状況
図版5. 001号址全景
001号址南端遺物出土状況
002号址全景
図版6. 003号址全景
004号址全景
図版7. 1. 005号址
2. 006号址
3. 006号址
4. 006号址
5. 007号址
6. 008号址
7. 009号址
8. 010号址
図版8. 1. 011号址
2. 014号址
3. 015号址
4. 017号址
5. 021号址
6. 021号址
7. 024号址
8. 026号址
図版9. 027号址全景
027号址掘り方全景
図版10. 027号址大刀検出状況
027号址検出土塙
図版11. 1. 027号址大刀確認状況
2. 027号址鍔出土状況
3. 027号址柄頭出土状況
4. 027号址周溝断面
5. 028号址全景
図版12. 上 029号址全景
右 029号址周溝断面
030号址全景
図版13. 上 031号址全景
右 031号址周溝断面
032号址全景
図版14. 033号址全景
034号址全景
図版15. 035号址全景
上 036号址全景
右 036号址周溝断面
図版16. 上 037号址全景
右 037号址遺物出土状況
038号址全景
図版17. 039号址全景
040号址全景
図版18. 遺構出土繩文土器(1)
図版19. 遺構出土繩文土器(2)
図版20. グリッド出土土器(1)第IV・IX・XI群土器
図版21. グリッド出土土器(2)第XII・XIII群土器
図版22. グリッド出土土器(3)第I・III群土器
図版23. グリッド出土土器(4)第I群土器
図版24. グリッド出土土器(5)第I群土器
図版25. グリッド出土土器(6)第I群土器

- 図版26. グリッド出土土器(7)第I群土器
- 図版27. グリッド出土土器(8)第I群土器
- 図版28. グリッド出土土器(9)第I群土器
- 図版29. グリッド出土土器(10)第II群土器
- 図版30. グリッド出土土器(11)第IV・V群土器
- 図版31. グリッド出土土器(12)第VI・VII群土器
- 図版32. グリッド出土土器(13)第VIII群土器
- 図版33. グリッド出土土器(14)第VIII・IX群土器
- 図版34. グリッド出土土器(15)第X・XI群土器
- 図版35. グリッド出土土器(16)第XII・XIII群土器
- 図版36. グリッド出土土製品・石製品
(土器片錐・土製円板・块状耳飾)
- 図版37. 先土器時代石器
- グリッド出土土器(1)
- 図版38. グリッド出土石器(2)
- 図版39. グリッド出土石器(3)
- 図版40. グリッド出土石器(4)
- 図版41. グリッド出土石器(5)
- 図版42. グリッド出土石器(6)
- 図版43. 027号址出土大刀・責金具・鐸・柄頭
- 図版44. 027・029・034・037号址出土遺物

I 序 説

1. 調査に至る経緯

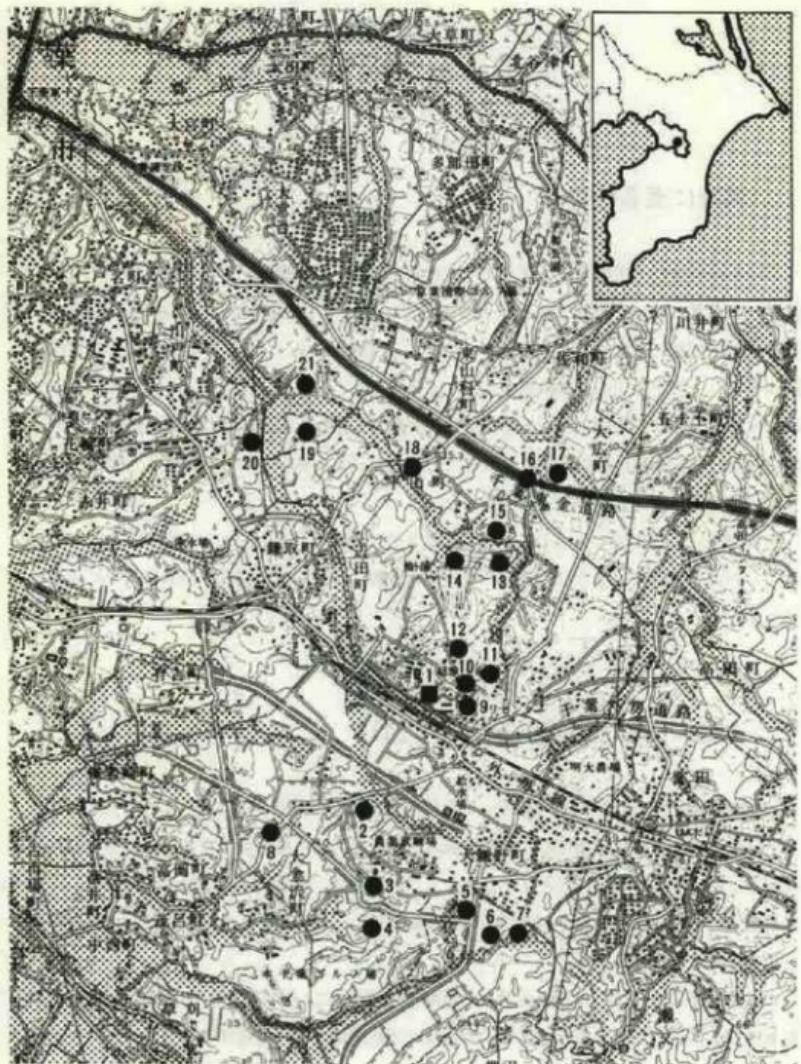
辺田山谷遺跡は、千葉県衛生部によって計画された小児医療センター建設工事に伴って、記録保存の対象となった遺跡である。千葉県衛生部によって小児医療センター建設予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会によって、千葉県教育庁文化課は試掘調査を行い、歴史時代の遺構が所在することを確認し、その旨回答した。本遺跡の取扱いについて千葉県教育庁文化課では、千葉県衛生部と協議を重ねた結果、現状保存は困難であるとの結論に達し、記録保存の措置がとられることになり、その機関として財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和59年9月1日から翌60年3月31日まで調査期間として実施した。同年4月1日からは発掘調査で得られた資料の整理から分類、分析を行い同年9月30日までに作業を終了した。

2. 遺跡の位置と環境（第1・2図）

辺田山谷遺跡は、千葉市辺田町579-1番地他及び同市吾田町1丁目25-3番地他にまたがって所在する。本遺跡は千葉市の中心街を流れ、東京湾に注ぐ都川の水系に属する支谷の、ほぼ最奥部に位置する台地上に占地する。また、この地点は、千葉市土気地区に源を発し、千葉市と市原市の境で東京湾に注ぐ村田川との分水嶺に近い。最も近接した村田水系の支谷最奥部とは直線距離で1km程となる。

本遺跡の周辺は、ほとんどの台地上に遺跡が確認されているが、特に村田川流域に近い千葉市東南部地区と市原市千原台地区は、大規模な宅地造成に伴い発掘調査が実施され、先土器時代から近世まで全ての時代の遺跡が検出されている。ただ、本遺跡で主体をなす縄文時代早期前半及び前期後半と歴史時代の方形区画墓は、本遺跡により近い支谷奥部に集中する傾向がある。縄文時代早期前半は押沼谷向遺跡(6)で、前期後半は押沼大穴天遺跡(5)、御塚台遺跡(8)、バクチ穴遺跡(4)等で確認されている。歴史時代の方形区画墓は東南部地区、千原台地区共に検出されているが、群として捉えられる遺跡は支谷奥部に占地する傾向が強い。東南部地区では、六通神社南遺跡(2)、大膳野北遺跡(3)、千原台地区では、押沼谷向遺跡(6)、押沼高谷遺跡(7)で検



1. 邊田山谷遺跡
2. 六浦神社前遺跡
3. 大膳野北遺跡
4. バラチ穴道遺跡
5. 押沼大六天遺跡
6. 押沼谷向遺跡
7. 押沼高谷遺跡
8. 御塚台遺跡
9. コロニー内遺跡
10. 脊田1丁目・山谷遺跡
11. 上深見沢遺跡
12. 辺田町・山谷遺跡
13. 中原古墳群
14. 長谷部貝塚
15. 原原古墳群
16. 平山古墳
17. 西水砂遺跡
18. 新山遺跡
19. 台烟古墳群
20. 豊名古墳群
21. 哲妻遺跡

0 (1:50,000) 2km

第1図 邊田山谷遺跡及び周辺主要遺跡位置図 (国土地理院「千葉」1:50,000使用)

出されている。こうしてみると、村田川水系に属する東南部地区及び千原台地区での支谷奥部の遺跡と本遺跡とは強い関連で捉えられるようである。

次に本遺跡が属する都川水系の遺跡をみてみると、本遺跡に隣接してコロニー内遺跡(9)がある。当遺跡は、昭和50年発掘調査が実施され、現在は県立袖ヶ浦養護学校と千葉県リハビリテーションセンターが建っている。検出された遺構は歴史時代の方形区画墓12基と勝坂式、阿玉台式、加曾利E式、加曾利B式等の縄文土器が出土している。菅田1丁目・山谷遺跡⑩は加曾利B式と土師器、辺田町・山谷遺跡⑪は縄文後期安行式、上深見沢遺跡⑫は加曾利E式と安行式が確認されている。

本遺跡の北から北西方向の支谷沿いには、縄文時代の遺跡として長谷部貝塚⑬(阿玉台・加曾利E・堀之内・加曾利B・安行II)、新山遺跡⑭(稻荷台・阿玉台・加曾利B)、吾妻遺跡⑮(諸磯・阿玉台・加曾利E・堀之内)等がある。また当地域は古墳が多く、中原古墳群⑯、塚原古墳群⑰、平山古墳⑱、西水砂古墳⑲、台畠古墳群⑳、菱名古墳群㉑等古墳時代後期の古墳群が多く認められる。当地域は発掘調査がほとんど実施されていないこともあり明確ではないが、縄文時代は中期から後期が主体を占めていると思われる。また後期古墳群は本遺跡とコロニー内遺跡とで検出された方形区画墓との関連が考えられるであろう。

3. 調査の方法と経過

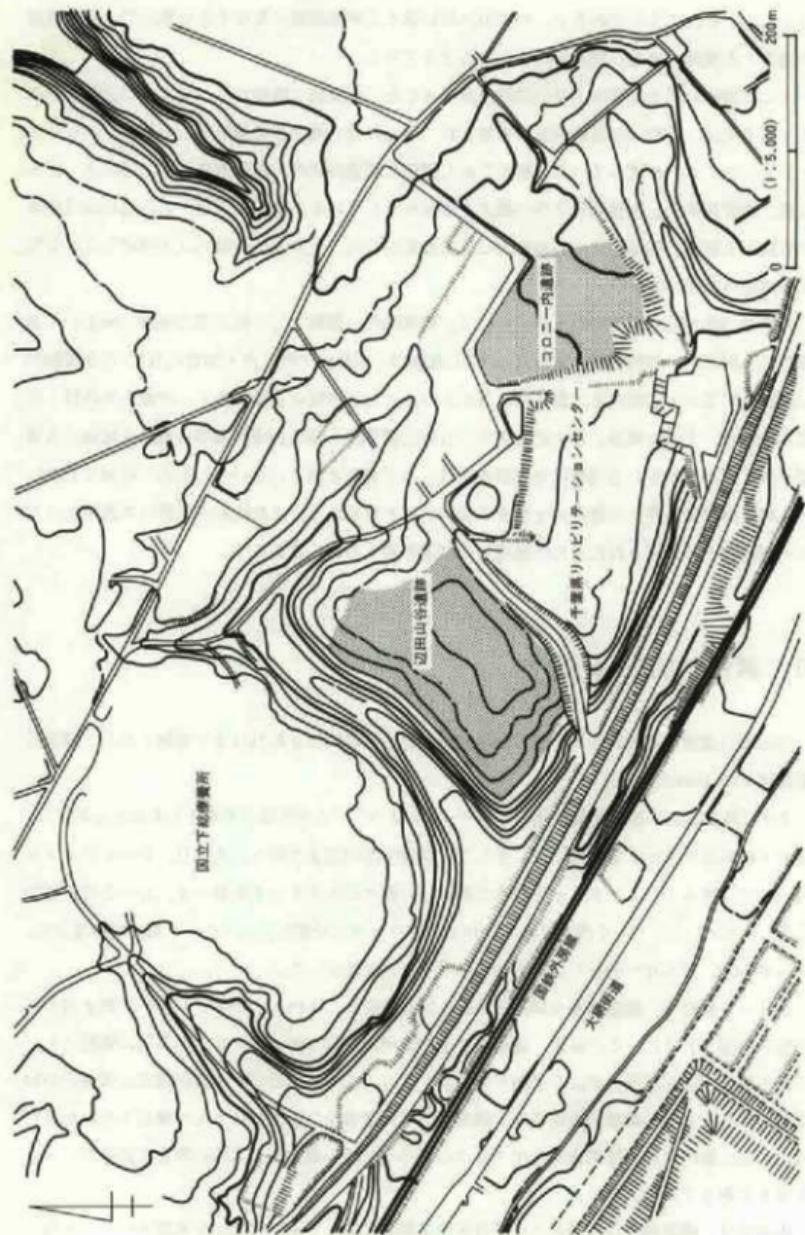
辺田山谷遺跡の発掘調査は、昭和59年10月1日から翌60年3月31日まで実施された。調査対象面積は27,000m²である。

まず、調査に先立ち調査範囲全体をカバーするように、公共座標を基準とし基準杭を設定し、40m×40mのグリッドを設定した。そして、調査区北西端より南へ、A、B、C…とアルファベットで、東へ1、2、3、…と数字で表示し、個々の大グリッドをB-1、C-2等と呼称した。さらに、大グリッド内を4m×4mの小グリッドに分割し、大グリッド北西端を基点に、南へ0～90、東へ0～09とし、計99個の小グリッドを設定した。

グリッド設定後、確認調査を調査区域の4%を目安に、4m×2mのグリッドで表土面から手掘りで掘り下げた。その結果、遺構及び遺物が検出されなかったグリッド周辺は重機によつて表土層を除却した後、やはり手掘りで掘り下げた。上層遺構に対する確認調査は調査区の10%となった。上層の確認調査終了後、調査区北半は遺構及び遺物がほとんど検出されなかったため、先土器時代の確認調査を2m×2mのグリッドで、調査区の4%の割合で武蔵野ローム上面まで掘り下げた。

本調査は、確認調査の結果から、調査区南半部を主体とする12,450m²を実施することとなっ

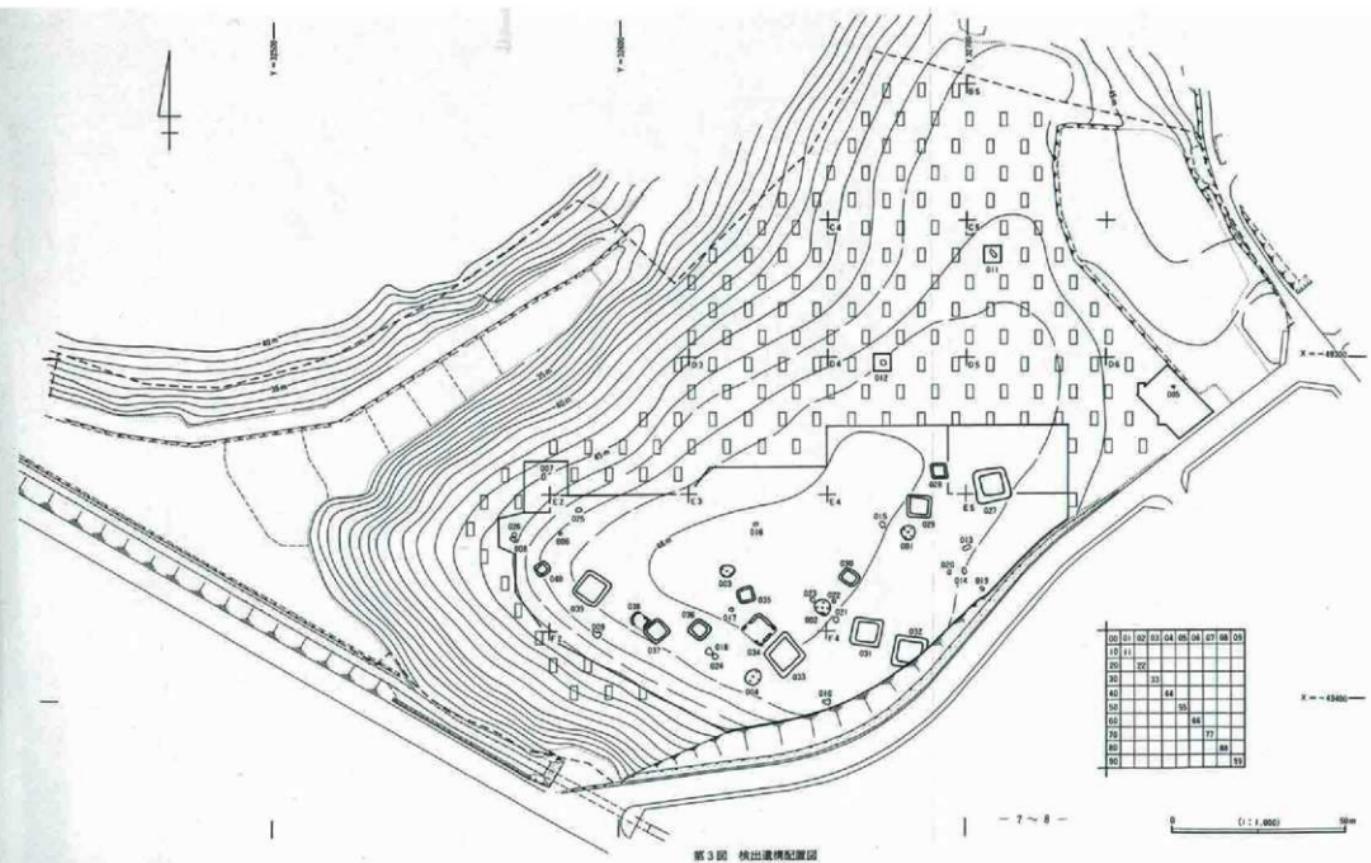
第2図 辺田山谷遺跡周辺地形図



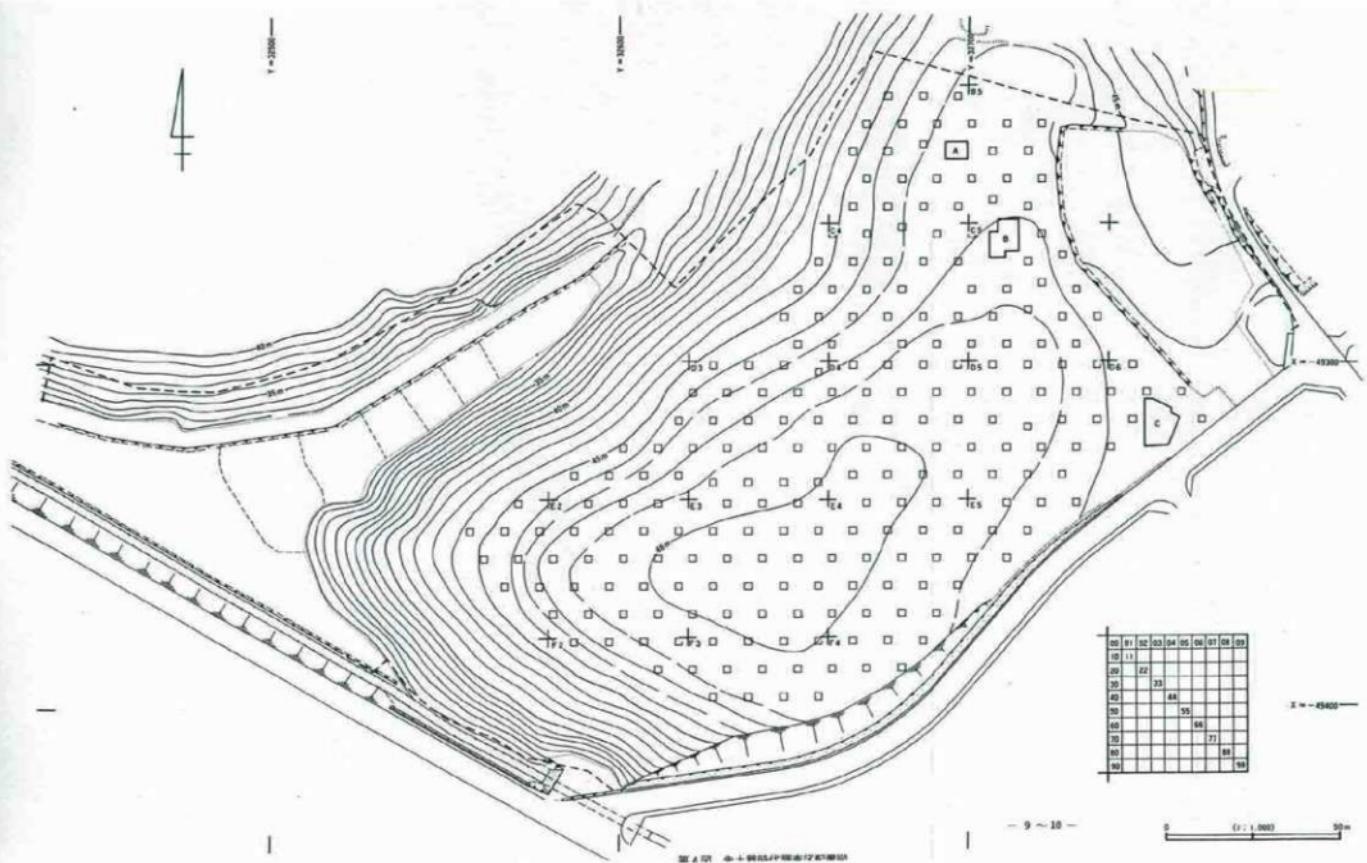
た。まず、確認調査で検出された方形区画墓を除いた地区について、重機による表土除去を行い、その後縄文時代遺物包含層の掘り下げを実施した。確認調査時に検出した方形区画墓については、十文字のセクションベルトを設定し、表土層から手掘りで掘り下げた。12月3日表土面から僅に20cm下で027号址から大刀が検出された。縄文時代遺物包含層の調査終了後、検出された縄文時代の遺構の精査に入った。

全ての遺構の精査終了後、調査区北半部で確認された3ヶ所の先土器時代遺物出土グリッドの拡張と掘り下げ、及び調査区南半部の先土器時代の確認調査に入ったが、南半部については全く遺構、遺物を検出することが出来なかった。

先土器C地点を最後に、全ての調査が終了した後、埋め戻しを行い旧状に復するとともに、撤収作業を行ない、現場における全ての作業を完了した。



第3図 掘出遺構配図



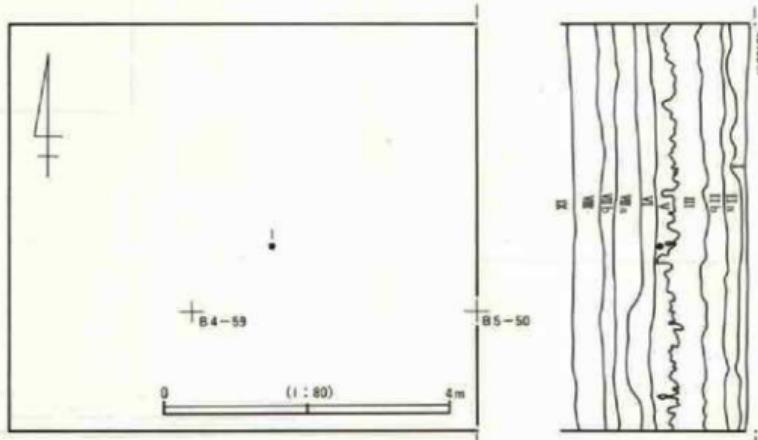
II 検出した遺構と遺物

1. 先土器時代

先土器時代の調査は、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドによる確認調査の結果、遺物の検出された3ヶ所のグリッドについて拡張し精査を行った。北からA地点、B地点、C地点と呼称した。

基本層位は次のとおりとした。

- I. 暗褐色土（表土層）
- IIa. 黒褐色土
- IIb. 褐色土
- III. 黄褐色軟質ローム
- V. 淡褐色硬質ローム（第1黒色帯）
- VI. 淡黄褐色硬質ローム（AT層）
- VIIa. 黄褐色硬質ローム
- VIIb. 暗褐色硬質ローム
- VIII. 黄褐色硬質ローム
- IX. 灰褐色軟質ローム（武藏野ローム）

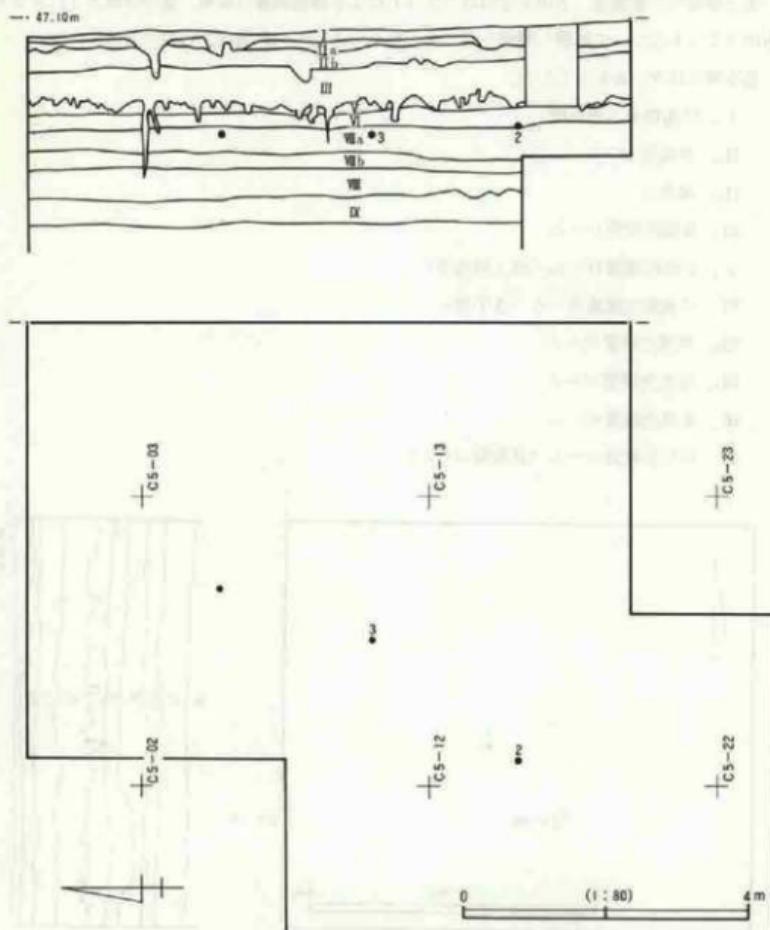


第5図 A地点遺物出土状況図

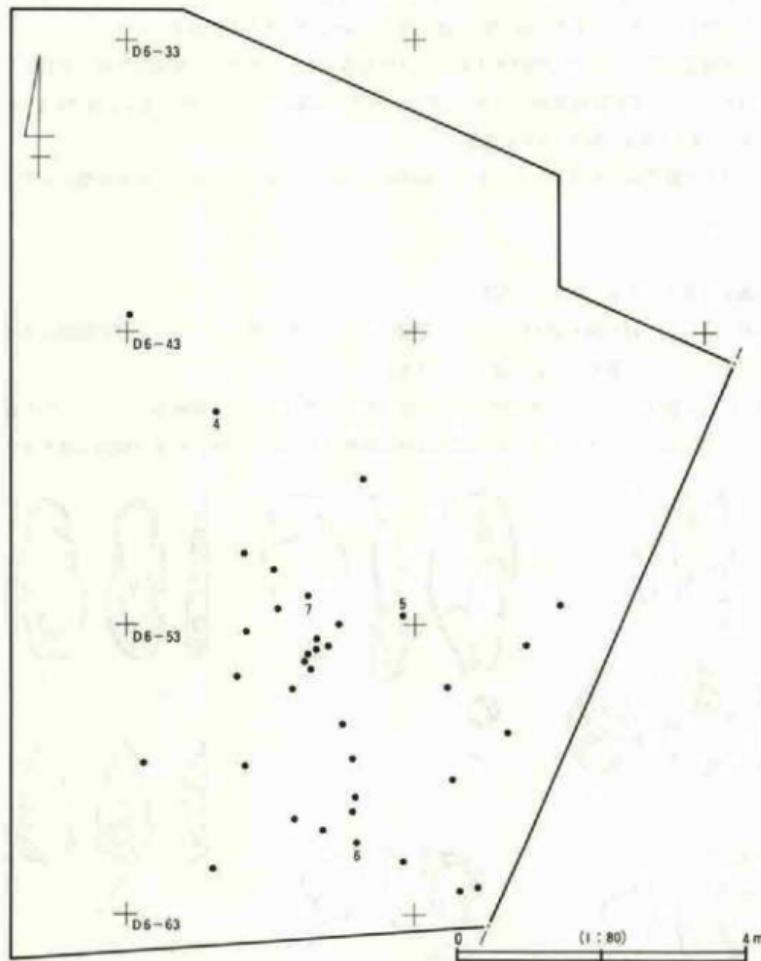
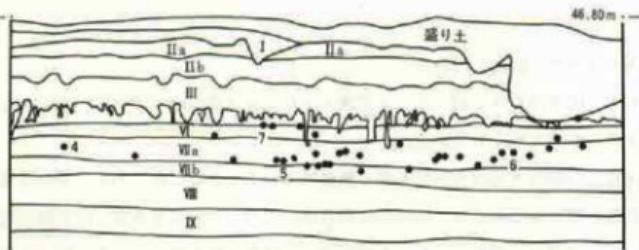
A地点（第5・8図、図版37）

本地点はB 4-49グリッドで検出されたもので、確認調査時に検出された1点のみである。

第8図-1はV層中位より出土したもので、珪質頁岩を石材とした小型の縦長剝片である。打開は点状打面であり、先端部は欠損している。稜上下方に部分的に刃こぼれに近い小剝離面がならんでいる他、特に使用痕は観察されない。長さ(2.9)cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.5gを測る。



第6図 B地点遺物出土状況図



第7図 C地点遺物出土状況図

B地点 (第6・8図、図版4・37)

本地点はC5-02及びC5-12グリッドで検出され、計3点出土している。3点ともVI層下位からVII層上位にかけて出土している。

第8-2図は、玄武岩を石材とした基部二側縁加工のナイフ形石器である。素材は縦長剝片で、打面は調整打面となっている。先端部は調査時に欠損したものである。背面側の剥離面の面構成より、上下両端より加撃されたことが判明し、両設打面を有する石刃石核より生産されたことが知れる。長さ4.8cm、幅2.3cm、厚さ1.0cm、重さ8.0gを測る。

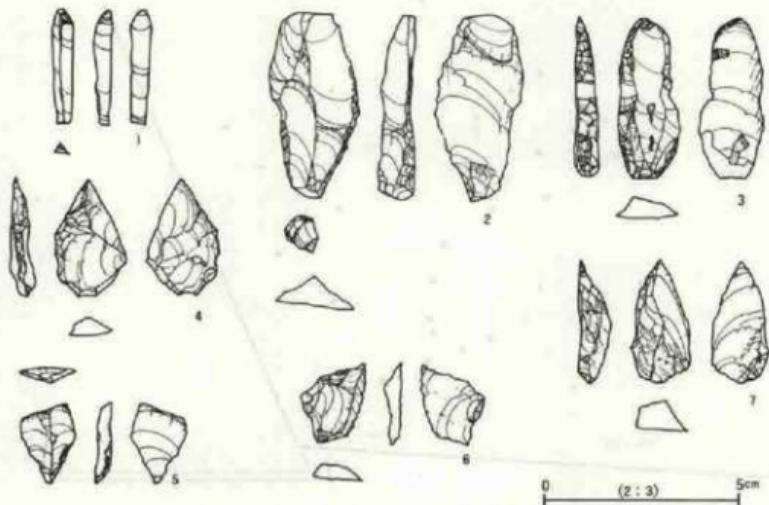
3は黒曜石を石材とした二側縁加工のナイフ形石器である。黒曜石は夾雜物を含むが良質で漆黒色を呈する。素材は縦長剝片であり、打面の形状は欠損しており不明である。長さ4.11cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ3.8gを測る。

2、3とも縦長剝片を素材としており、面構成より石刃石核より生産する技術基盤が反映されている。

C地点 (第7・8図、図版4・37)

本地点はD6-43・44・53・54グリッドで検出され、計35点出土している。出土層位はVIIa層を主体とし、上下層からも若干出土している。

第8図-4図は、チャートを石材として、横長剝片を素材とする一側縁加工のナイフ形石器である。刃部はシャープであり、刃こぼれは特に観察されない。全体の形状は切出し状を呈す



第8図 A・B・C地点出土遺物実測図

る。出土層位はVIIa層中位である。長さ3.0cm、幅1.3cm、厚さ0.6cm、重さ2.9gを測る。

5はチャートを石材として、幅広な縦削片を素材とするナイフ形石器である。先端部破片であるため、調整の程度は不明である。左側一側辺に連続的な刃こぼれが観察される。出土層位はVIIa層下位、長さ(2.1)cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.9gを測る。

6はチャートを石材として、横長削片を素材とする部分加工のナイフ形石器である。刃部は背面側の右側一側縁にあたる。打面は、線状であり、破碎している。VIIa層上位の出土で、長さ2.1cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.0gを測る。

7はチャートを石材とし、横長削片を素材とする一側縁加工のナイフ形石器である。調整は急角度であり、ほぼ直角に近い。刃部はシャープであり、刃こぼれは観察されない。出土層位はV層とVI層の境あたりで、長さ3.2cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm、重さ3.1gを測る。

他に31点出土しているが、全てチャートを石材とした削片である。

2. 繩文時代

本遺跡で検出された縄文時代の遺構は、住居址4軒(001号址～004号址)、埋甕土塙2基(005・006号址)、炉穴4基(007号址～010号址)、陷穴状土塙8基(011号址～018号址)、土塙8基(019号址～026号址)である。全体に台地南西部から南辺の縁辺部で検出されている。縄文式土器の分布も同様な傾向である。

001(021)号址(第9・10図、図版5・18)

(位置) E4-25・35グリッドを主に位置する。

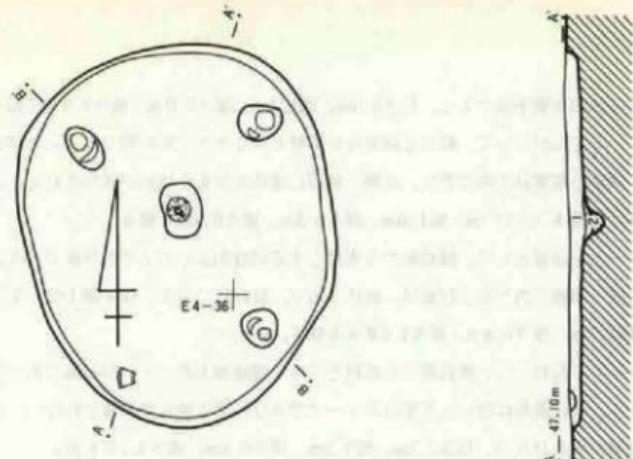
(遺構) 長軸3.95m、短軸3.20mの楕円形プランを呈する住居址である。検出面から床面までの深さは15cmを測る。中央部に地床炉が、柱穴は3本検出され、各々中段を有している。床面は一部硬化面がみられるが、全体に軟質である。

(遺物) 床面より若干浮いた状態で30点の縄文土器が出土している。

1は口唇部、体部全面にR Lの斜縄文(縦方向)が施された深鉢形土器である。口辺には太い鋸歯状沈線も廻らされている。4単位の小突起を有する口縁をなすとみられるが、その突起部にも沈線文が加えられている。

2は体部全面に斜縄文(R L方向)のみられる深鉢状土器である。平縁をなし、上端で肥厚・外反してラッパ状に開く器形を呈している。口唇は平坦である。

3は無文部で、球状に膨らむ口縁をなす。平坦で中広の口唇部には太い平行沈線がみられる。外面はよく研磨されている。

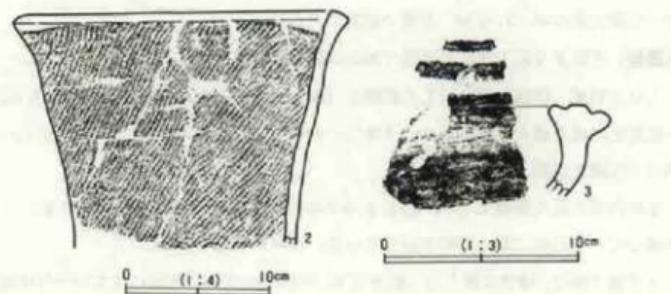


1. 墓褐色土(ローム粒微含)
2. 黒褐色土(ローム粒・埃土粒微含)

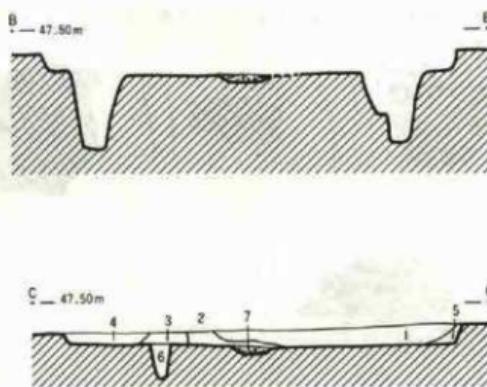
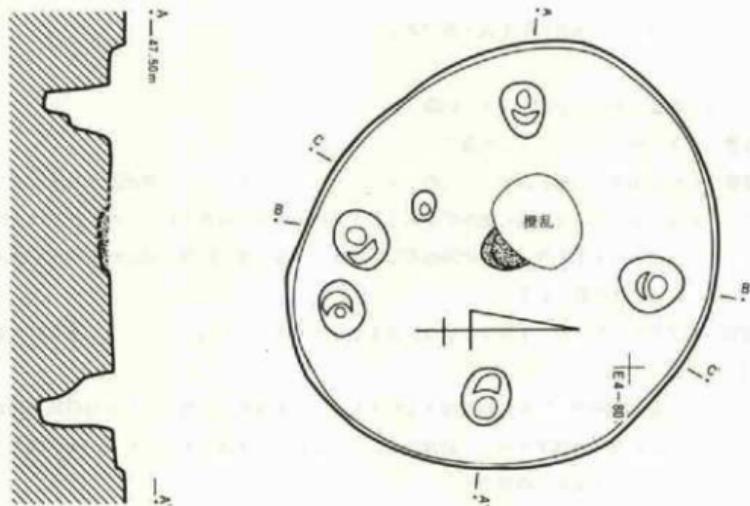


第9図 001号址実測図

0 (1:60) 2m



第10図 001号址出土遺物実測図



- 1. 灰黄色土(ソフトロームブロック中含)
- 2. 灰黑色土(ソフトロームブロック、焼土粒微含)
- 3. 噴灰色土(ソフトロームブロック中含)
- 4. 噴灰色土(ソフトロームブロック微含)
- 5. 黄灰色土(ソフトロームブロック多含)
- 6. 灰黑色土
- 7. 燃土

0 (1 : 60) 2m

第11図 002号址実測図

1～3とも第XII群の加曾利E I式土器である。

002 (032) 号址 (第11・12図 1～4、図版 5)

(位置) E 3—89グリッドを主に位置する。

(遺構) 長軸4.70m、短軸4.10mの梢円形プランを呈する住居址である。検出面から床面までの深さは20cmを測る。ほぼ中央に地床炉があるが半分以上擾乱で破壊されていた。柱穴は主柱穴が4本、支柱穴が1本あり、各々中段を有している。床面は柱穴内側に部分的に硬化面がみられるが、全体には軟質である。

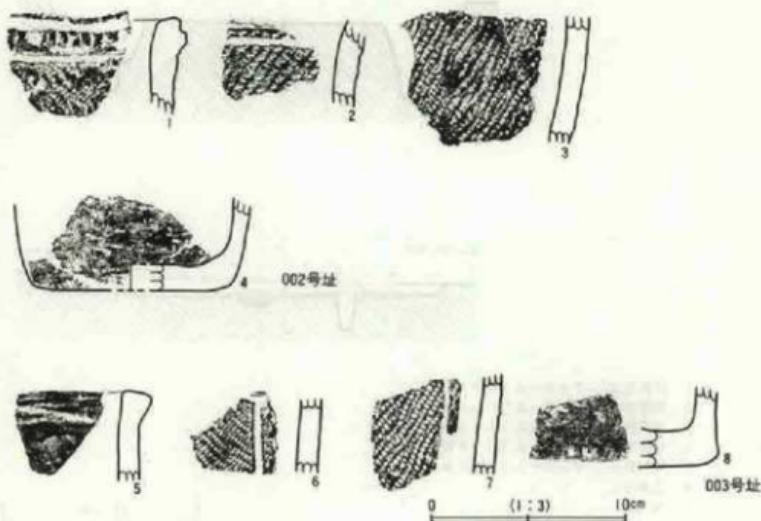
(遺物) 繩文早期前半9点、中期後半17点が出土し、その内4点を図示した。全て第XII群土器に属するものである。

1は口辺に横位の隆帯（刻文列が付加される）を有する口縁部片で、地文にL Rの斜縄文を有する。2、3は縦位の斜縄文を有する脇部片で、2には横位の沈線文もみられる。4は底部である。4点とも覆土上層から中層の出土。

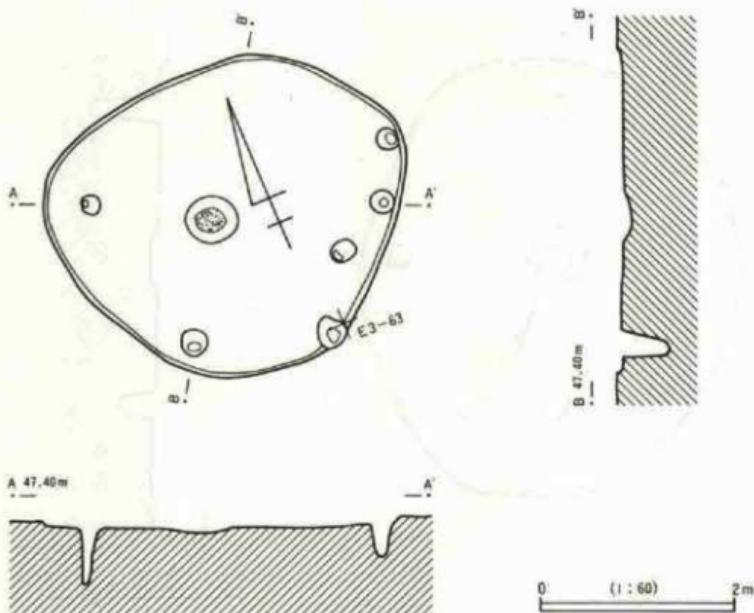
003 (028) 号址 (第12図 5～8・第13図、図版 6)

(位置) E 3—52グリッドを主に位置する。

(遺構) 長軸3.85m、短軸3.15mのやや不整の梢円形プランを呈する住居址である。検出面か



第12図 002・003号址出土遺物実測図



第13図 003号址実測図

ら床面までの深さは15cmを測る。中央やや西よりに地床炉がある。柱穴は主柱穴3本、支柱穴3本の計6本検出されている。中段は全て有していない。床面は部分的に硬化面があるが、全体に軟質である。

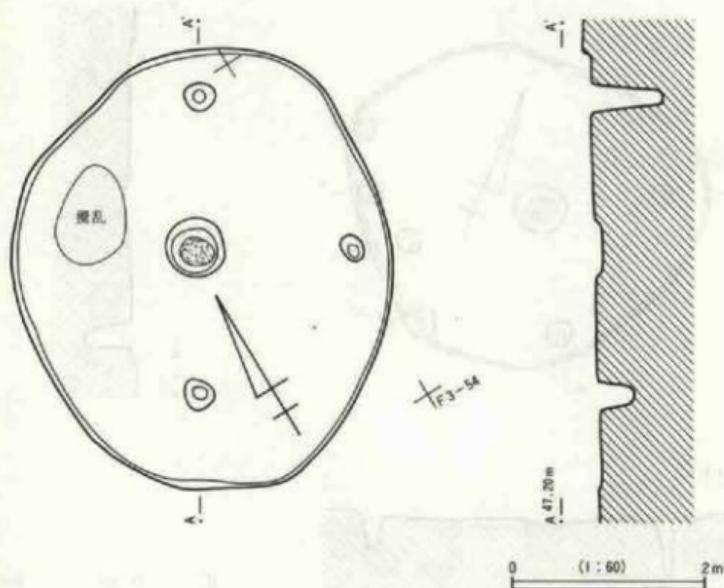
(遺物) 繩文前期後半10点、中期後半9点、黒曜石片12点が出土し、図示したものは4点で、第Ⅲ群土器である。全て覆土中層からの出土。

6は無文の口縁部で、外面はよく研磨されている。7、8は繩文を地文に継位の沈線がみられる。8は底部である。

004 (029) 号址 (第14図、図版6)

(位置) F 3-43グリッドを主に位置する。

(構造) 長軸4.50m、短軸3.95mの楕円形プランを呈する住居址である。検出面から床面までの深さは10cmを測る。中央部に地床炉、柱穴は3本検出されている。床面は中央付近の極く一部に硬化面がみられるのみで、全体に軟質である。



第14図 004号址実測図

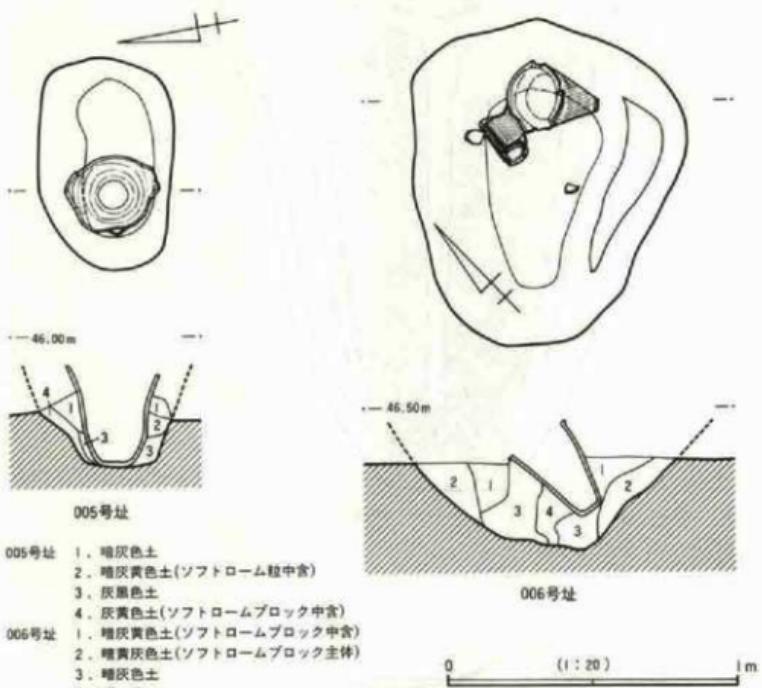
（遺物）覆土より第I群、V群及び時期不明土器が11点出土しているが、全て細片のため図示はしていない。

005 (036) 号址 (第15・16図、図版7・18)

（位置）D 6—25グリッドを主に位置する。

（造構）土器を埋設した土塙で調査上のミスで掘り下げ過ぎたため、長軸73cm、短軸47cm、深さ18cmであるが、本来は長軸90cm以上、短軸60cm以上、深さ37cm以上はあったものと思われる。土塙の立ち上がりは緩やかで、底面は凹凸があり、しっかりした掘り込みではない。埋設土器は土塙の西寄りに置かれ、底面に密着していた。

（遺物）口縁の上半を欠く深鉢形土器で、推定径35cm、現高は37cmである。縄文を地文に口縁部に横位区画、胴部に縦位無文帯が配されている。第Ⅲ群の加曾利E III式に属するものと思われる。



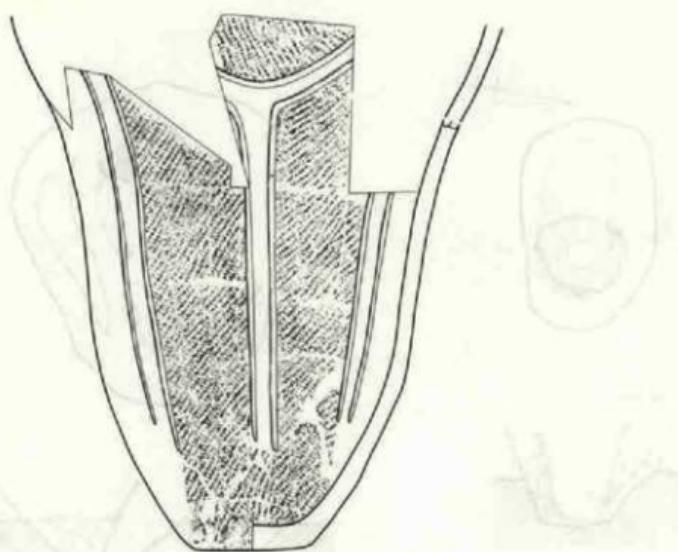
第15図 005・006号址実測図

006 (035) 号址 (第15・16図、図版7・18)

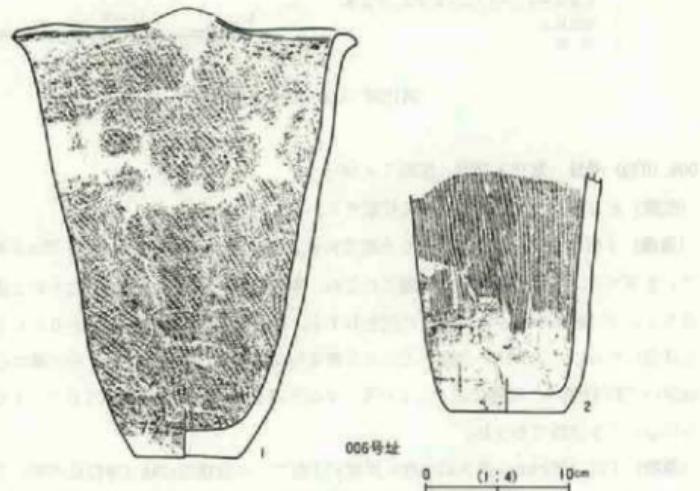
(位置) E 2-20グリッド南東端に位置する。

(遺構) 2個体の土器が埋設された土塙である。長軸110cm、短軸95cm、深さ32cmを測る卵形プランを呈する。本遺構も掘り下げ過ぎたため、本来は深さ45cm以上はあったものと思われる。立ち上がりは緩やかで、南東壁には段を有する。底面は凹凸があり、しっかりととした掘り込みとは言いたい。2個体の土器が土塙の北東寄りに埋設されていたが、1の土器は底面から10cm浮いて45°傾いた状態で出土している。2の土器も底面から5cm浮いており、1の土器に潜り込むような状態であった。

(遺物) 1は口径24cm、高さ31cm程の深鉢形土器で、小波状の口縁（単位は不明）をなしている。口唇部は平坦で、外面側に肥厚し、口縁が緩やかに外反する。文様は器表全面に斜繩文が縦位に施文されるのみである。



005号址



006号址

0 (1 : 4) 10cm

第16圖 005・006号址出土遺物実測図

2は胴部下半部が残存したもので、現高16.5cm、筒形の器形をなしている。縦位の条線文が密接施文されており、底部付近は無文部になる。

1、2とも第Ⅲ群中の加曾利E I式土器に含まれられる。

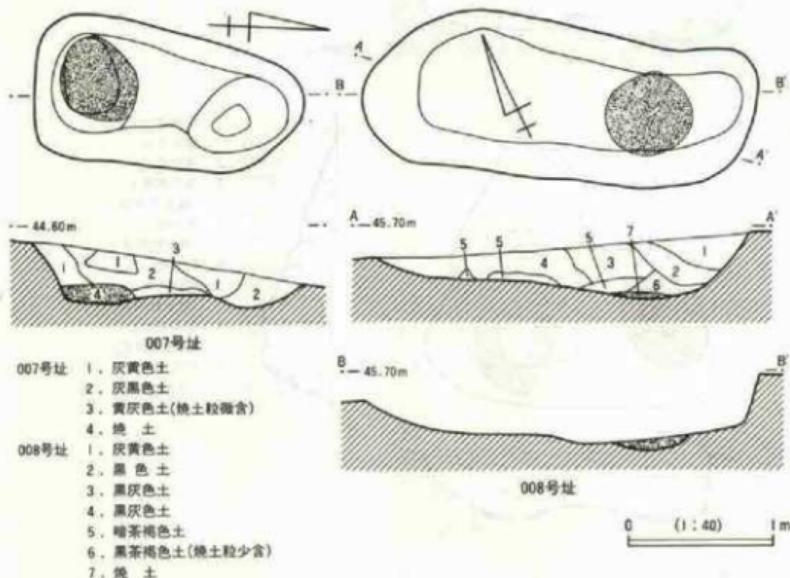
007 (041) 号址 (第17図、図版7)

(位置) 北西方向に緩やかに傾斜するD 1-89グリッドに位置する。

(遺構) 長軸1.57m、短軸0.99m、深さ37cmを測る炉穴である。壁は全体に緩やかに立ち上り、底面は二ヶ所窪んでいるが、焼土は一ヶ所に認められた。重複関係は認められない。

(遺物) 覆土中から遺物は出土していない。

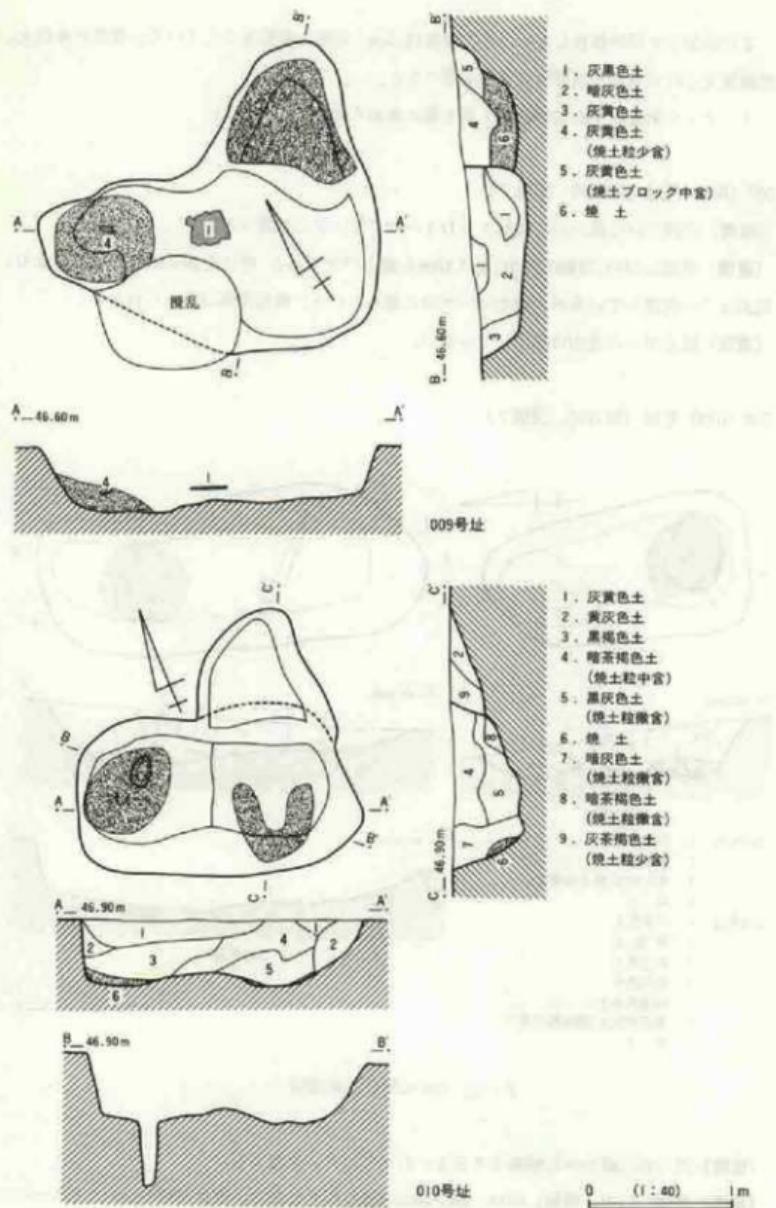
008 (023) 号址 (第17図、図版7)



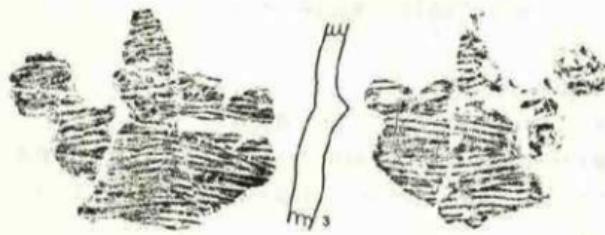
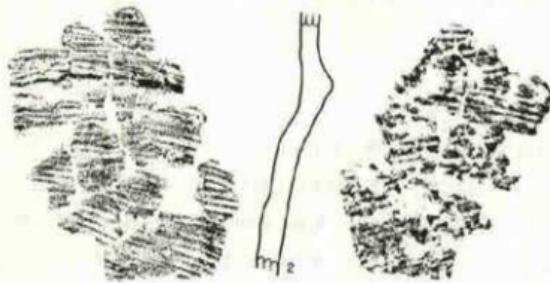
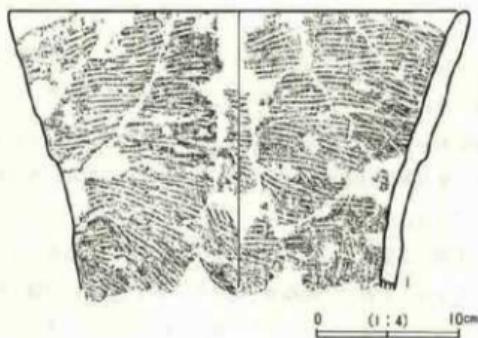
第17図 007・008号址実測図

(位置) 西方向に緩やかに傾斜するE 1-37グリッドに位置する。

(遺構) 長軸2.74m、短軸1.08m、深さ40cmを測る炉穴である。壁は西壁を除いて緩やかに立ち上る。炉底に10cm程の厚さで焼土が堆積していたが、底面・壁面とも焼けていなかった。



第18図 009・010号址実測図



0 (1 : 3) 10cm

第19圖 009號址出土遺物實測圖

(遺物) 出土遺物なし。

009 (015) 号址 (第18・19図、図版7・19)

(位置) 南西方向に緩やかに傾斜するF2-03グリッドに位置する。

(遺構) 北西-南東軸2.48m、北東-南西軸2.20m、深さ40cmを測る炉穴である。壁は45°程の立ち上りを呈す。2基の重複関係が認められ、北西-南東軸方向の炉穴の方が新しい。2ヶ所の焼土下の底面は焼けていた。

(遺物) 第III群・茅山上層式が出土した。1は底面より7cm程浮いた状態で出土し、内外面に貝殻条痕文の施された深鉢形土器で、径32cm、現存高20cm程を測る。口縁下端を隆帯で廻らせず区切っている。2、3は同一個体のもので、内外面に条痕文をもつ。また「くの字」形に屈曲し、隆帯が形成されている。4は焼土中より出土し、内外面に条痕文のみられる口縁部片である。

010 (027) 号址 (第18図、図版7)

(位置) 調査区南縁辺部のF3-59、F4-50グリッドに位置する。

(遺構) 2基重複した炉穴で、北西-南東に主軸をもつ炉穴が、北東-南西に主軸をもつ炉穴より新しい。新しい炉穴は長軸2.05m、短軸1.09m、深さ35~45cmを測る。焼土は西寄りに厚さ7cm程ある。焼土下に径22cm×13cm、深さ45cmのピットが認められた。古い炉穴は長軸1.84m、短軸0.95m、深さ23~45cmを測る。南寄りに薄く焼土が残っていた。

(遺物) 覆土中から稻荷台式土器22点、条痕文系土器2点出土。

011 (042) 号址 (第20図、図版8)

(位置) 調査区北半のC5-21・22グリッドに位置する。

(遺構) 長軸2.19m、短軸0.88m、深さ63cmを測る陥穴状遺構である。平坦な底面に径30cm程のピットが掘り込まれている。北寄りのピットは掘り込みが明瞭でなく、また浅いこともあり擾乱の可能性もある。

(遺物) 出土遺物なし。

012 (040) 号址 (第20図)

(位置) 調査区中央部D4-03・04グリッドに位置する。

(遺構) 長軸1.43m、短軸1.12m、深さ0.68mを測り、横円形プランを呈する。形態・覆土から陥穴状遺構と思われる。底面に厚さ4cm程の固くしまった黒灰色土層がみられる。

(遺物) 出土遺物なし。

013 (020) 号址 (第20図)

(位置) E 5-40グリッドを主に位置する。

(遺構) 長軸2.50m、短軸1.13m、深さ0.94mの長楕円形プランを呈する陥穴状遺構である。底面に径35cm程、深さ45~53cmの隅丸方形プランのピットが2基掘り込まれている。

(遺物) 遺構確認面で加曾利E式土器1点出土。

014 (018) 号址 (第20図・図版8)

(位置) E 4-59、E 5-50グリッドに位置する。

(遺構) 長軸1.85m、短軸0.79m、深さ0.53mの隅丸長方形プランを呈する陥穴状遺構である。底面に径35cm~40cm、深さ25cmの円形に近いプランをもつピットが2基掘り込まれている。

(遺物) 出土遺物なし。

015 (037) 号址 (第20図・図版8)

(位置) E 4-23・24グリッドに位置する。

(遺構) 長軸1.67m、短軸1.25m、深さ0.87mの不整楕円形プランを呈する。形態・覆土から陥穴状遺構と思われる。ソフトローム面の壁は崩壊のためか外に開いている。

(遺物) 出土遺物なし。

016 (033) 号址 (第20図)

(位置) E 3-24グリッドに位置する。

(遺構) 長軸1.36m、短軸0.93m、深さ0.83mの楕円形プランを呈する陥穴状遺構である。底面中央寄りに径23cm、深さ28cmのピットが1基掘り込まれている。ソフトローム面の壁は崩壊のためか外に開いている。

(遺物) 出土遺物なし。

017 (024) 号址 (第20図、図版8)

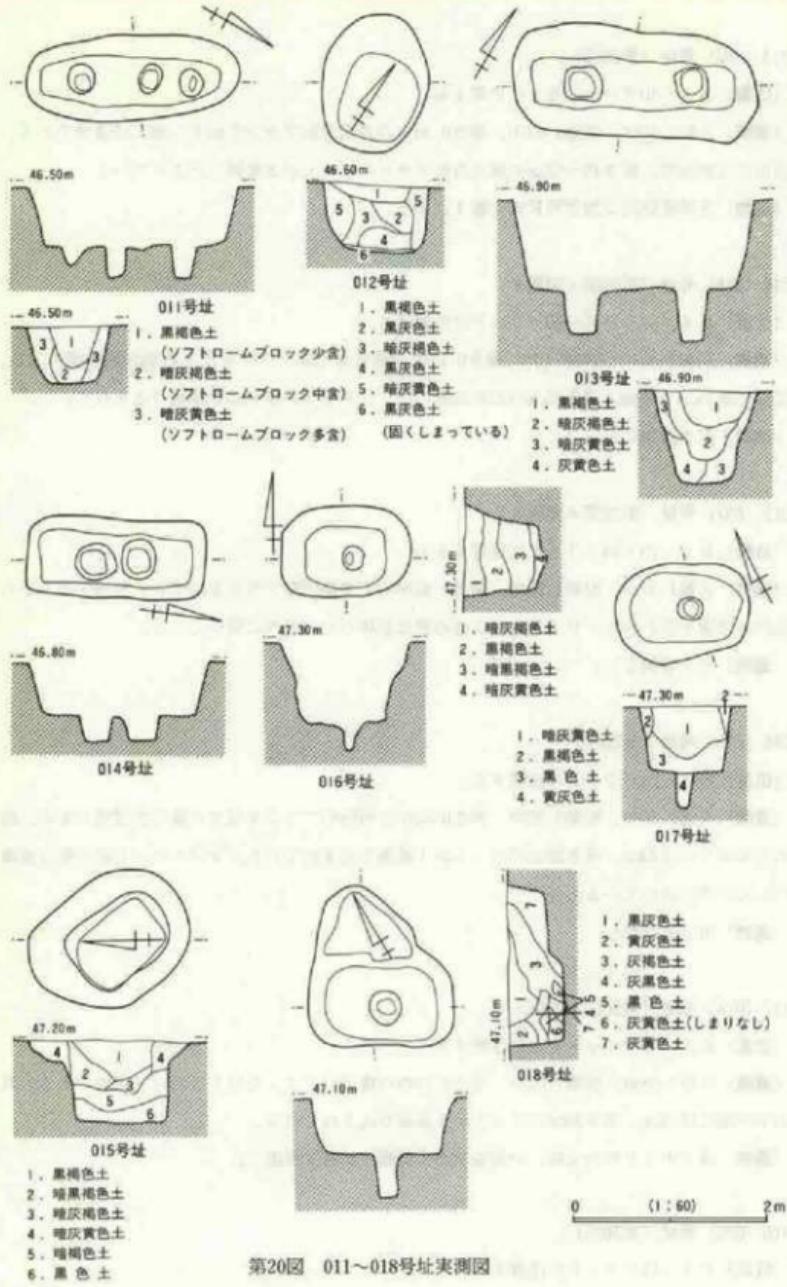
(位置) E 3-83グリッドを主に位置する。

(遺構) 長軸1.38m、短軸1.02m、深さ0.70mの楕円形プランを呈する陥穴状遺構である。底面中央部に径25cm、深さ35cmのピットが1基掘り込まれている。

(遺物) 覆土中より撚糸文期、中期後半の土器細片が各1点出土。

018 (026) 号址 (第20図)

(位置) F 3-11グリッドに位置する。



第20図 011～018号址実測図

(遺構) 長軸1.52m、推定短軸0.95m、深さ0.57mの楕円形プランを呈する階穴状遺構である。中央部に径35cm、深さ45cmのビットが1基掘り込まれている。北側に15cm程高い底面をもつ張り出しがある。底面は若干凹凸があるが、壁の立ち上りはしっかりしている。セクション面での重複関係は認められず、一概に攢乱と処理することは出来ない。

(遺物) 出土遺物なし。

019 (019) 号址 (第21図)

(位置) F 5—61・71グリッドに位置する。

(遺構) 長軸1.68m、短軸1.33m、深さ0.34mを測り、楕円形プランを呈する土塙である。覆土及び周辺の遺物出土状況から縄文期の所産である可能性が強い。

(遺物) 出土遺物なし。

020 (017) 号址 (第21図)

(位置) E 4—58グリッド南東部に位置する。

(遺構) 長軸1.11m、短軸0.95m、深さ0.45mを測り、やや楕円形プランを呈する土塙である。覆土及び周辺の遺物出土状況から縄文期の所産と思われる。

(遺物) 覆土中より加曾利E式土器細片2点出土。

021 (031) 号址 (第21・22図1~3、図版8・19)

(位置) E 4—91グリッド北東端に位置する。

(遺構) 長軸1.72m、短軸1.57m、深さ0.58mの不整円形プランを呈する土塙である。底面はほぼ平坦で、北東部に径53cm、深さ55cmのビットが1基掘り込まれている。北東壁は若干オーバーハングしている。覆土中層に焼土層がブロック状に認められる。

(遺物) 縄文式土器が3点出土している。1は底部で縄文のみが施文されている。2は口縁部で、横位の縄文(R L)を地文に沈線で曲線文の描かれるもの。3は地文の縱方向の縄文に、平行沈線で無文帯が入れられるもの。

1・3は第XII群土器、2は第XIII群土器に含められる。

022 (030) 号址 (第21図)

(位置) E 4—80グリッド北西部に位置する。

(遺構) 東西・南北ともに径1.00m、深さ40cmを測る不整円形プランの土塙である。底面はほぼ平坦である。覆土及び周辺の遺物出土状況から縄文期の所産である可能性が強い。

(遺物) 覆土中より稻荷台式土器3点、縄文中~後期土器2点が出土。



第21図 019~026号址実測図

023 (034) 号址 (第21図)

(位置) E 3-78・79グリッド南端に位置する。

(遺構) 長軸1.64m、短軸1.18m、深さ0.48mを測る楕円形プランの土塙である。底面はほぼ平坦である。覆土及び周辺の遺物出土状況から縄文期の所産と思われる。

(遺物) 出土遺物なし

024 (025) 号址 (第21図、図版8)

(位置) F 3-11グリッドを主として位置する。

(遺構) 長軸1.72m、短軸1.54m、深さ0.40mの楕円形プランを呈する土塙である。底面はほぼ平坦である。覆土及び周辺の遺物出土状況から縄文期の所産と思われる。

(遺物) 覆土中より、燃系文期土器2点、条痕文系土器1点、前期後半土器1点が出土。

025 (044) 号址 (第21図)

(位置) E 2-12グリッドを主に位置する。

(遺構) 長軸1.97m、短軸1.48m、深さ0.33mの楕円形プランを呈する土塙である。底面はほぼ平坦である。覆土及び周辺の遺物出土状況から縄文期の所産と思われる。

(遺物) 覆土中より条痕文系土器1点出土。

026 (022) 号址 (第21図、22図4、図版8・19)

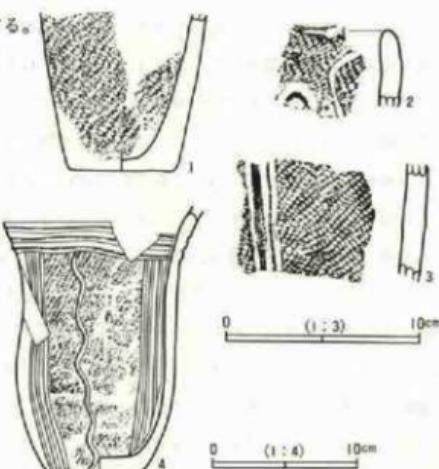
(位置) E 1-27・37グリッドに位置する。

(遺構) 長軸1.21m、短軸1.05m、深さ0.50mを測る楕円形プランを呈する土塙である。底面はほぼ平坦である。

(遺物) 底面から3cm程浮いた状態で土器が出土している。深鉢土器で口縁部を欠いている。

現高は18cmを測る。縦位RLの縄文を地文に、頸部を横位の平行沈線、胴部を縦位の平行沈線で区画しており、縦区画内には懸垂文が配されている。

第Ⅱ群の加曾利E I式土器に概当するものである。



第22図 021-026号址出土遺物実測図

3. 歴史時代

027 (001) 号址 (第23~25図、図版9~11・43・44)

〈位置〉 D 5-91・92グリッドを主に位置する。

〔遺構〕 東西9.35m、南北9.70m*、周溝幅1.40~2.00m、深さ0.60~0.70mを測り、溝を正方形に近いプランで巡らしている。溝の北辺と東辺には壁面中段に若干テラス状の平坦部がみられる。周溝内側からは7基の土塙状の落ち込みが検出された (A~G)。

Aは長軸1.11m、短軸0.59m、深さ0.25mの長方形プランを呈する。東側コーナー部に深さ0.10mのビットが掘り込まれている。底面はやや凹凸があり、少量の炭化材が出土しているのみである。3層下から掘り込まれている。

Bは長軸1.30m、短軸1.23m、深さ0.24mの楕円形プランを呈する。底面は凹凸が多い。少量の炭化材のみ出土している。3層下から掘り込まれている。

Cは径0.67m×0.73m、深さ0.27mの円形プランを呈する。3層下から掘り込まれ、覆土に少量の炭化粒を含むが、遺物は出土していない。

Dは長軸0.78m、短軸0.72m、深さ0.28mの楕円形プランを呈する。3層下から掘り込まれ、覆土中には炭化材を少量含むが、遺物は出土していない。

Eは径0.55m、深さ0.32mの円形プランを呈する。中層から土師器細片1点が出土している。3層下から掘り込まれ、土塙Fによって切られている。

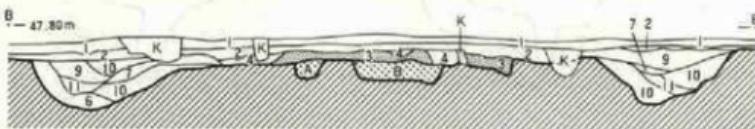
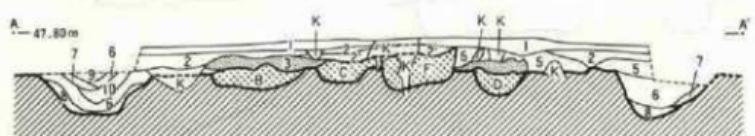
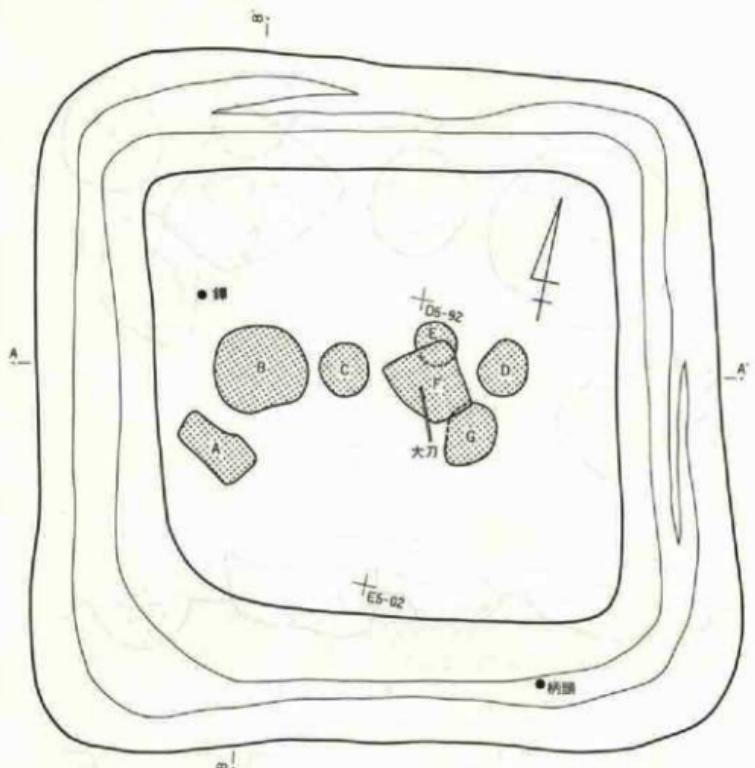
Fは長軸1.02m、短軸0.58~0.98m、深さ0.45mを測り、梯形プランを呈する。底面はやや凹凸があり、長軸0.70m、短軸0.38m、深さ0.48mの長楕円形プランを呈するビットがある。3層を掘り込んで構築されている。また土塙E・Gを切っている。土塙内からは、上層で大刀と土師器・須恵器破片及び炭化材が多く出土している。底面近くでも大刀に付属する資金具や須恵器破片が出土している。ビット内からは遺物は出土していない。

Gは長軸0.94m、短軸0.74m、深さ0.37mの不整楕円形を呈する。底面は凹凸が多い。3層下から掘り込まれ、若干Fによって切られている。中層から須恵器片が1点出土している。

本遺構で認められる3層は、028号以降で認められる旧表土層である3層と、色調や上面が硬化していることなど、極めて類似しているが、土塙F以外は全て3層下から掘り込まれているため、本遺構の3層は当時の表土層を使用した盛り土層と思われる。また周溝堆積土層の10層はソフトロームブロックを多く含むことから、墳丘盛り土の流れ込みと思われる。

〔遺物〕 周溝内側や周溝内から須恵器(壺4個体以上・壺10点)、土師器(壺3個体以上・壺24点)及び大刀とそれに付属する金具が出土している。須恵器・土師器は全て小破片の出土で接合するものは少なかった。ただ周溝外の遺物と接合するものが認められた。

*027号址以降の平面図はソフトローム堆積層面で圧縮したため、現表土面を残したセクションとでは辺の規模・溝幅等で違いがあるため、平面図からの数値は()で表わした。



土層説明 1. 増灰色土(現表土層)

2. 増灰褐色土

2'. 増茶褐色土(固くしまる)

3. 黒色土(上面硬化)

4. 黒褐色土

5. 明茶褐色土

6. 増灰褐色土

7. 増褐色土

8. 増灰色土(ソフトロームブロック含)

9. 黒色土

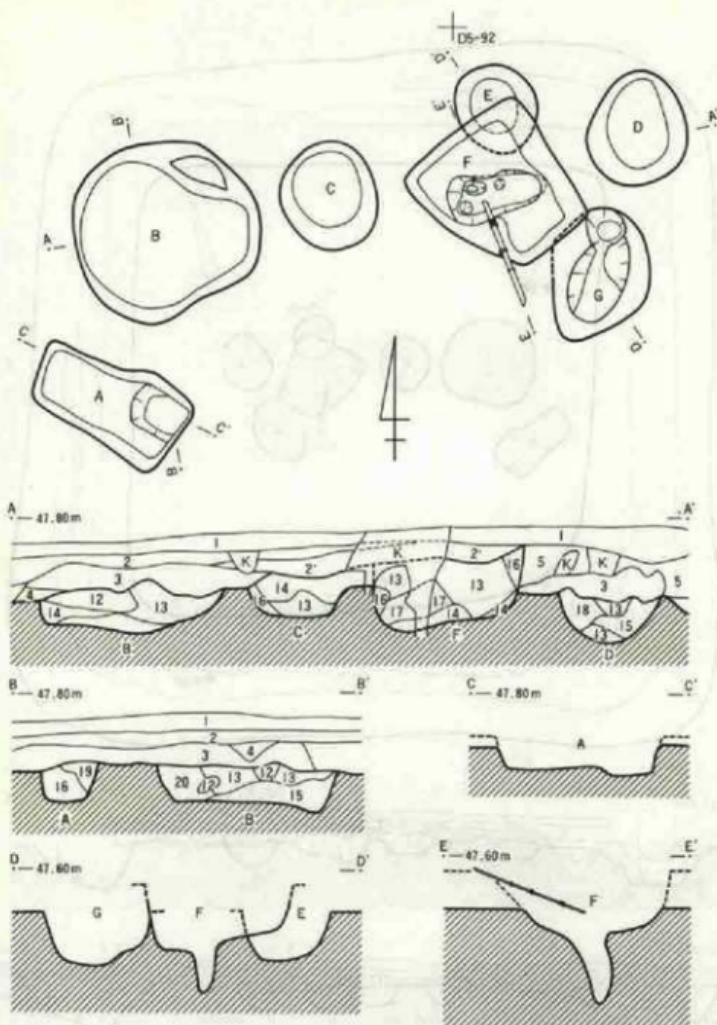
10. 増灰色土(ソフトローム漸移層ブロック含)

11. 黒灰色土

K. 摘乱

0 (1:80) 4m

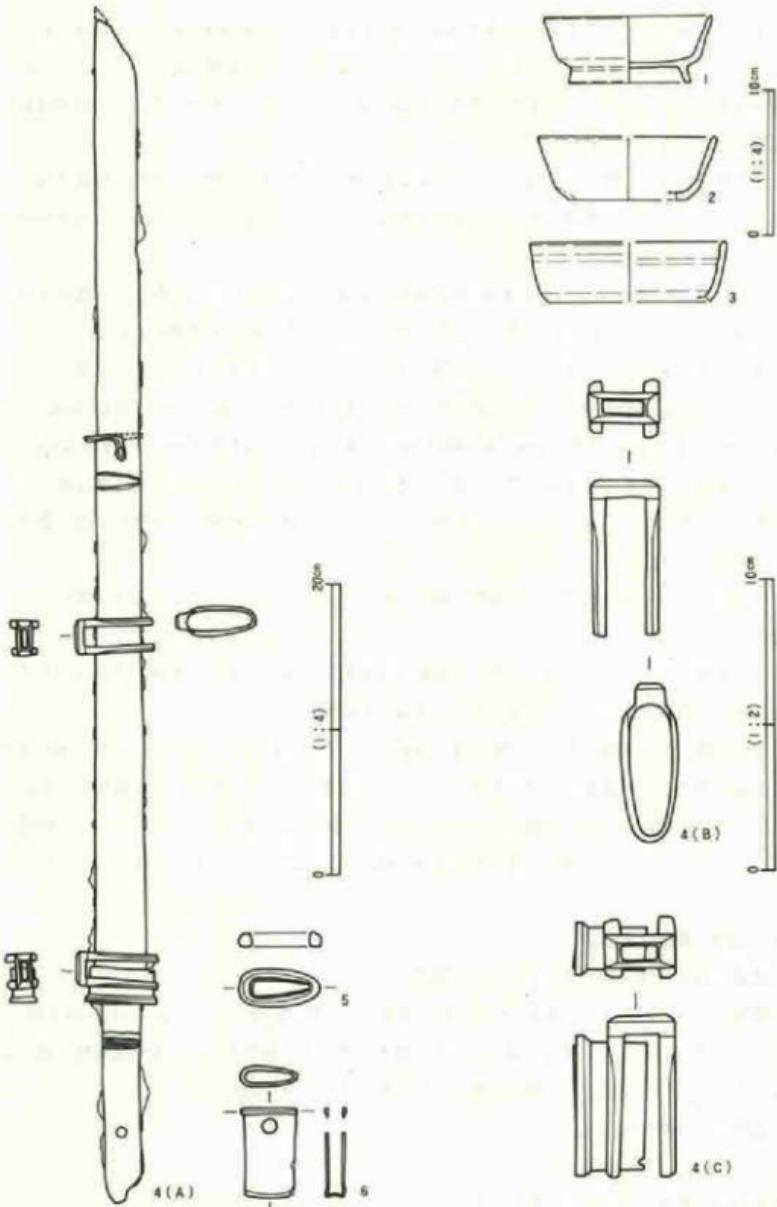
第23図 027号址実測図(1)



- 土層説明 12. 焼土
 13. 黒灰色土(カーボン粒微含)
 14. 單灰褐色土(ソフトロームブロック・カーボン粒微含)
 15. 單灰褐色土(ソフトロームブロック・カーボン粒少含)
 16. 單茶褐色土(カーボン粒中含)
 17. 灰黑色土(カーボン粒少含、固くしまっている)
 18. 單灰褐色土(固くしまる)
 19. 單茶褐色土(カーボン粒微含)
 20. 單褐色土(焼土粒中含、カーボン粒微含)

0 (1 : 40) 2m

第24図 027号址実測図(2)



第25圖 027號址出土遺物實測圖

1は須恵器の高台壺である。口径11.5cm、器高4.6cm、高台径8.4cmを測る。内外面とも灰黒色を呈し、細砂粒を極く少量含む胎土である。底部は回転ヘラ切り離しを行っている。土塙F内中層及び底面直上からと、Fから北西に7.40m離れた周溝外から出土している。時期は8世紀第3四半期と考えられる。

2は須恵器壺で、推定口径12.2cm、器高4.4cm、推定底径8.1cmを測る。体部下端は手持ヘラ削りを施している。外面暗灰色、内面黄灰色を呈し、砂粒を少量含む胎土である。周溝内側の1・2層からの出土。

3は須恵器壺で、推定口径13.4cm、推定器高4.1cm、推定底径10.9cmを測る。外面暗灰色、内面暗黄灰色を呈し、細砂粒を多く含む胎土である。周溝内側の1・2層からの出土。

4(A)は土塙F上面から中層のかけての層位で出土した大刀である。鋒を上位に、茎を下位にしている。鋒が若干欠損していると思われるが、全長81.4cm、刀長67.5cm、茎長13.9cm、刀元幅3.5cm、中幅3.1cm、先幅2.9cm、茎元幅2.7cm、先幅2.5cm、刀重ね0.85cm、茎重ね0.65cmを測り、平鍊造りである。茎中央先寄りに盛り上る部分があるが、目釘と思われる。茎は取り上げ後折れてしまったが、断面には折返し鍛錬がみられる。刀身には銅製の足金物が2脚、貴金属が1点残されている。

4(B)(C)は刀身に残されている足金物を縮尺を変えて図示したものである。刀身は図化していない。

5は銅製の喰出鐸で、表側(茎側)の周縁は角面取りを施し、裏側(鞘側)は平らである。出土地点は2層上面で、大刀の茎元からは直線で3.60m離れている。

6は銅製の方頭柄頭である。両側に溝1.0cmの孔があり、厚さは0.1cmである。出土地点は南辺の周溝東寄りで、溝底から25cm程浮いていた。大刀茎先からは直線で4.34m離れている。

鐸と方頭柄頭は、大刀から離れて出土しているが、本来は一体のものであったことは間違いないであろう。それらの金具を含めた大刀は、喰出鐸の双脚足金物をもつ方頭大刀となる。

028 (002) 号址 (第26図、図版11)

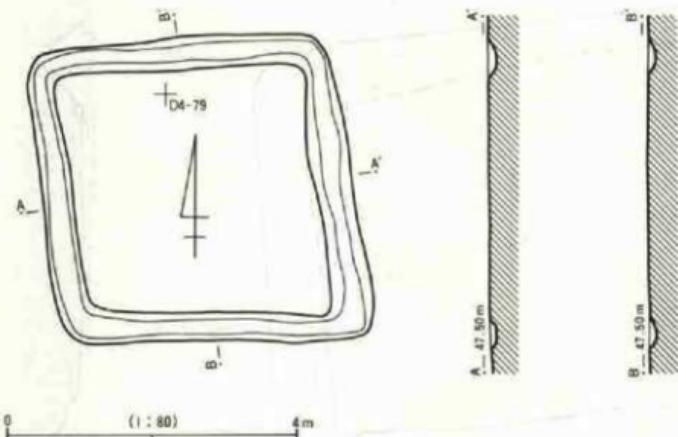
(位置) D 4-78・79グリッドを主に位置する。

(遺構) 東西(4.28)m、南北(4.20)m、周溝幅(0.35~0.58)m、深さ(0.10)mを測り、方形に周溝が巡る。若干周溝は歪を呈する。調査時掘り下げ過ぎたため、本来は規模・深さとも若干大きかったであろう。周溝内側で土塙は検出されなかった。

(遺物) 出土遺物なし。

029 (003) 号址 (第27図、図版12・44)

(位置) E 4-05・15グリッドを主に位置する。



第26図 028号址実測図

(遺構) 東西(6.55)m、南北6.80m、周溝幅1.20~1.65m、深さ60cmを測り、方形に周溝が巡る。北西コーナーが若干外に拡がる。周溝内側で土塙は検出されなかった。2層は硬化部があり、ロームブロックを少しではあるが含むことから、盛り土層の痕跡とも考えられる。また、3層は旧表土層である。

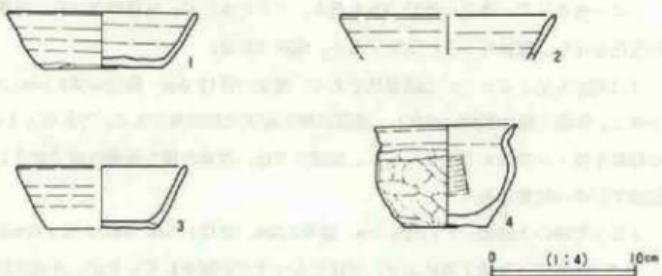
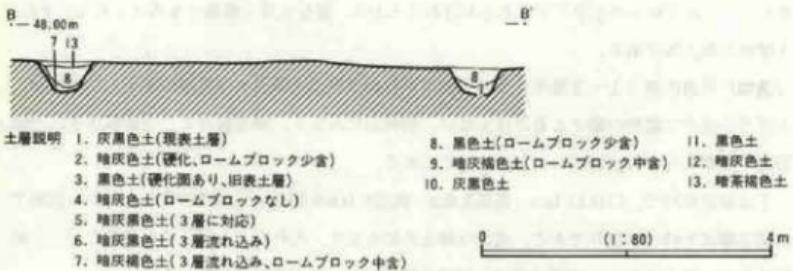
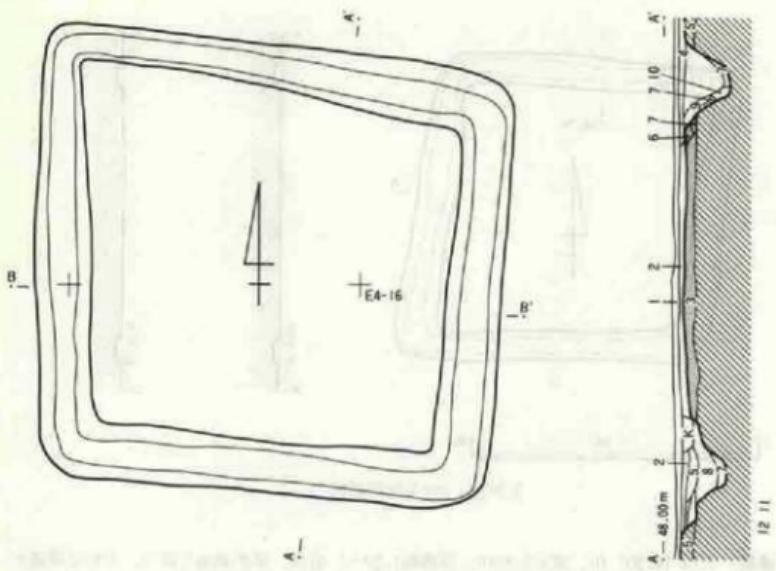
(遺物) 周溝内側(1~2層中)及び周溝内から40点程の土師器・須恵器が出土しているが、大部分小破片で器形が窺えるものは少ない。個体別にみると、須恵器壺4、土師器壺1、土師器甕・壺類5となる。図示したものは4点である。

1は須恵器壺で、口径13.0cm、器高3.9cm、底径8.0cmを測り、少く残存する。ロクロ成形で体部下端は手持ヘラ削りである。底部は静止糸切をなす。内外面とも黒灰色の色調を呈し、細砂粒の多い胎土である。焼成は普通。周溝内側と周溝外側とで接合している。

2は須恵器壺で、推定口径15.0cmを測る。ロクロ成形で、少く残存する。色調は内外面とも暗灰色を呈し、細砂粒の多い胎土である。焼成は普通。

3は箱形を呈するロクロ土師器壺である。推定口径12.0cm、推定器高4.5cm、推定底径7.5cmを測る。体部下端は手持ヘラ削り、底部は静止糸切で無調整である。内外面とも淡赤褐色をし、細砂粒を極く少量含んだ胎土である。焼成は良好。周溝内側と周溝外側で接合している。8世紀後半以降の時期であろう。

4は小形鉢の土師器で、口径9.7cm、器高7.3cm、底径5.7cm、胴最大径9.6cmを測る。内面は2.5~3.0cm幅のヘラ状工具により、全体によくナデが施されているが、外面は指頭によるナデで凹凸がある。内外面とも暗赤褐色を呈し、細砂粒の多い胎土である。焼成は普通。



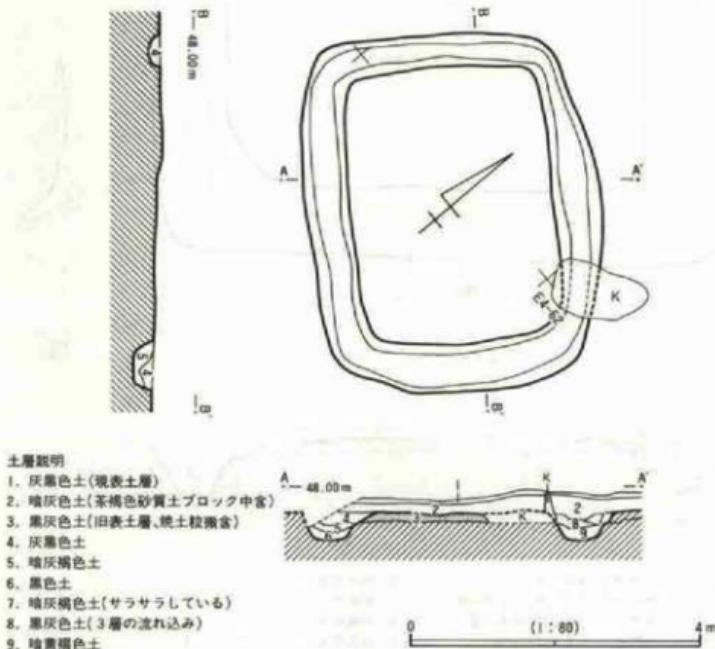
第27図 029号址実測図・出土遺物実測図

030 (004) 号址 (第28図、図版12)

(位置) E 4-51・51グリッドを主に位置する。

(遺構) 北西—南東 (4.91) m、北東—南西4.30m、周溝幅90cm前後、深さ38cmを測り、溝を長方形に巡ぐらしている。周溝内側では土塙は検出されていない。2層の茶褐色砂質土ブロックを含む暗灰色土は盛り土の痕跡とも考えられる。また3層は旧表土層である。

(遺物) 23点出土しているが、全て小破片で接合関係は全く認められなかったことから、図示は出来なかった。個体数は7個体以上あり、須恵器壺や土師器壺などがある。1・2層及び周溝からの出土である。

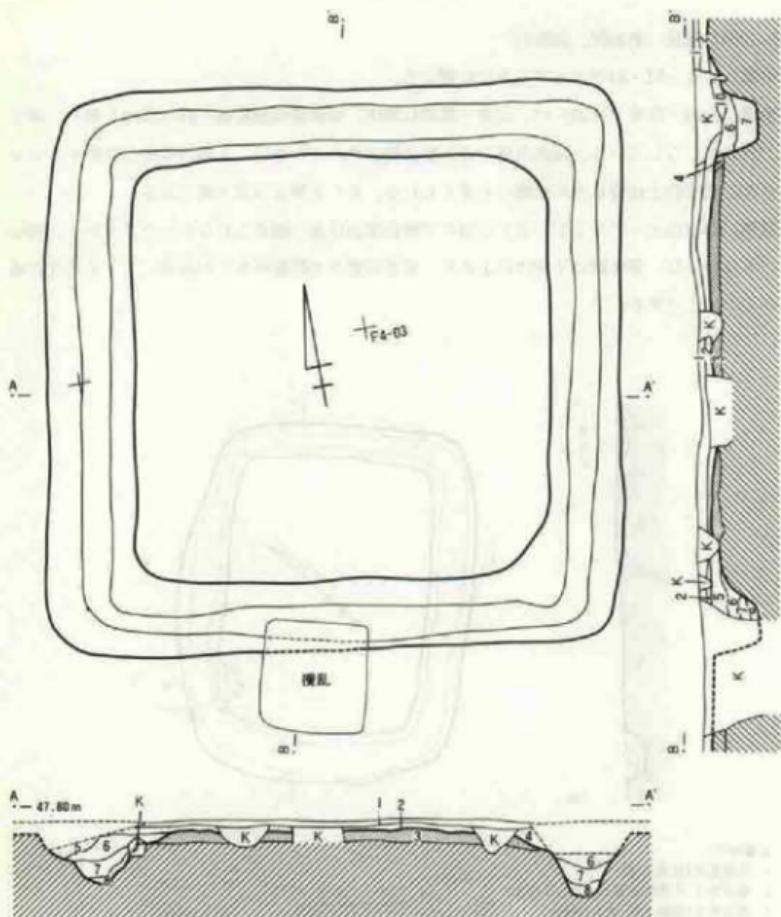


第28図 030号址実測図

031 (005) 号址 (第29図、図版13)

(位置) E 4-92・93、F 4-02・03グリッドを主に位置する。

(遺構) 東西 (7.90) m、南北 (7.70) m、周溝幅0.90~1.30m、深さ55~60cmを測り、ほぼ



- 土層説明
- 1. 灰黑色土(現表土層)
 - 2. 噴灰色土(焼土粒微含、全体に硬化)
 - 3. 黒色土(全体に硬化、旧表土層)
 - 4. 灰黑色土(2層の流れ込み)
 - 5. 灰黑色土(2・3層の流れ込み)
 - 6. 雜灰褐色土
 - 7. 黑褐色土
 - 8. 明黃褐色土
 - 9. 噴灰褐色土(固くしまっている)
 - 10. 黒色土

第29図 031号址実測図

正方形に近いプランで溝を巡ぐらしている。主体部と思われるような土塙は検出されなかった。旧表土層である3層が周溝内側に認められる。

(遺物) 表土層から精査したが、本遺構に伴うような遺物は全く出土しなかった。

032 (006) 号址 (第30図、図版13)

(位置) E 4-15・16グリッドを主に位置する。

(遺構) 東西(8.55)m、南北8.55m、周溝幅1.00~1.40m、深さ0.60~0.70mを測り、ほぼ正方形プランに溝を巡ぐらしている。旧表土層である3層が認められたが、主体部と思われるような土塙は検出されていない。南東コーナー部は道路法面によって破壊されていた。031号址とは軸方向がほぼ同一である。

(遺物) 表土層から精査したが、本遺構に伴うような遺物は全く出土しなかった。

033 (007) 号址 (第31図、図版14)

(位置) F 3-16・17グリッドを主に位置する。

(遺構) 北東-南西9.45m、北西-南東8.90m、周溝幅1.30~1.50m、深さ60cmを測り、正方形に近いプランに溝を巡らしている。旧表土層である3層が認められるが、主体部となるような土塙は検出されなかった。

(遺物) 周溝内側の2層中より土師器壺1個体、外面に赤彩の施されたロクロ土師器壺1個体が出土したのみである。小破片のため図示はしなかった。

034 (008) 号址 (第32・33図、図版14・44)

(位置) E 3-94・95、F 3-04・05グリッドに位置する。

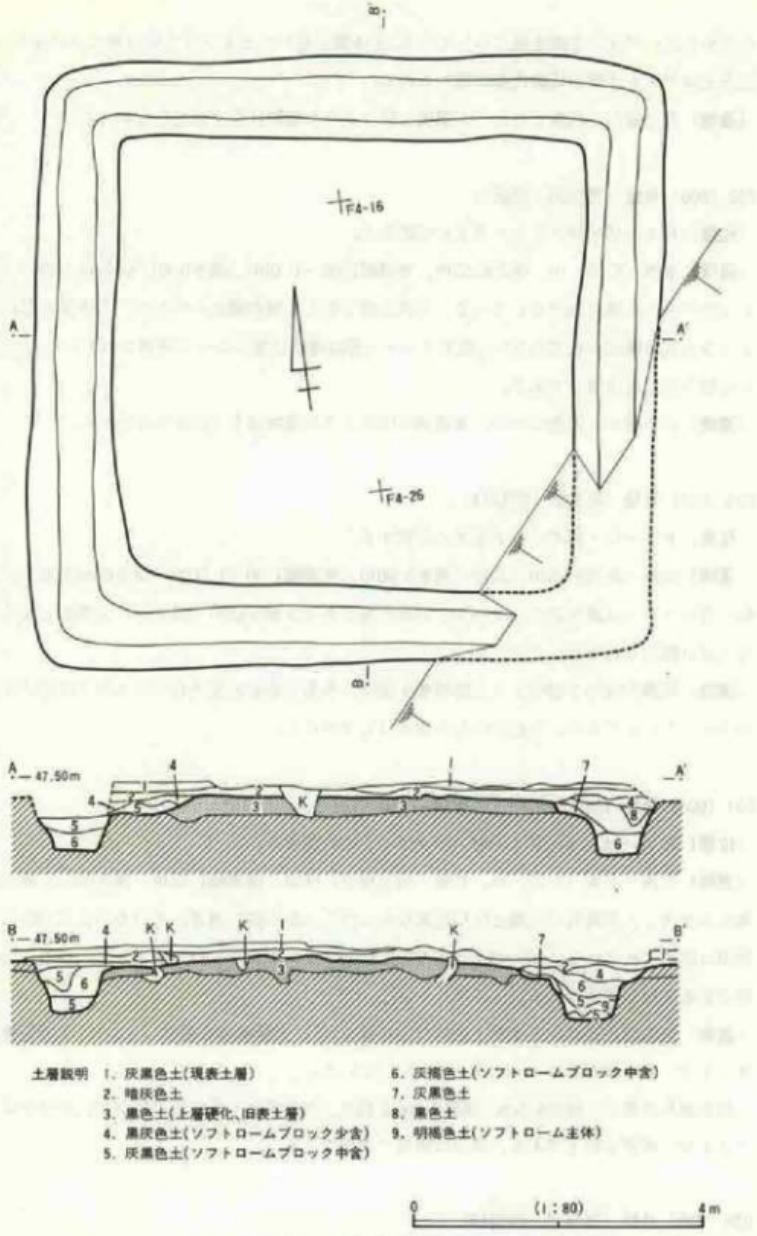
(遺構) 北西-南東(7.20)m、北東-南西推定7.00m、周溝幅1.55m、深さ38cmを測る。周溝は本来浅く、周溝外の土層と区別出来なかつたことから掘り過ぎ、そのために部分的にしか周溝は認められていないが、元々は正方形に近いプランで巡っていたものと思われる。旧表土層である3層が認められる。

(遺物) 須恵器長頸壺下部1個体(破片数5点)、土師器壺2個体(4点)、土師器壺2個体(2点)が周溝内側の1・2層から出土している。

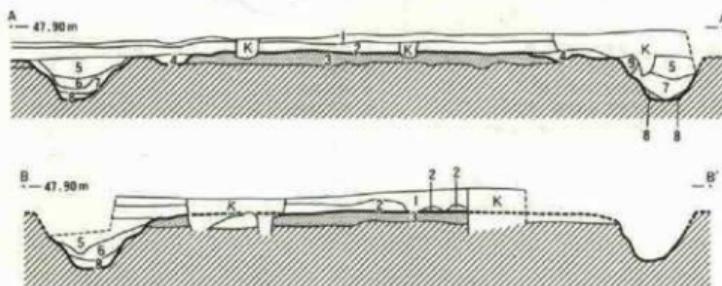
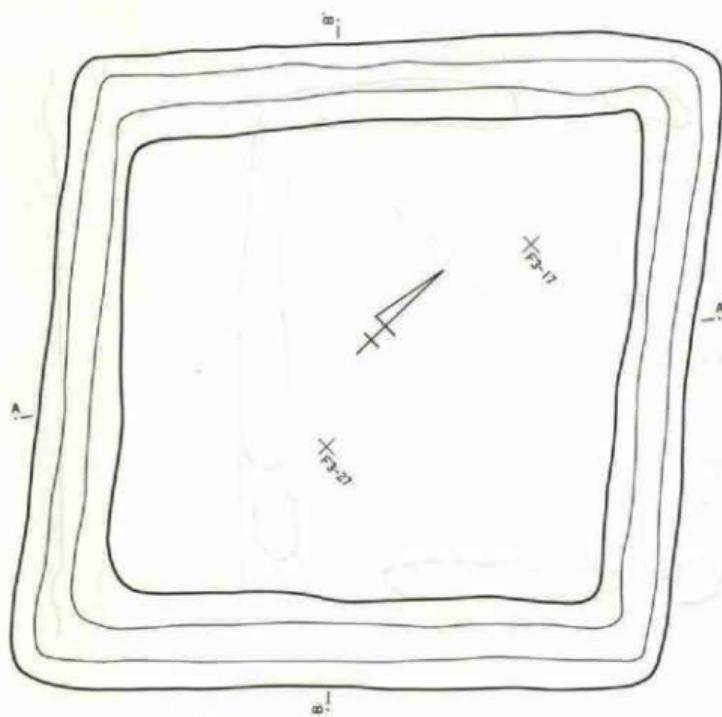
須恵器長頸壺は、底径8.5cm、現高6.9cmを測り、内外面とも灰白色の色調で、砂粒をほとんど含まない緻密な胎土である。焼成は硬質で良好である。

035 (009) 号址 (第34図、図版15)

(位置) E 3-73・74グリッドを主に位置する。



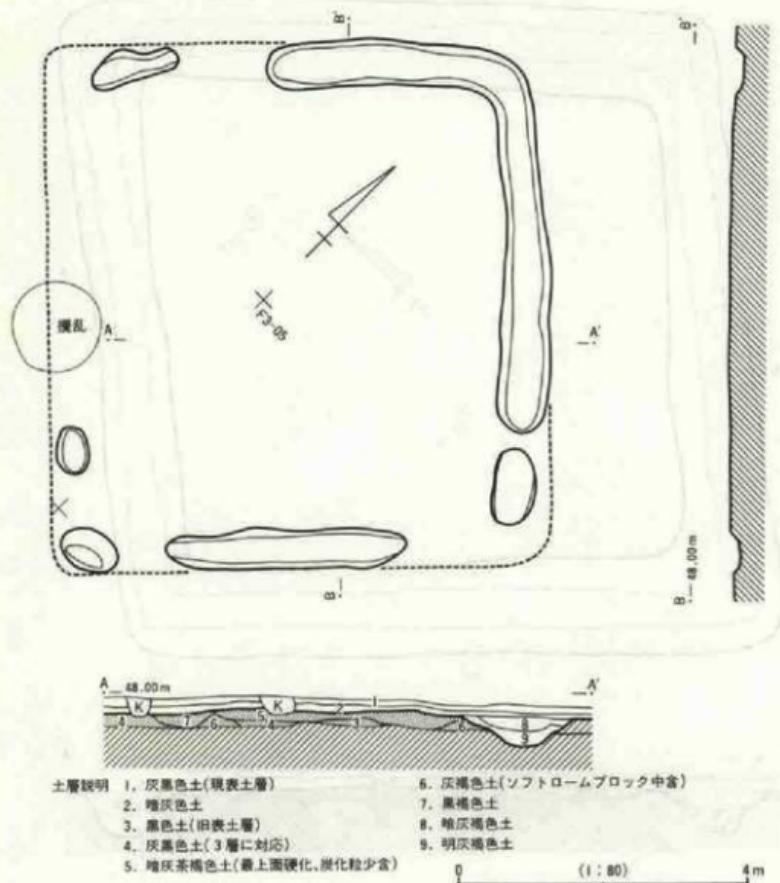
第30図 032号址実測図



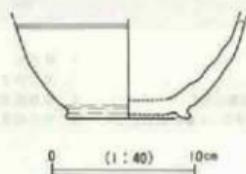
- 土層説明
- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 1. 灰黑色土(現表土層) | 6. 黒色土 |
| 2. 増灰色土 | 7. 黒灰色土 |
| 3. 黒色土(層上面硬化、旧表土層) | 8. 増黄褐色土(ソフトロームブロック多含) |
| 4. 増灰黑色土(部分的に硬化、3層の流れ込み) | 9. 明茶褐色土 |
| 5. 灰茶褐色土 | |

0 (1 : 80) 4 m

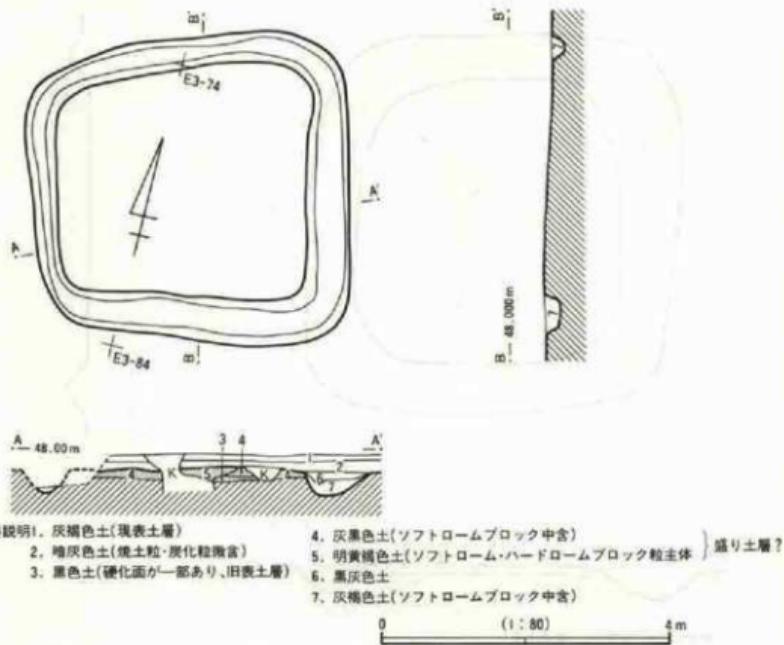
第31図 033号址実測図



第32図 034号址実測図



第33図 034号址出土遺物実測図



第34図 035号址実測図

(遺構) 東西(4.50)m、南北(3.52~4.25)m、最大周溝幅0.90m、深さ34cmを測り、南東部が拡がり歪はあるが、正方形に近いプランに溝が巡る。旧表土層である3層が認められる。

4・5層は埴丘盛り土の痕跡である可能性が考えられる。

(遺物) 周溝内から土師器壺の小破片が1点のみ出土している。

036 (010) 号址 (第35図、図版15)

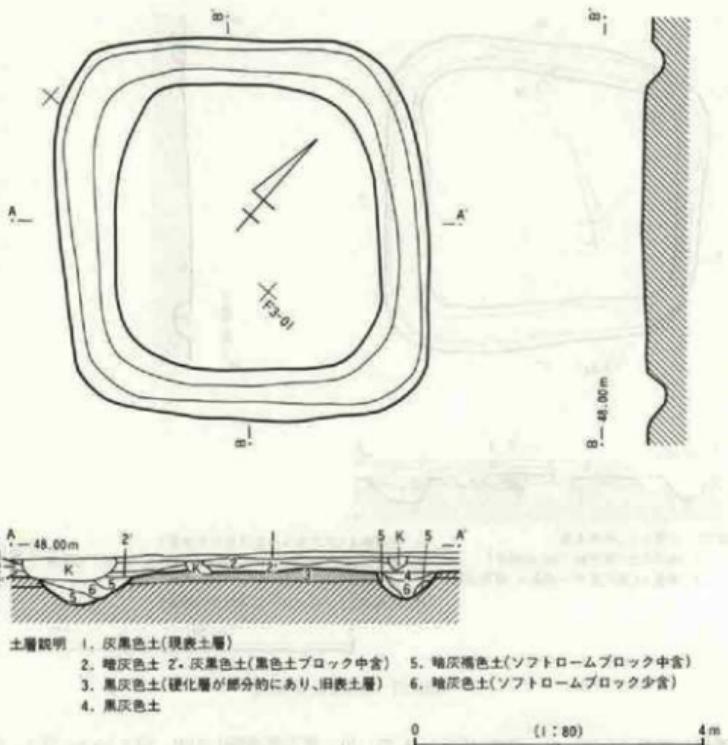
(位置) E 3-90、F 3-00グリッドを主に位置する。

(遺構) 北東-南西5.64m、北西-南東(5.28)m、周溝幅0.88~1.34m、深さ37cmを測り、隅丸方形プランに溝が巡る。南西辺の溝は、北東辺に比べると立ち上りは緩やかで幅広となるが、深さは同じである。旧表土層である3層が認められる。

(遺物) 本遺構に伴うような遺物は出土していない。

037 (011) 号址 (第36・37図、図版16・44)

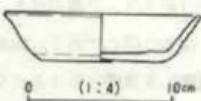
(位置) E 2-97、F 2-07グリッドを主に位置する。



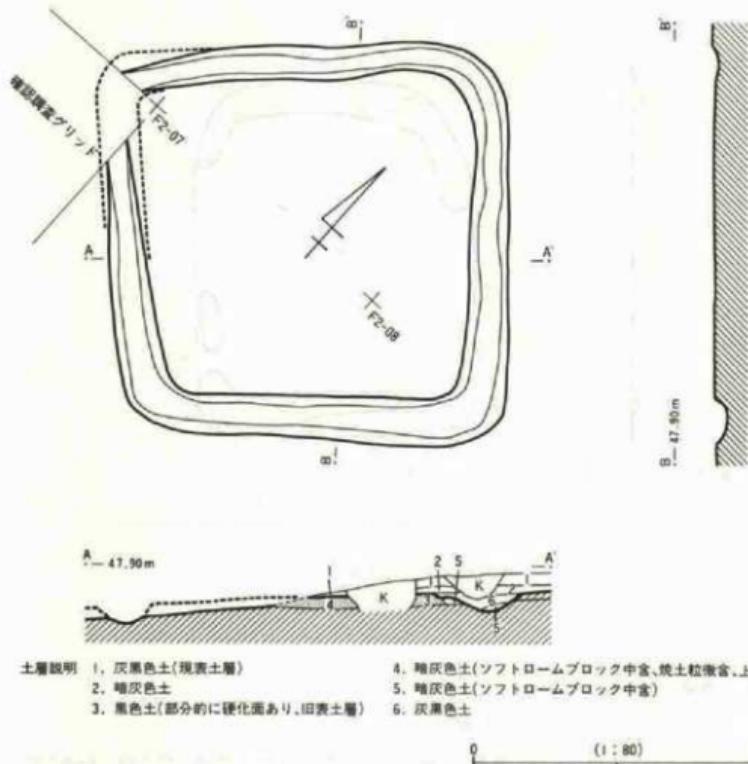
第35図 036号址実測図

(遺構) 北東—南西 (5.56) m、北西—南東 (5.55) m、最大周溝幅0.90m、深さ22cmを測り、ほぼ正方形プランに溝を巡らしている。旧表土層である3層が認められる。西コーナー部は確認調査グリッドで破壊してしまった。

(遺物) 周溝内底面近くと周溝内側2層出土との接合關係が認められる、盤状坏の系譜を引くクロロ土器が1個体出土している。口径13.2cm、底径8.1cm、器高3.2cmを測る。底部は静止糸切りで無調整である。細砂粒を多く含む胎土であるが、焼成は良好である。内外面とも赤彩が施されている。



第36図 037号址出土遺物実測図



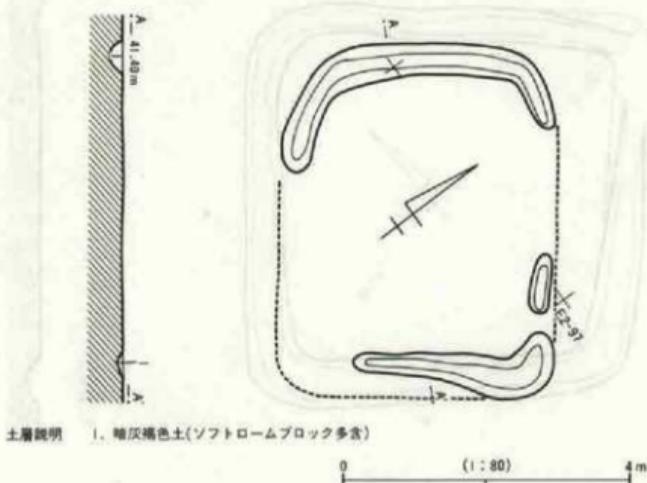
第37図 037号址実測図

038 (014) 号址 (第38図、図版16)

(位置) E 2-96グリッドを主に位置する。

(遺構) 全体に掘り下げ過ぎたために、周溝は部分的にしか認められないが、本来は方形プランに溝は巡っていたものと思われる。北西-南東 (4.84) m、北東-南西推定3.90m、周溝幅最大53cm、深さ (17) cmを測る。

(遺物) 遺構に伴うと思われる遺物は出土していない。



第38図 038号址実測図

039 (012) 号址 (第39図、図版17)

(位置) E 2—62・63グリッドを主に位置する。

(遺構) 北東—南西 9.04m、北西—南東 (7.90) m、周溝幅 1.44~1.90m、深さ 40~46cm を測り、正方形プランに溝を巡らしている。旧表土層である 3 層が認められる。周溝壁は底面から緩やかに立ち上がっている。

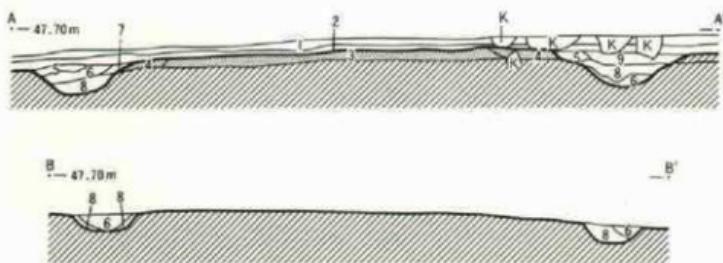
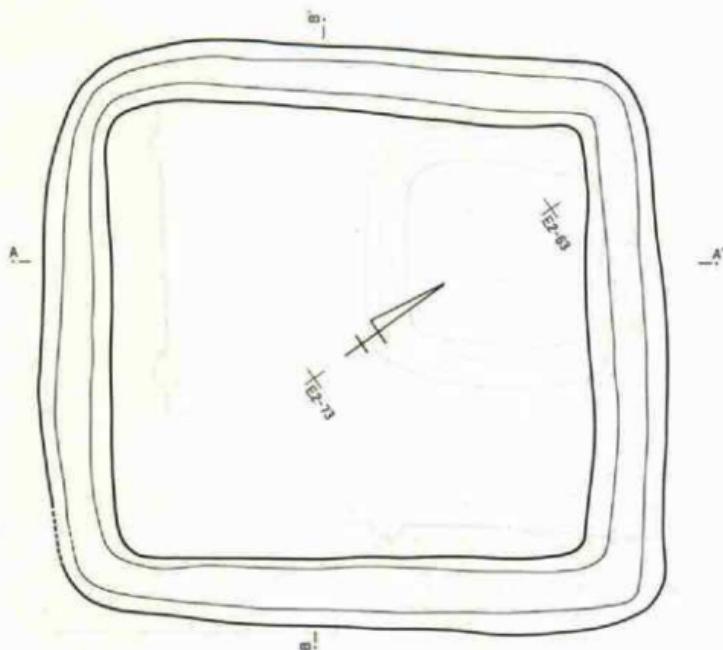
(遺物) 表土層から精査したが、本遺構に伴う遺物は出土していない。

040 (013) 号址 (第40図、図版17)

(位置) E 1—59グリッドを主に、最も西端に位置する。

(遺構) 北東—南西 (3.65) m、北西—南東 (3.53) m、周溝幅 (0.55~0.60) m、深さ 0.20m を測り、隅丸方形プランに溝を巡らしている。14基の同種の遺構のうち、最も小規模なものである。

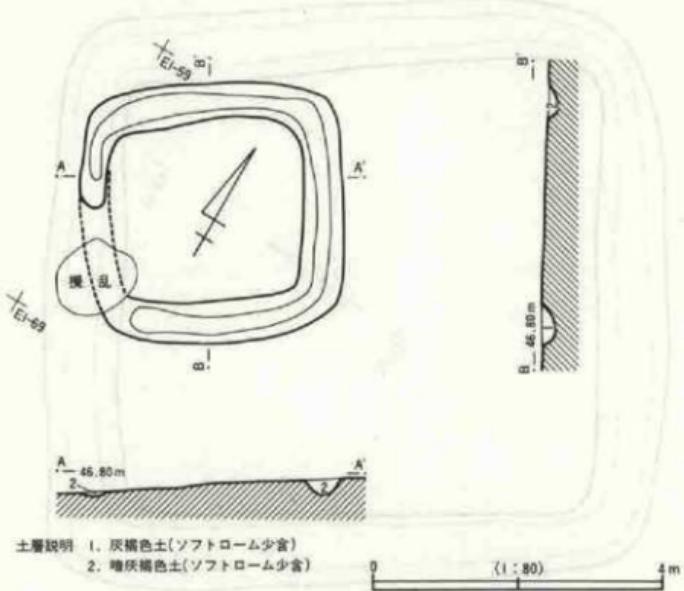
(遺物) 本遺構に伴う遺物は出土していない。



- 土層説明 1. 灰黒色土(現表土層)
 2. 増灰色土
 3. 黒色土(部分的に上面硬化、塊土粒微含)
 4. 増灰色土(3層に対応)
 5. 灰黒色土(ソフトロームブロック少含)
 6. 増灰色土(ソフトロームブロック少含)
 7. 増灰色土(ソフトロームブロック微含)
 8. 明灰褐色土
 9. 黒色土
 K. 摂乱

0 (1 : 80) 4m

第39図 039号址実測図



第40図 040号址実測図

III 遺物包含層出土の遺物

1. 土 器

当遺跡から出土した縄文土器について、以下の13群に大別して説明している。

- 第I群土器 早期前葉の燃糸文系土器
- 第II群土器 早期中葉の沈線文系土器に属する三戸式及び田戸下層式土器
- 第III群土器 早期押型文土器
- 第IV群土器 第II群と同じく沈線文系土器の田戸上層式土器
- 第V群土器 早期後葉の条痕文系土器
- 第VI群土器 前期前半期の纖維土器
- 第VII群土器 前期後半期の諸織系土器
- 第VIII群土器 第VII群土器に併行する浮島系土器
- 第IX群土器 前期末葉から中期初頭にかけての縄文を主文様とする土器
- 第X群土器 中期前半期にあたる阿玉台式土器
- 第XI群土器 中期後半期の加曾利E I式土器
- 第XII群土器 同じく、加曾利E III・IV式土器
- 第XIII群土器 後期の土器

第I群土器 (第41~47・50図、図版22~28)

燃糸文系土器であり、当遺跡での主体を占めている。これをさらに I a 類から I f 類の 6 類に細別した。

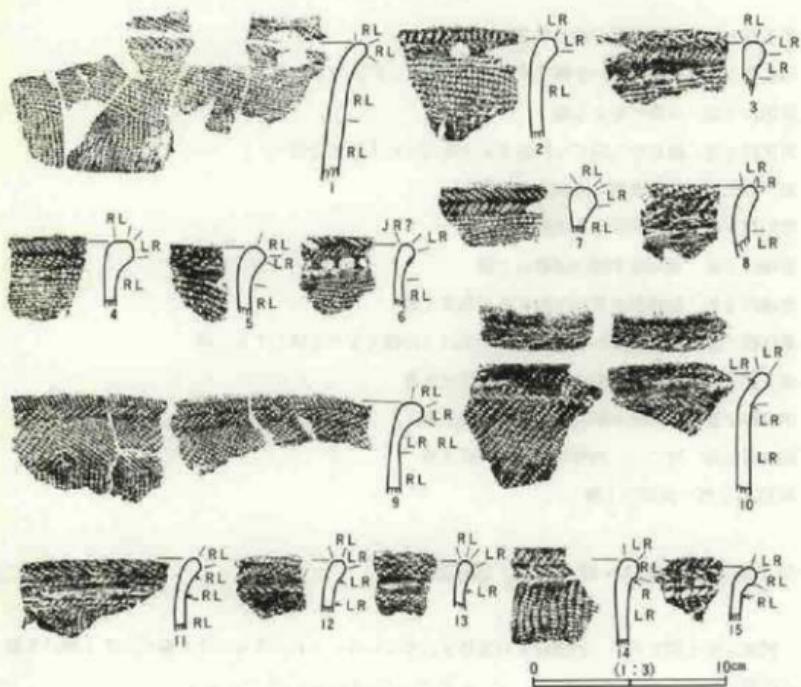
I a 類 (第41図1~9)

口唇施文を受け、かつ口縁部に横位文様帯を有するもので、井草 I 式に含められる。3~7・9は燃りの異なる原体で口唇に羽状縄文が施されている。口縁部文様帯は縄文の条が縱走するものが多いが、8・9は斜行であり、特に9ではL RとR Lの原体を交互に回転して羽状構成をとっている。

I b 類 (第41図10~15)

口唇施文され、かつ口縁に燃紐圧痕文の埋められる土器である。I a 類同様井草 I 式の範疇でとらえられる。

10は内面にも圧痕文が施されている。外面には LR の斜繩文が特異である。11は 2 条、12・13には 2 条以上の圧痕文がある。10~13では圧痕文の縁まで無文帯が形成されており、圧痕文自体が施文の区切りとして用いられていると思われる。

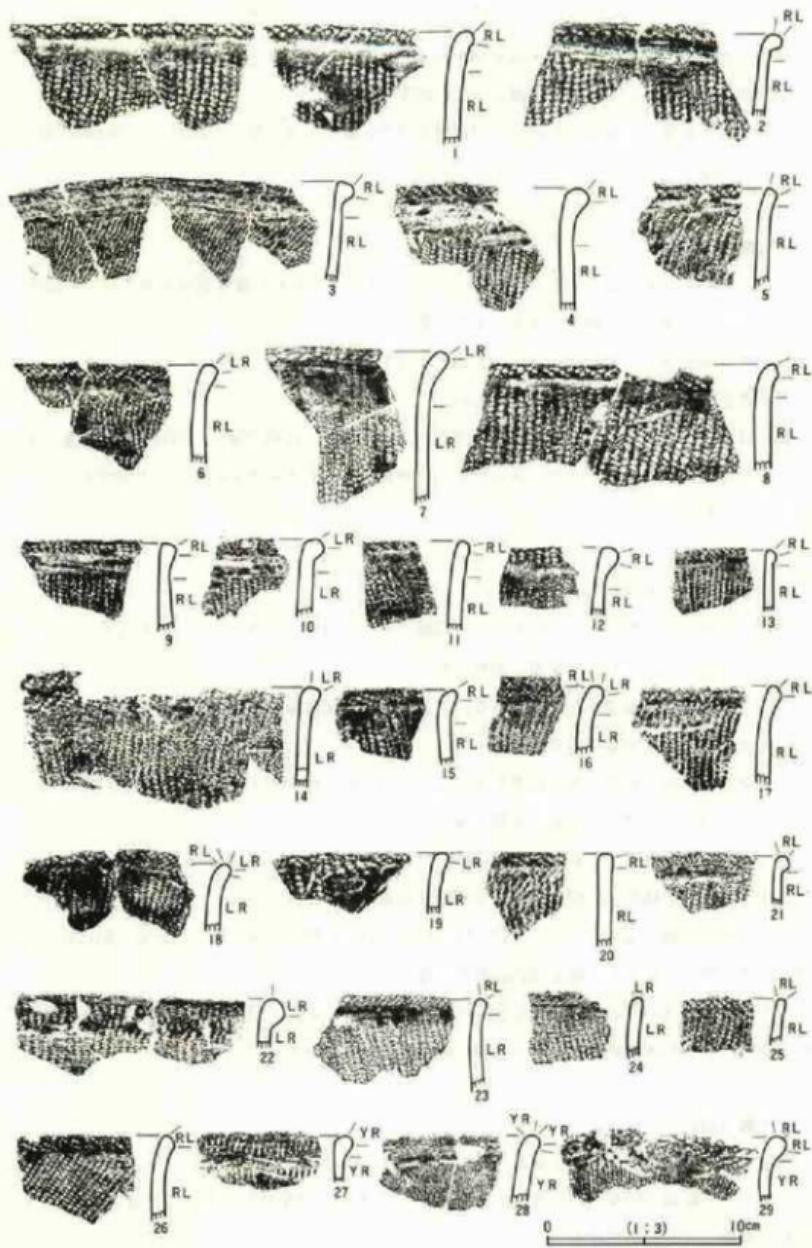


第41図 第I群土器拓影図(1)

I a 類、I b 類とも胎土に細砂粒を多量に含み、焼成は良い。内面は荒れているものが多い。

I c 類 (第42図)

口唇部に施文されているが口縁部の横位文様帶は欠くもので、井草 II 式に比定される。口縁末端で外反、肥厚する例が多い。内面は平滑化されているが、粗くザラついているものが多い。



第42図 第1群土器拓影図(2)

原体はR Lが主だが、7・10・14・16・18・19・22～24はL Rとなっている。1～26は縄文施文（縦走）のもの。4・7は口縁に巾広い無文帯が巡る。

27～29は体部撚糸文施文のもので、口唇施文は27が縦位、28は横位の撚糸文、29は斜行縄文となっている。

I d類（第43図）

文様の口唇部の施文はなくなり、体部のみになるもので、R Lの縦走施文が主である。調整、文様自体はI c類との共通性が色濃いもの。夏島式に比定されよう。

1～32は縄文施文のものである。18・19・22はL Rの斜行縄文が加わっている。

27は撚紺压痕文が鋸歯状に配されるもの。

28～41は体部撚糸文のものである。施文されている撚糸文は密で深い。34は鋸歯状に配されているもので、調整面でこの類に含めたが、文様構成は後記I e類稻荷台式に共通性がある。37は口辺が無文となっている。

I e類（第44～46図）

口唇、内面がよく磨かれているもので、口縁は直口しほとんど外反はない。稻荷台式に比定できる。外面についてもよく平滑に調整されている。

1～77は撚糸文の施されたものである。この類の撚糸文は条間が空いており、浅目に施文されている。原体はRが主である。

1～28・43・53・57は口唇が肥厚氣味となる。29～42・44～52・54～56・58～61は肥厚のないもので、31・44・52などは逆に尖端が薄くなっている。

62～77は口辺が無文となる。72・77には斜行の撚糸文も加わっている。

78は口辺にRの絡条体压痕のみられるものである。

79～81・85は縄文施文のもので、79～81の口辺は磨かれ無文氣味となっている。85はR Lの縄文が密に施文され、I d類夏島式の要素が強い。

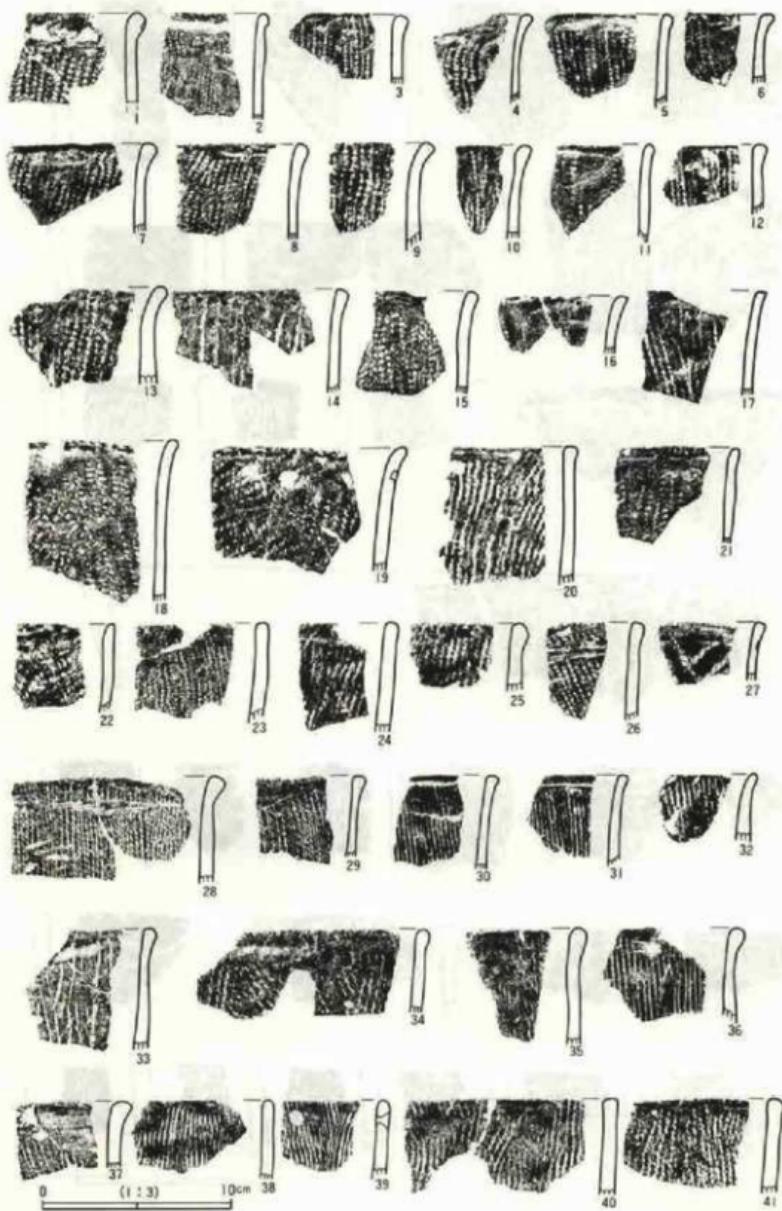
82～84は条痕文のもの。82は浅く引っかいた様な条痕である。83は条が曲がっており歎かい軸に巻いた絡条体条痕と思われる。84は鋭く細い条線文がある。

I f類（第47図）

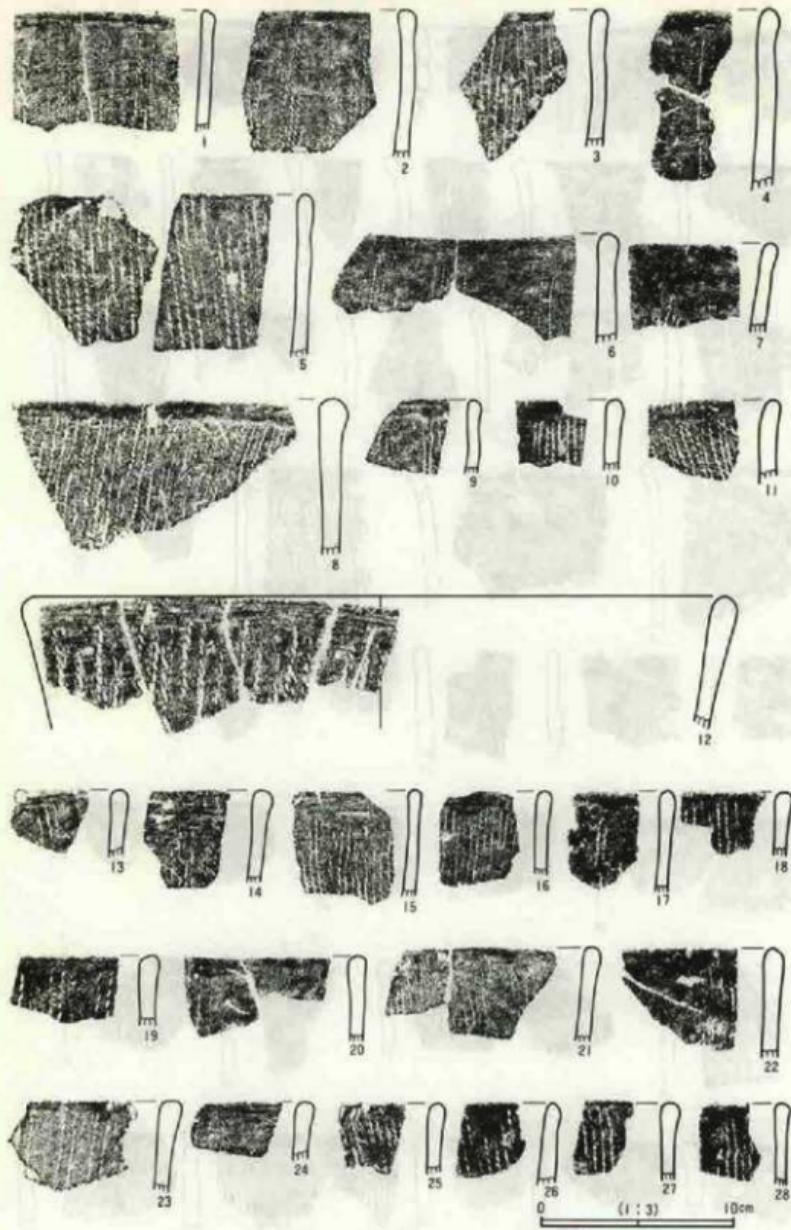
撚糸文系土器に属する無文土器を一括した。

1～7は口縁端で肥厚ないし外反する特徴をもち、外面の研磨は行なわれていない。I a～I c類と調整面での共通性がある。

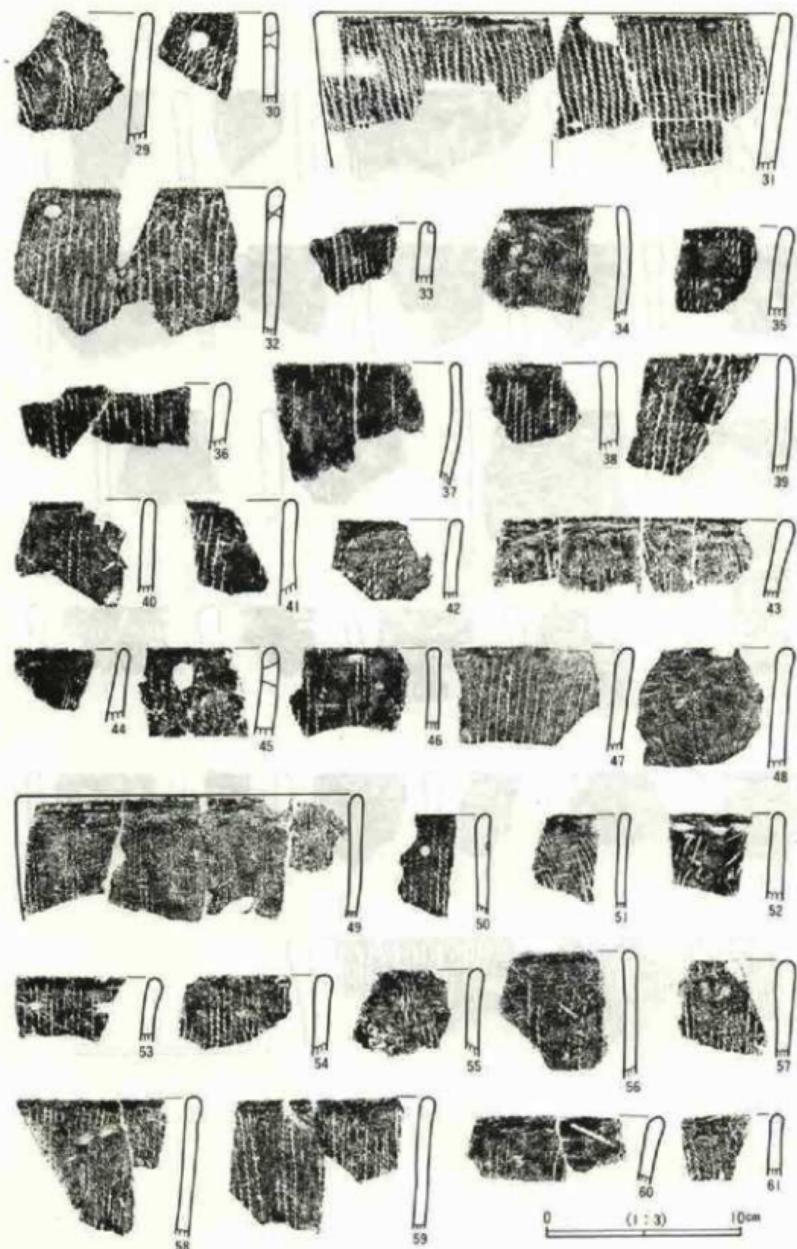
8～20・28は口唇部、外面等の研磨がみられるもので、調整面ではI e類と共通した特徴を



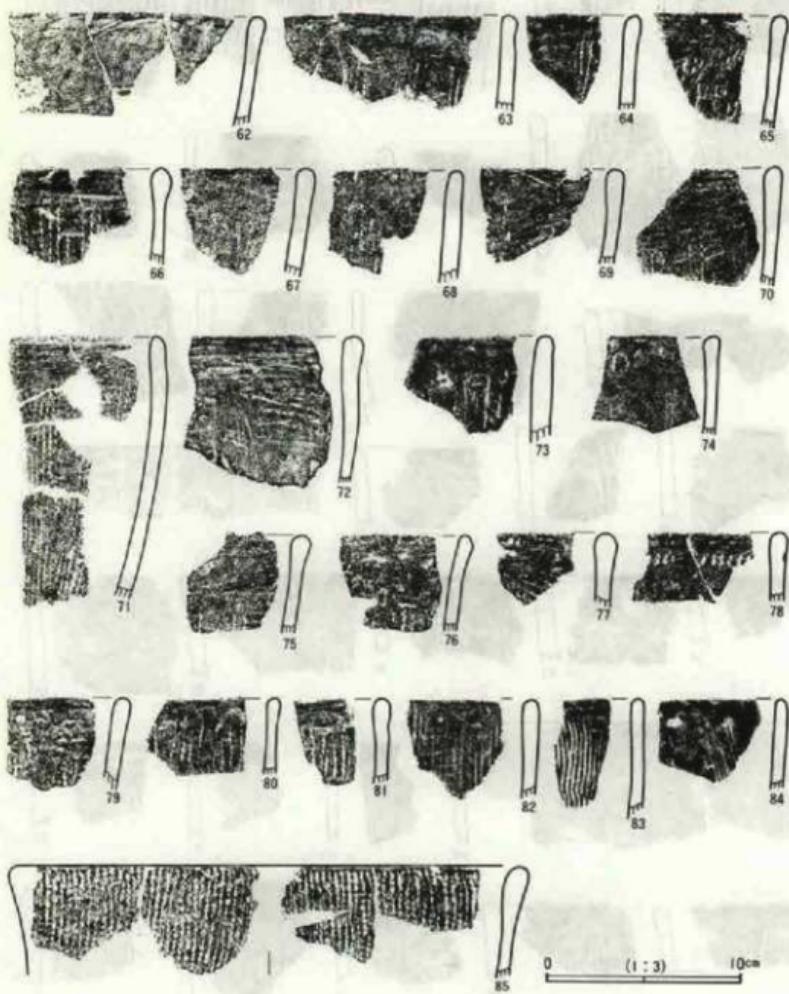
第43圖 第1群土器拓影圖(3)



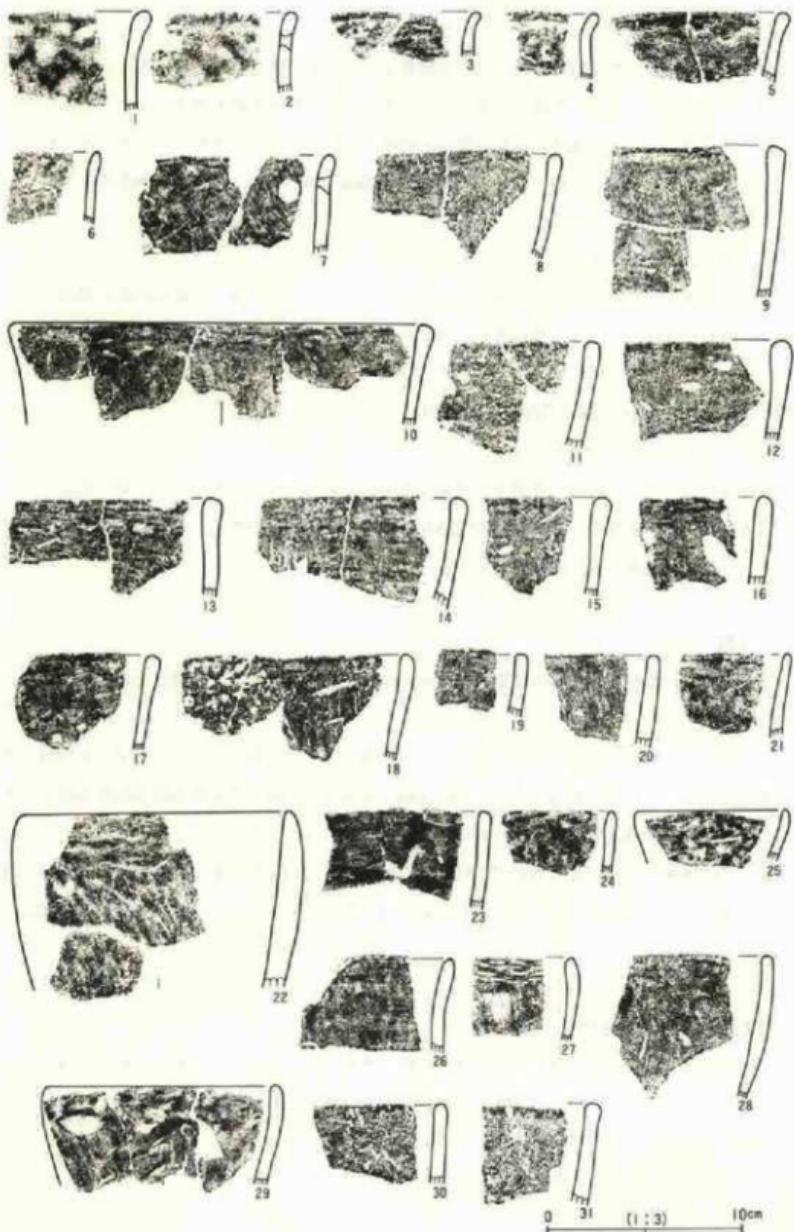
第44図 第I群土器拓影図(4)



第45図 第1群土器拓影図(5)



第46図 第1群土器拓影図(6)



第47図 第1群土器拓影図(7)

有している。

21・23~25・27・29~31は外面、口唇の研磨がみられず、器面に凹凸のみられるもの。

22・26は他のものとはやや趣きが異なっている。22は口唇断面が尖頭状になり、外面に擦痕を有する。26の口唇も尖頭状で、かつ外反・肥厚する口縁をなす。内外面は研磨がみられる。

径の推定されるものは4点で、10が22cm、22が15cm、25が8cm、29が12.5cmである。

底 部 (第50図1~4)

燃糸文を施されたもの1~3、無文のもの4を図示した。4は厚手で器面調整に擦痕がみられる。第II群土器にも無文土器が多いが、それらとは、胎土、調整面で異なっている。

第II群土器 (第48~50・52図、図版29)

沈線文土器の三戸式、田戸下層式に該当するものである。有文のものをII a類、無文のものをII b類とした。器形はラッパ状に軽く外反し開くことを特徴とする。口唇は平坦で角張っている。胎土には細緻の混入が顕著である。

II a類 (第48図1~19)

平行、斜行、格子目の沈線を積層し組み合わせる文様が特徴である。口唇、内面はよく磨かれている。

1~3・5~11は三戸式に含められるもので、横位の平行沈線に、斜行・格子目の沈線で多段構成をとる。1は径約35cmである。11は沈線の文様帶下を削って砂粒の移動の跡が残されたままで、擦痕状の施文効果があげられている。

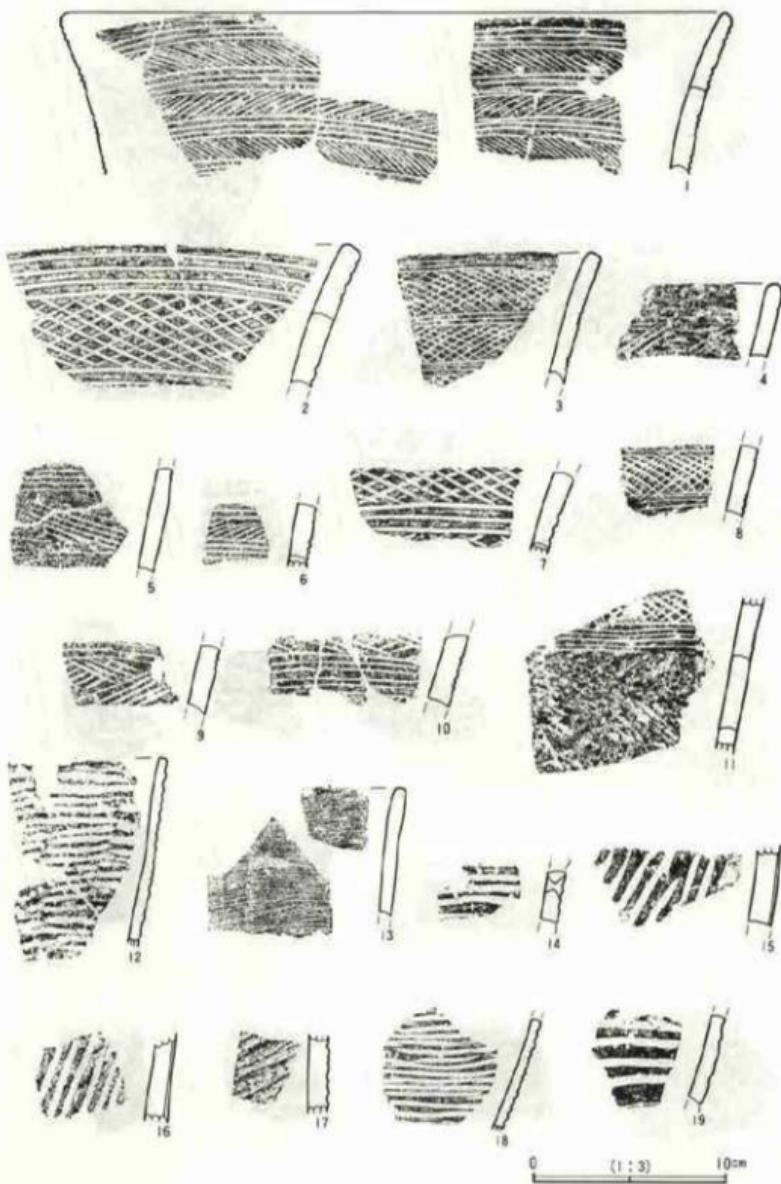
12~19は多層の沈線があるもので、多段構成はとらない。13は細く鋭い沈線のもの。12・14~19は太沈線のもので田戸下層式と思われる。17は浅く擦痕状を呈している。18・19は底部付近である。

II b類 (第49図20~39)

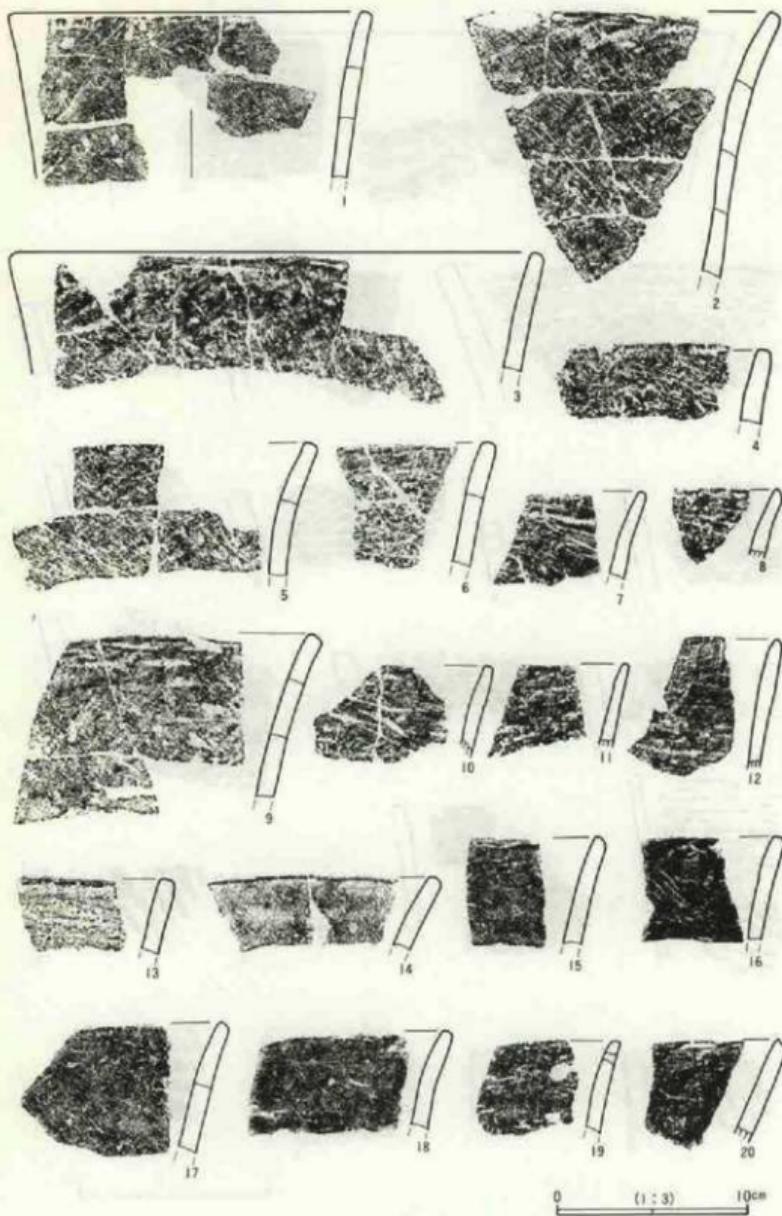
無文のものである。II a類11の下半部と同様、器面に浅く削られ、砂粒が移動した痕跡が残され、擦痕状の効果が上げられている。擦痕の方向はおむね斜方向(右下)である。口唇部は削がれて平坦で磨き調整が入っている。

径の知れるものは、20が約19cm、22が約28cmである。

II c類 (第52図11・12)



第48図 第II群土器拓影図(1)

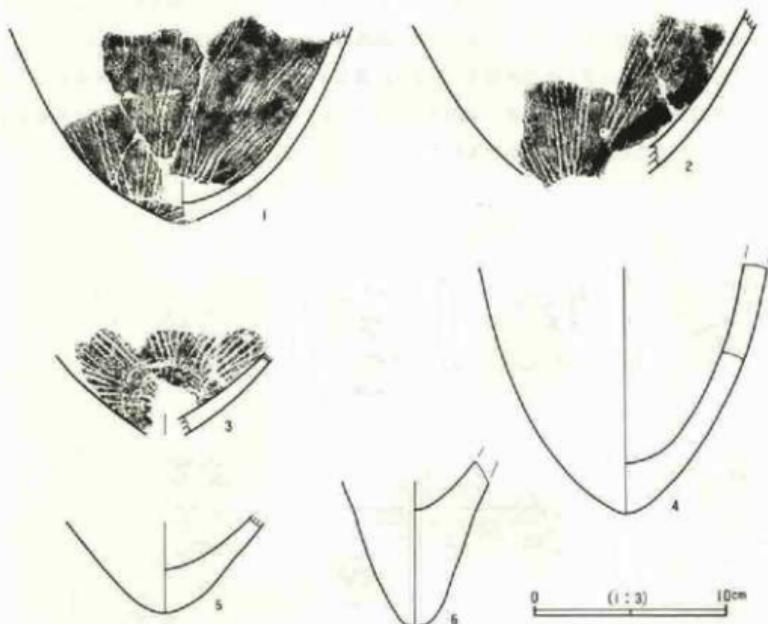


第49圖 第II群土器拓影圖(2)

条痕のみられるもの。若干、三戸式とするには疑問の点もあるが、一応この類に含めた。11は体部上半格子目状文が施文されており、口唇は外傾し内縁部には刻文列がみられる。12は縱方向の細条痕が基調になるもので、口唇に太い刻み目を有している。

底 部 (第50図 5・6)

尖底で、胎土に細礫を混える。器面にはケズリ痕が残されている。

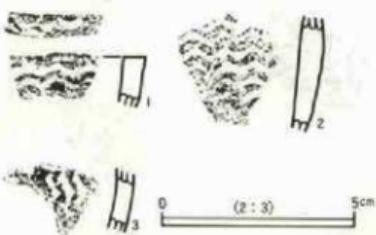


第50図 第I・II群底部実測図

第三群土器 (第51図、図版22)

山型押型文土器である。3点の出土をみた。胎土にはあまり砂礫を含まない。焼成は普通だが、温度が低いためか、黒ずんでおり、やや脆い。典型的な押型文土器の質感といえよう。

施文は口唇部と外面に行われている。1は口縁部で、断面が角頭状になっている。外面は横



第51図 第III群土器拓影図

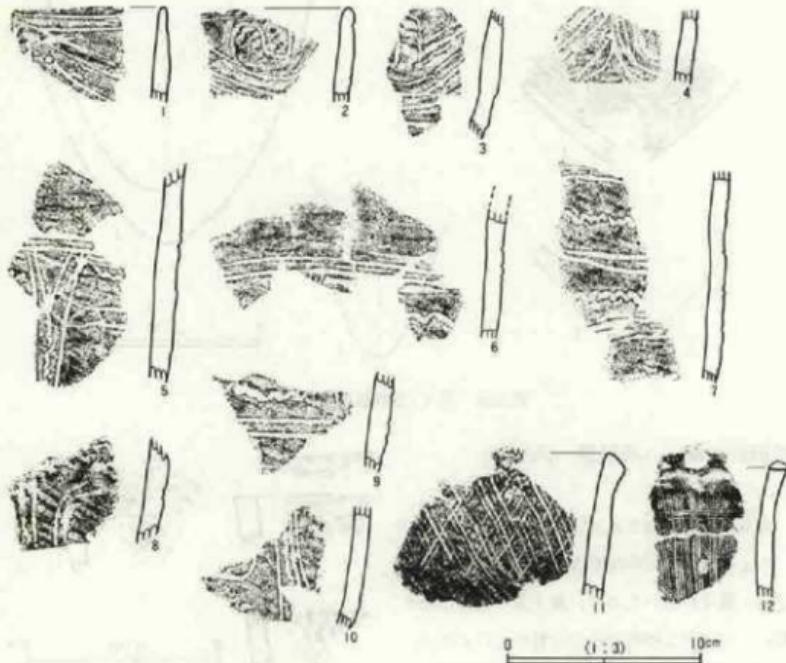
位施文されている。2は横位、3は縦位に施文のみられる胴部片である。

第IV群土器（第52図・60図1、図版20・30）

沈線文系土器の田戸上層式に含められるものである。

第60図1は、口縁が軽く外反し、かつ上端部で肥厚する器形をもつ深鉢形土器で、口径31cm、現高19cmを測る。文様は口辺には連続刺突文、以下、体部には斜位の貝殻条痕文となる。内面にも細かい条痕が施されている。焼成は良好、纖維の胎土への混入は認められない。

第52図は沈線に貝殻文、円形刺突文、鋸歯状沈線文を加え、幾何学文様を構成するもので、同一個体である。1・2は口縁部で尖頭状になっている。他は体部片で、2～4には入組文様がみられる。胎土には纖維が少量含まれている。



第52図 第II・IV群土器拓影図

第V群土器（第53・54図、図版30）

胎土に纖維を含む条痕文系土器を一括した。ただし早期の条痕文系土器の他に、前期初頭の花積下層式の条痕文も含まれている可能性がある。

1・2は無文のもの。外面には軽い擦痕がみられる。

3・4は表裏条痕の口縁部片で、縁に孔が廻らされている。口縁は波状になるものと思われる。

5～11は表裏条痕の口縁部で、6・7・9には口唇部に刻文列があり、10・11には口縁の区切りに連続刺突文も付加されている。

12～18は隆帯を有するもの、12～14・17は表裏条痕、15・16は素文である。12は口縁直下に隆帯、以下に浅い沈線文がみられる。13・14・18は口縁下位に隆帯が廻らされるもので、口唇隆帶上に刻文列が施されている。18の刻文は肋のある貝のものである。15・16・17は縦に隆帯の入るもの。15・16は同一個体で、纖維が多量に含まれ、胎土がもろく器壁の剥落が激しい。内面には凹凸がある。花積下層式に所属されるべきか。17は菱形の隆帯となる。

19～27は胴部片である。19～20は鶴ヶ島台式で、沈線と円形刺突文で、三角形・菱形の幾何学文を描く。焼成は非常に良い。21は半截竹管の押し引き、25には貝殻腹縁文が施されている。23・24・26は方向の一貫しない条痕文のみられるもの。27は表裏とも縱方向の条痕文となる。23・24・27は底部に近い部分である。

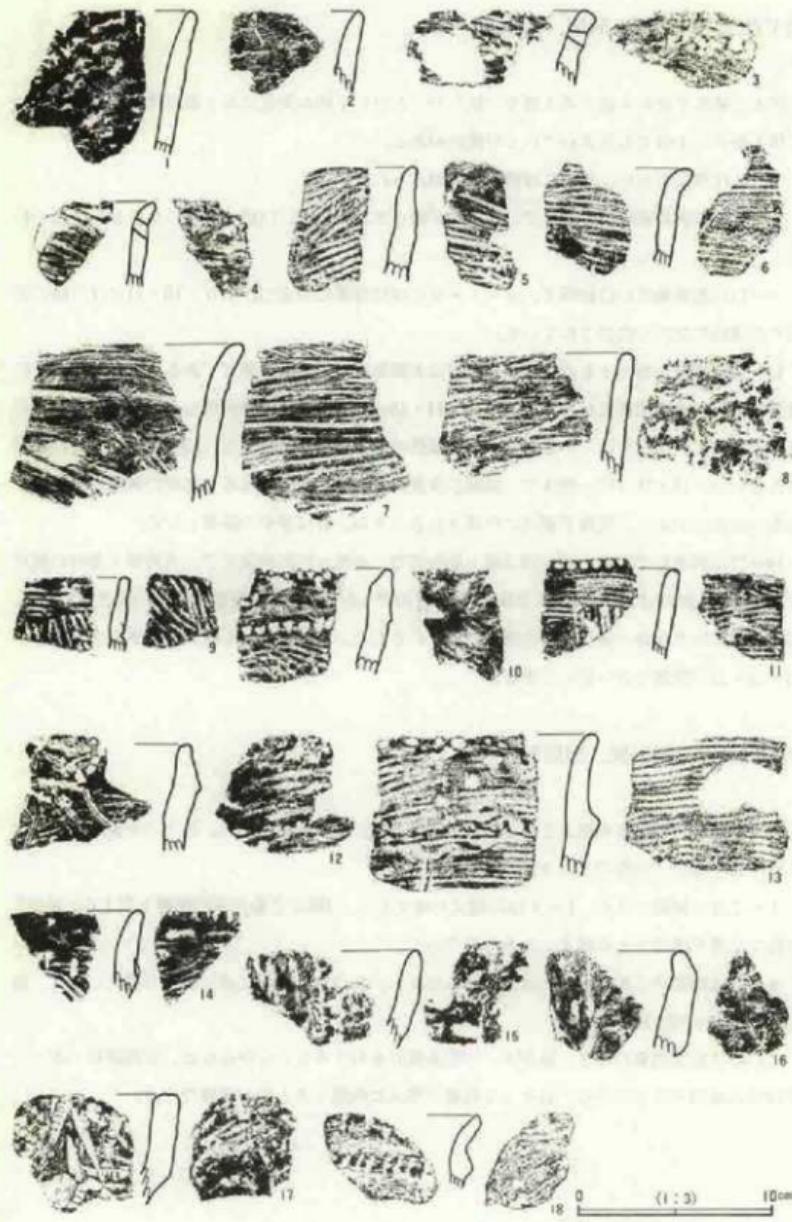
第VI群土器（第55図、図版31）

繩文前期前半の繩文を施文とする纖維土器である。個体数は少ない。胎土に多量に纖維が含まれており胎い。内面のミガキ調整はない。

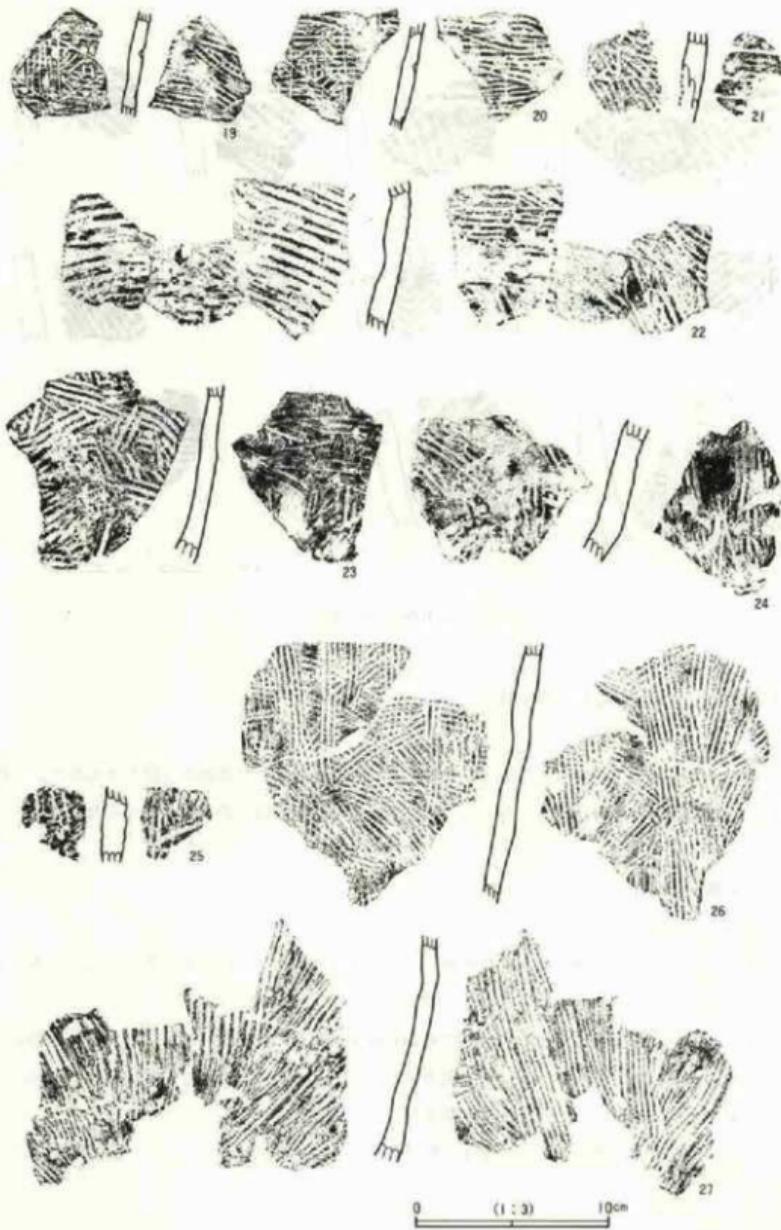
1～7は口縁部である。1～4は斜繩文を地文とし、口縁に2条の平行沈線を有する。5～7は地文に菱形構成をとる繩文のみのものである。

8～12は胴部片である。8には隆帯がみられる。また11は外面に縦に羽状の繩文があり、内面には条痕が残されている。

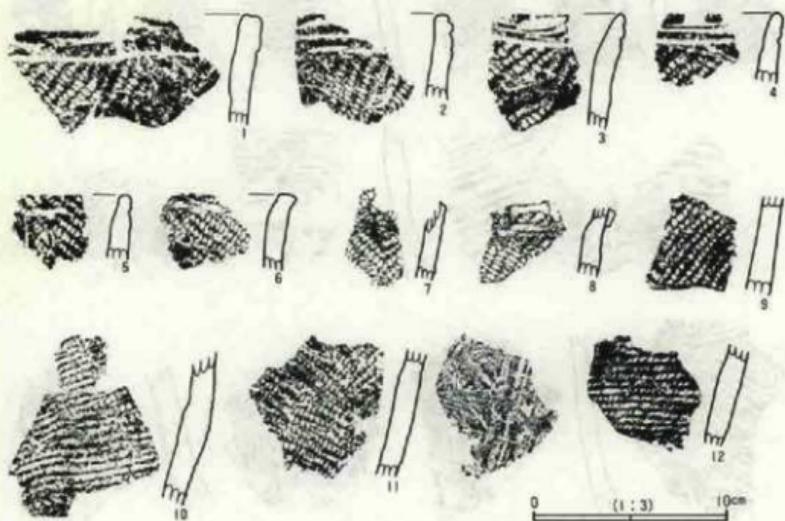
この群は器面調整の粗さ、隆帯(8)、内面条痕(11)を有するものの存在など、前期纖維土器としては古い様相を示している。おそらく花積下層式に所属するものが主体だろう。



第53図 第V群土器拓影図(1)



第54図 第V群土器拓影図(2)



第55図 第VI群土器拓影図

第VII群土器（第56図、図版31）

前期後半、関東西半から中部地方にかけてを分布圏にしていた諸磯系土器をまとめた。第VII群の浮島系土器とは併行関係にある。これを型式的にVIIa～VIIcの3類に細分した。

VIIa類（1～16）

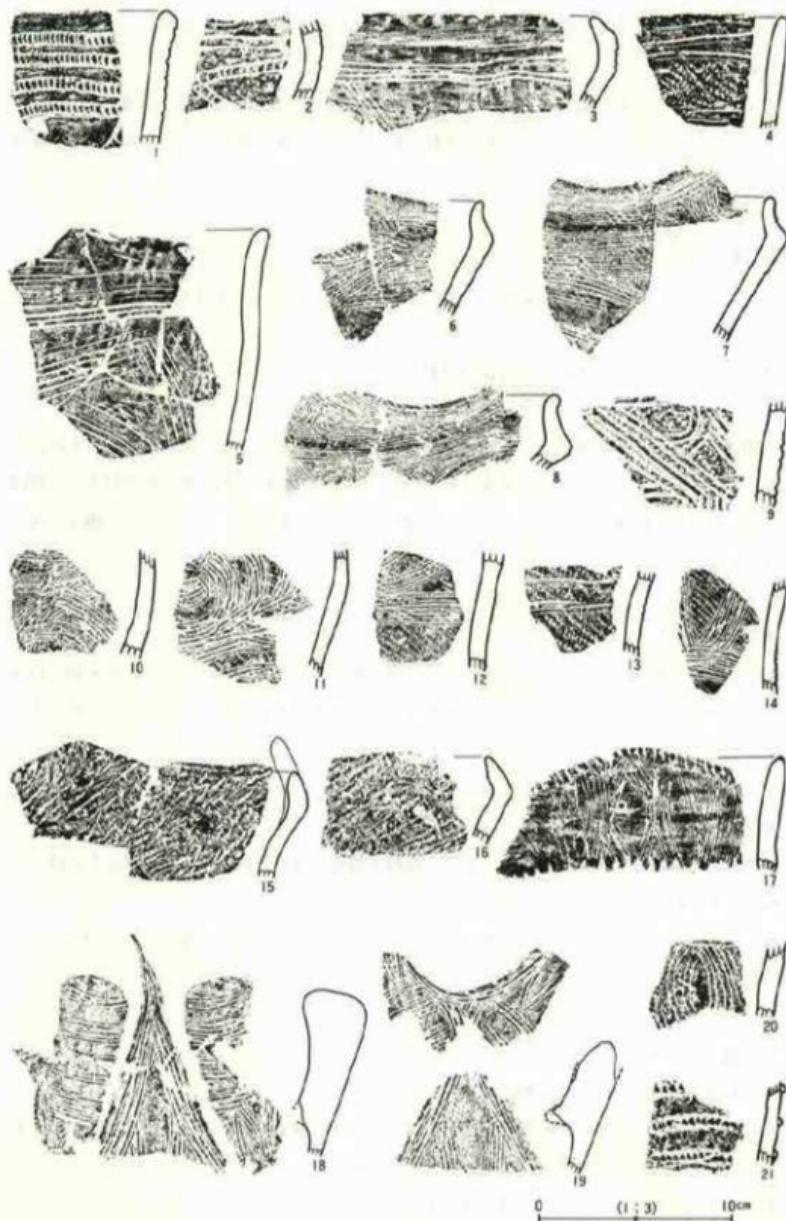
諸磯b式に比定できるものである。

1・2の半截竹管の押引き沈線文を持つ。3・5は条線文（3は半截竹管による）のみのもので、3はキャリバー形になる。

4・6～14は繩文を地文にし、半截竹管で直線及び曲線の沈線文が加えられている。胎土には小砾の混入が著しい。6～8は同一個体のもので、くの字に内湾する典型的な諸磯b式の口縁を有する。10～12・14も同一個体の胸部片であろう。

15・16は斜撓文（燃り戻し）の全面に施文されたもの、波状のキャリバー状口縁を呈している。

VIIb類（16～20）



第56図 第V群土器拓影図

条線、半截竹管による直線、円弧線を配し、レンズ形等の幾何学文を施すもので、諸磯C式に含められる。

17は縦長のレンズ形の組合せの文様を持つ。口縁部で口唇、口縁下に刻文列が配されている。18・19は緩い波状をなすキャリバー形の土器の把手部で、先端が鉈状を呈し、外面に細条線が施されている。胎土には細礫が目立つ。

VII C 類 (21)

1点のみ、結節浮線文を有するもので、十三普提式である。やはり胎土に細礫を含んでいる。

第VIII群土器 (第57~59図、図版32・33)

第VIII群の諸機系土器に併行し、常紀・下総台地を主な分布圏として存在する浮島系土器、浮島I~III式・興津式をまとめた。焼成は良好である。輪積みの接合部で割れる例が多い。第VIII群土器にみられた細礫の混入は少ない(45の一例のみ)。この群については、さらにVIII a~VIII c 3類に細別を行った。

VIII a 類 (1~17)

波状貝殻文を有するもの。8・14はサルボウ等の有肋の貝が用いられている。9・10・15はいわゆる浮島III式の三角文である。また1~4・6・8・11・12には、口唇に刻目(指頭等による)がある。

VIII b 類 (18~33)

興津式に特徴的な磨消貝殻文をもつもの。直線・曲線の沈線区画内に貝殻腹縁文を充填した文様に象徴される。

18~20と21・22はそれぞれ同一の個体である。両者とも、山形の口縁をなし、波頂部に縦に貼付文が付加されている。

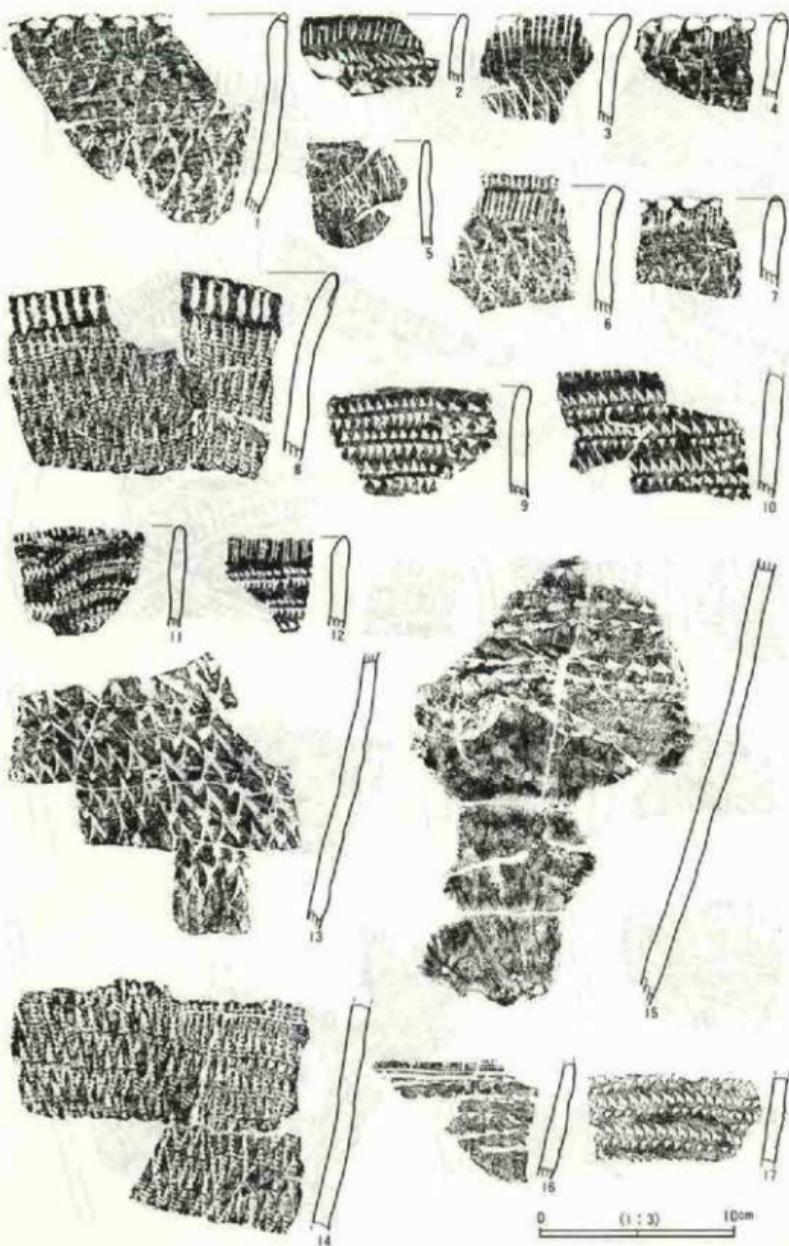
VIII c 類 (34~50)

連続刺突文、沈線文等を主文様とする群である。

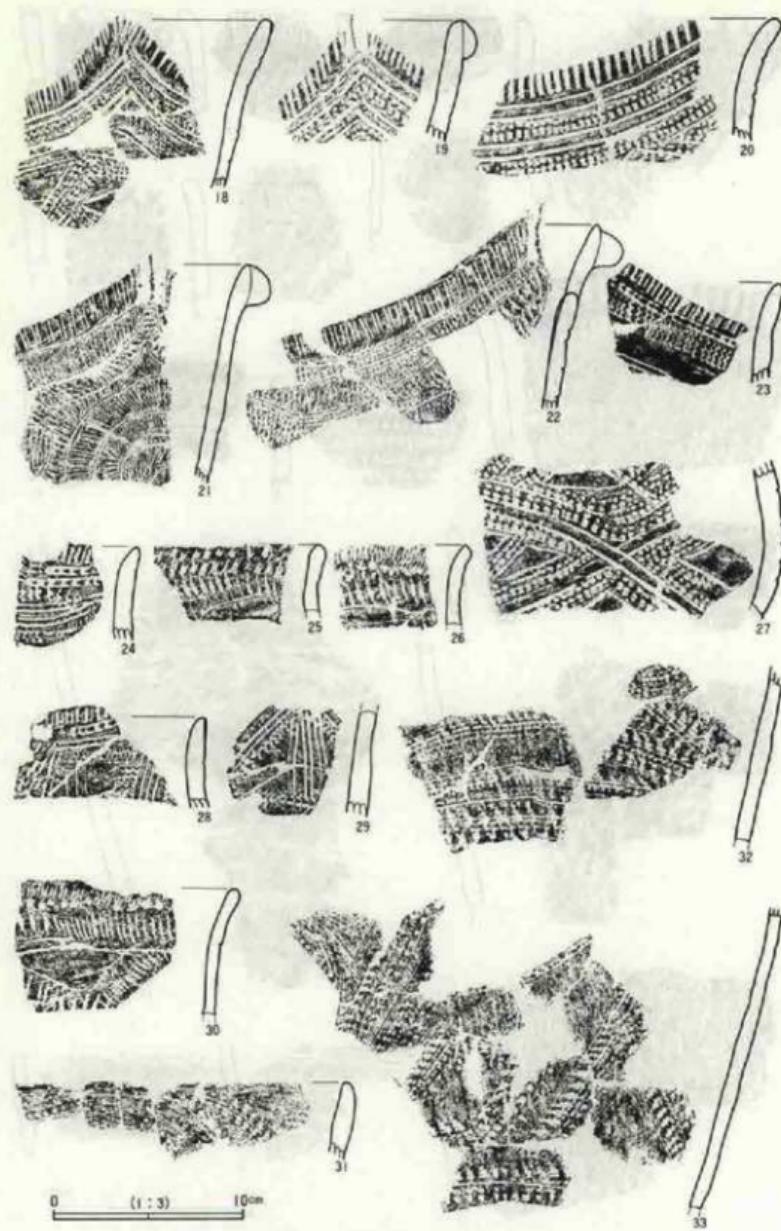
34は刻線帯下に、半截竹管の連続刺突文、波状貝殻文がみられる。37は、折返し状口縁をもち、粘土帶の接合部には連続刺突文・刻文列が加えられている。

35・36・38~48は条線文が主文様となるものである。

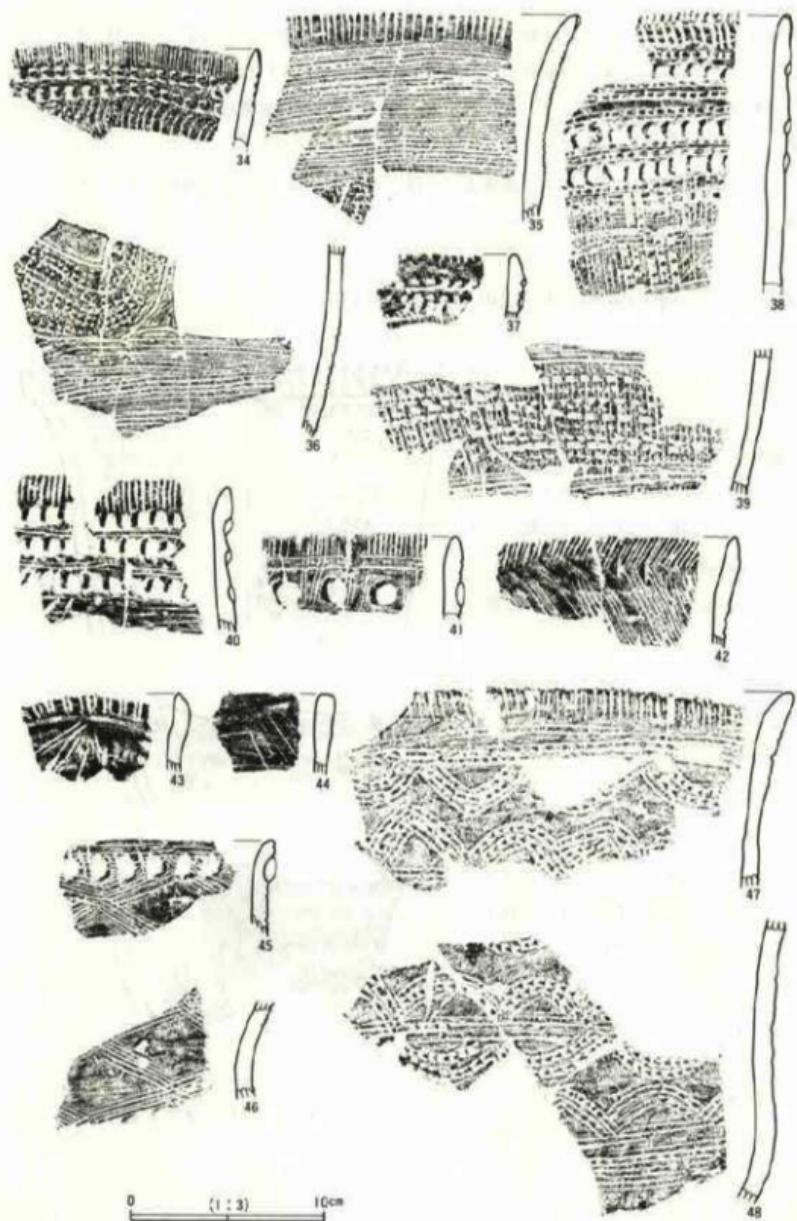
35・36は同一個体で条線により、文様帯上下が区切られている。38は押引き沈線、太い連続



第57図 第VII群土器拓影図(1)



第58図 第VII群土器拓影図(2)



第59圖 第VII群土器拓影圖(3)

刺突文、(凹凸文様となる)、条線・貝殻の押引き文が横位に施されている。40・41にも凹凸文はみられる。44には口縁の刻線帯がない。45・46は同一個体で口辺に凹凸文がみられ、体部には菱形区画の条線文が連続している。47・48は平行な条線間に連弧状に半截竹管の押引き文が配される。

45～48の幾何学文様は、本来の興津式の文様とは異なり、むしろ、諸磯系の十三菩提式の文様との共通性が感じられるものである。

第IX群土器 (第60図2・3、第61図、図版20・33)

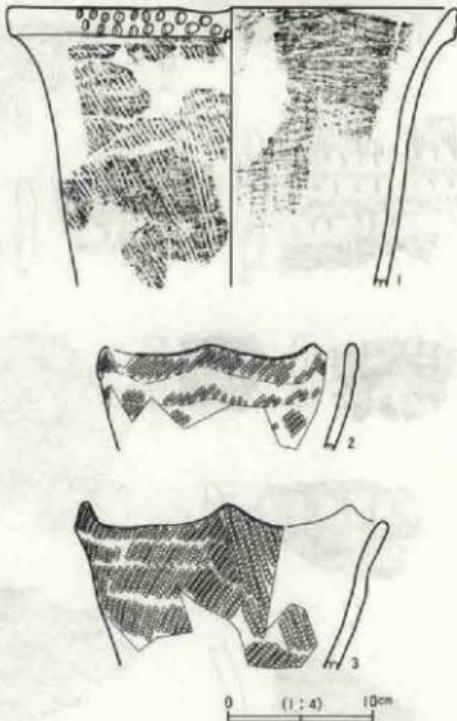
繩文前期末～中期初頭にかけての繩文を地文とする土器である。

第60図2・3は両者とも5単位の波状口縁をもち、繩文のみが施文されるもの。2は径18cm、繩文が浅く横位に施され、輪積痕が外面に残されている。3は径21.5cmで、LR横位の他に一部RL縦位の施文部があり、羽状をなしている。

第61図1～21は、口縁部破片である。11が波状の口縁をなす他は、全て平縁である。

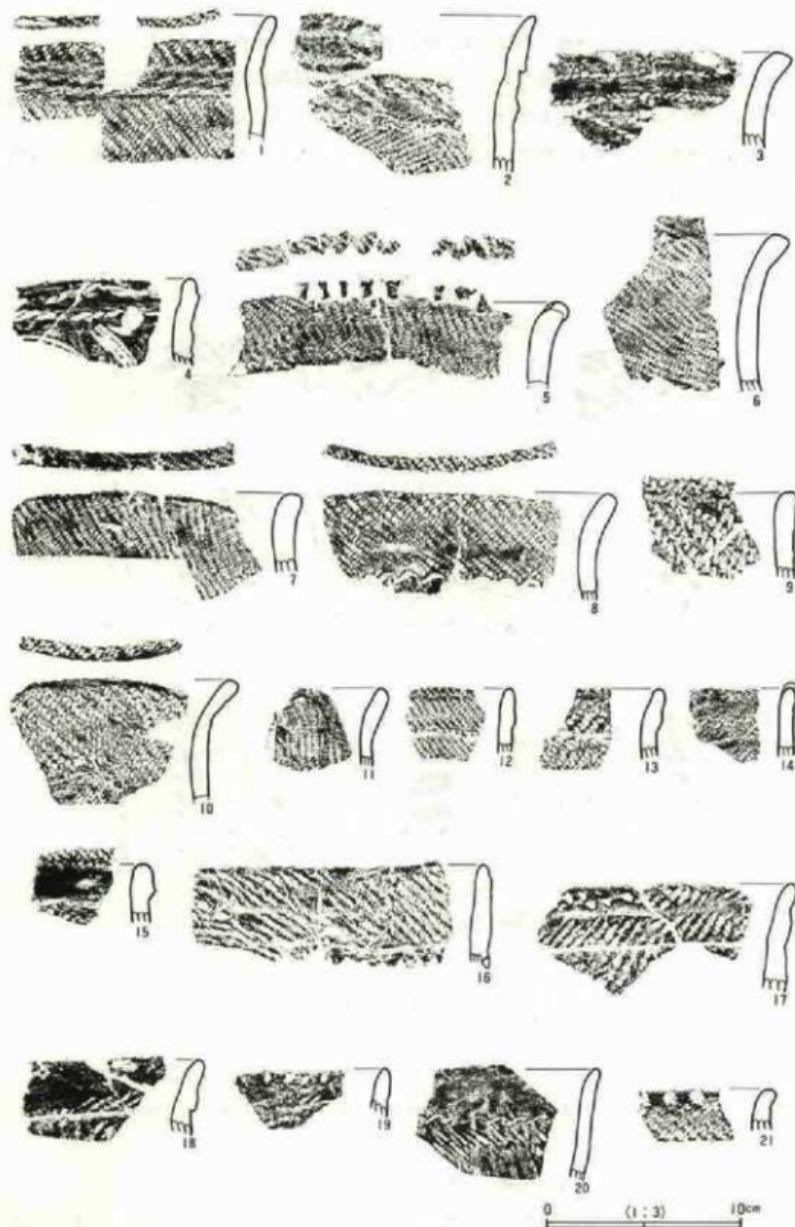
1～4は口縁に原体圧痕がある。5以下は体部斜繩文となるもので施文は横位である。原体は単節が多いが16・18・20は無節となっており、8と20には結節文が加わる。また第I群土器の様に口唇にも繩文の施文される例があり(1・5・6・7・8・9・10)、5には口唇部に波状の貼付文が加わっている。19・21は口唇に刻み目を有する。

12～18は折返し状口縁をとっており、16の下部には凹文状の刻みがある。



第60図 第IV・VI群土器実測図

第X群土器 (第62図、図版34)

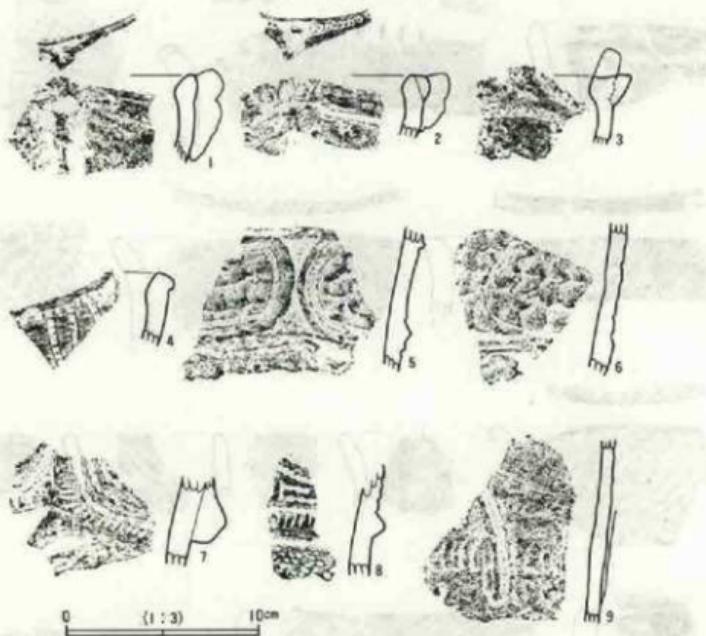


第61図 第IX群土器拓影図

阿玉台式土器である。隆線、角押し文、押引き文等で文様が構成されている。

1～4は波状になる。口縁部である。1・2は波頂部に隆帯が入る。口唇には三叉状の沈線がみられ、2では円形刺突文も加わる。3は頂部にU字形刻目が入る。

5～9は胴部片。5・6は枠形の区画がとられている。なお、1・2・3・9の胎土には細繩が多い量に含有されている。



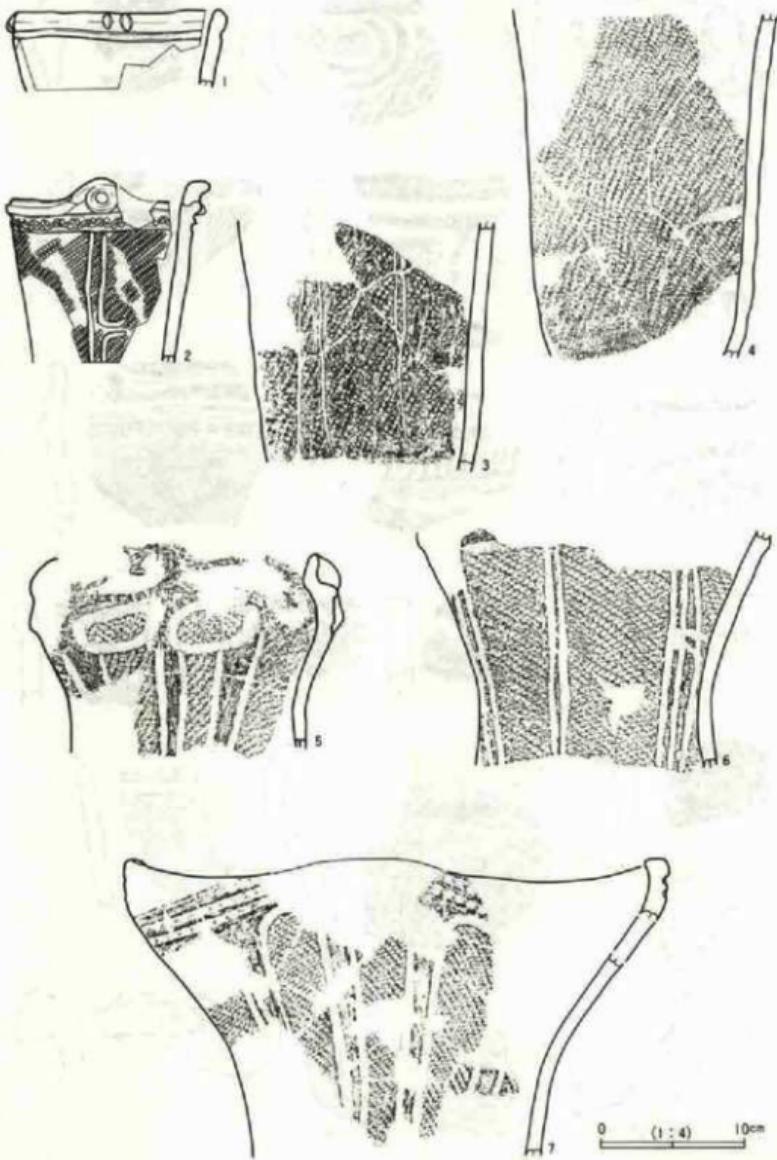
第62図 第X群土器拓影図

第XI群土器（第63図1～4・64図、図版20・34）

加曾利E式の古期、加曾利E I式に属するものである。全般的に黒味を帯びた色調を呈し、焼成は良好で堅緻な胎土である。地文に粗い斜繩文を有するものが多い。内面の研摩があまり顕著ではなく、成形時の凹凸を残すものもある。

第63図1～4は深鉢形土器の復原品である。

1は口縁部が三分の二ほど残存する個体で、径15.2cmの平縁のもの。口辺に廻る一条の太沈線があり、さらに口唇に継の平行沈線を4～5単位に配している。口縁部は肥厚し、かつ外削



第63図 第XII・ XIII群土器実測図



第64図 第XI群土器拓影図・実測図

ぎ状の口唇を呈している。胸部は無文である。

2は小型品で、径13.5cm、現高12.6cm、環状貼付文をもつ小突起を有する。口唇には太沈線が廻る。口縁下位には彫刻手法による波状文、胸部にR L縦位の斜綱を地文に、トの字形の平行沈線が配されている。

3・4は胸部の個体。地文に粗いR L縦位の斜綱をもつ。3には縦の沈線も加えられている。

第64図に図示したものは小片のものである。

1～6は縄文を地文に、隆線で口縁部区画文を描くものであり、1にはU字形、6は過巻形の文様がみられる。また1～3は口唇部に沈線が入れられている。

7・8は口縁部の区画内に縦沈線が充填されている。

9・10は平行沈線が口辺に廻るもの。11・12は太い波状の沈線、13は指頭状のもので連続刺突文が施されている。9・10・12・13は地文に縄文を持っている。

14・15は縄文（15は口縁は無文）、16は体部条線文を施文したものである。

17・18は環状の把手部で、太い沈線で装飾が加えられている。

19は口縁に断面円棒状の太い隆帯がみられるもので、隆帯上には過巻沈線文を加えた円形貼付文がおかれ、かつ側には交互刺突を付加した隆線が併置されている。

第X群土器（第63図5～7、第65図、図版21・35）

加曾利E期後半に所属するものである。いずれも堅緻な焼きで、内面の研磨は顕著である。

第63図5～7は復原実測されたもの。

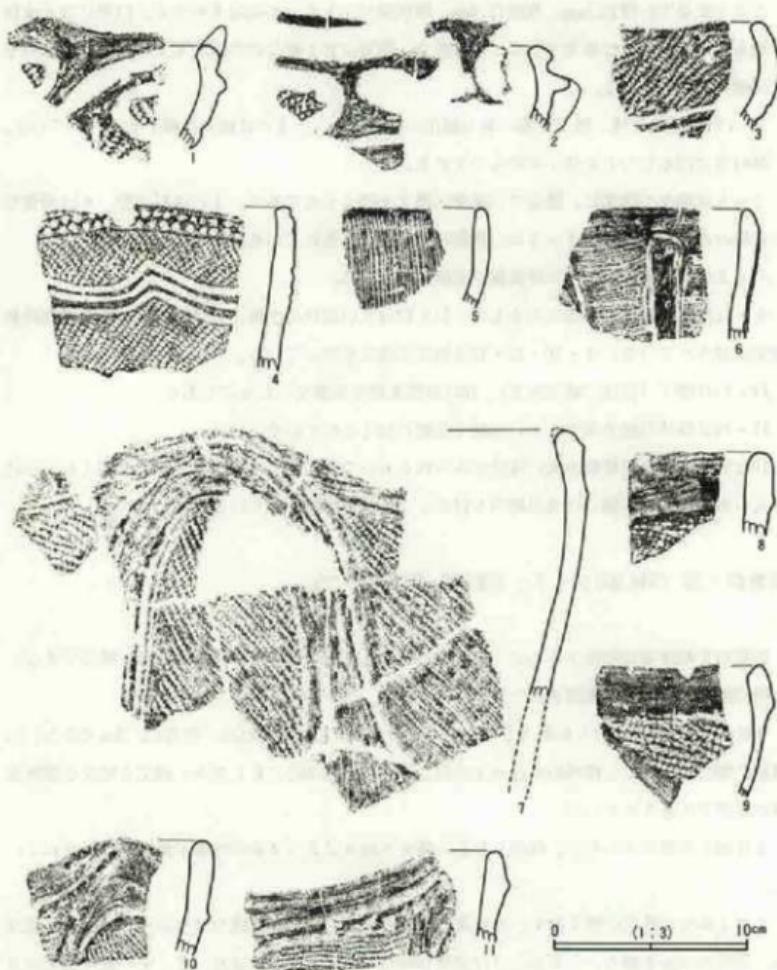
5は小突起（6単位か）を有するキャリバー形土器で、口径約21cm、現高13.3cmである。口縁部に横位の輥状文と梢円形の区画文が組合わされ、胸部にはR L多条の縄文を地文に縦無文帯が沈線で区画されている。

6は胸上半部のみのもの。複節L R Lの縄文を地文に2～3条の沈線で無文帯が配されている。

7は4単位の波状口縁を持ち、外反度の強いキャリバー形の口縁を呈する深鉢形土器。径38cm、現高20.5cmを測る。上半部のほぼ全周が残存している。口縁に沿って2条の連珠状刺突文が廻り、胸部には沈線で逆U字の区画を連続して配し、区画内を複節L R Lの縄文で充填している。施文部間はよく研磨されている。

第65図は、破片のものである。

1・2は太い沈線で横位区画文が描かれている。地文は縄文である。3・4は縄文を地文に沈線が横走するもの。4では口辺に連続刺突文、口縁に波状線文が配されており、連弧文系土器である。



第65図 第20群土器拓影図

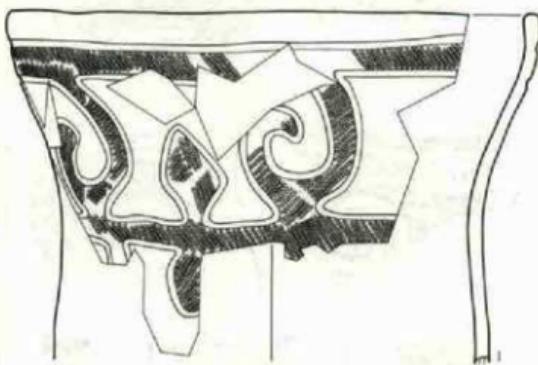
5は体部に縦の条線文、6は横位条線文の上に縦位に舌状の無文帯のあるもの。7～11は縦文を地文に微隆起の曲線で無文帯を逆U字形に配するもの。

第63図5～7、第65図1～6は加曾利E III式、7～11は加曾利E IV式に所属させ得る。

第XIII群土器（第66図1・2、第67図、図版21・35）

後期の土器を一括した。

第66図1は称名寺式の深鉢形土器で、口径37cm、現高23.5cmを測る。緩やかなキャリバ一状の器形をなし、縄文帯を横位に廻らせ構成する文様帶内に、J字形、木葉形文様の磨消縄文を有する。縄文と無文部の境は沈線で縁どられており。内面の研磨も頗著である。



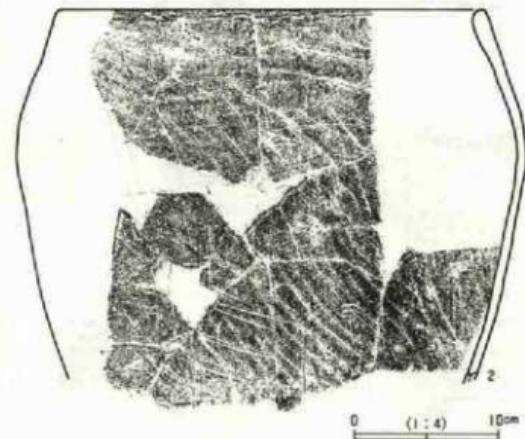
第66図2は口縁の内湾する深鉢形土器で、口径30cm、最大径35cm、現高25.5cmを測る。文様は斜行の弧状沈線が幾重にも施されるものである。極立った特徴はないが、安行式の粗製土器かと思われる。

第67図1～6はJ字形に枠取りされた磨消縄文が配されるもので、称名寺式である。

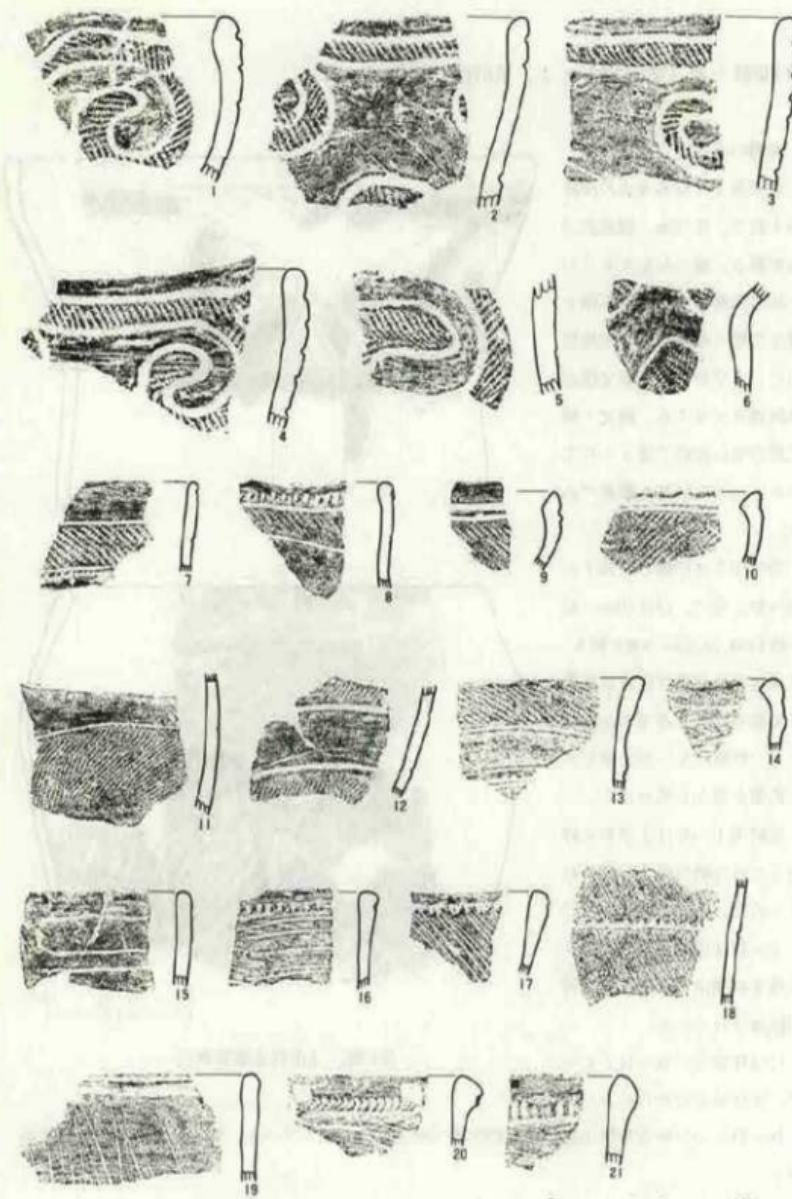
7～14は加曾利B式で縄文を地文に横位の沈線で無文帯が区画されている。

15は枠組文のみられるもので、安行式に含められよう。

16～21はいわゆる粗製土器で、斜行沈線文が主文様となっている。20・21は紐縄文土器である。



第66図 XIII群土器実測図



第67圖 第XIII群土器拓影圖

2. 土製品・石製品

土器片錐（第68図1～18・図版36）

図示したものは18点であり、以下の3種に類別が可能である。

- A. 横長のもの…………… 1
- B. 縦長のもの…………… 3・4・5・6・9・10・15・16・17・18
- C. 縦横比のほぼ等しいもの……… 2・7・8・11・12・13・14

2・4・7・13・17は周縁がよく擦られている。

切り込みは上下に一对設けられているが、例外的に14には側縁にも入られており、十文字に糸がかけられたことも想定される。また切り込みの形状については、V字形に大きく抉られるものが主だが、1・2・4は浅い切り目のものである。

使用されている土器は、1～17が第II、III群、即ち中期加曾利E期のもので、18のみが第XIII群加曾利B期のものである。

土製円板（第68図19～22、図版36）

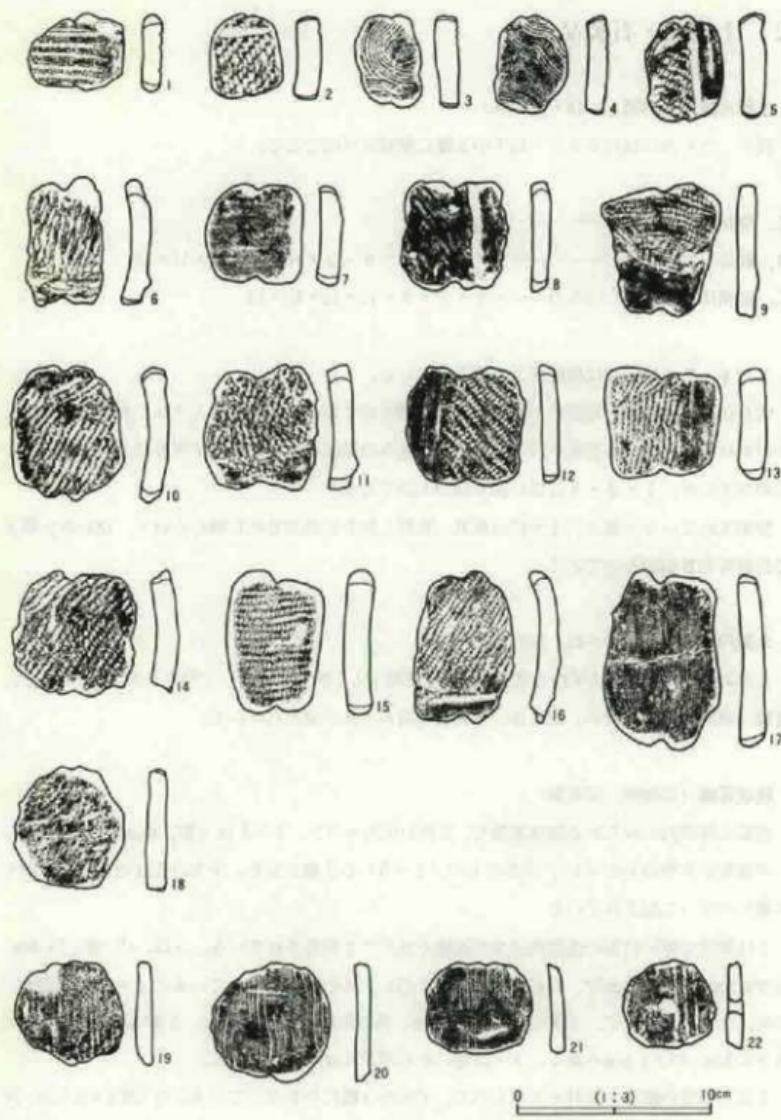
4点の出土である。いずれも第I群土器を素材とし、縁を粗割りして円形に加工されている。周縁は研磨されていない。22には、中央に両面から孔が穿たれている。

块状耳飾（第69図、図版36）

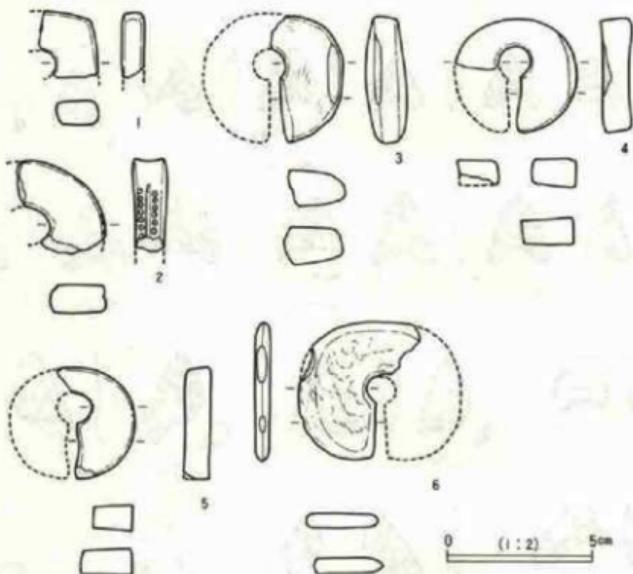
前期に特徴的にみられる块状耳飾で、6点の出土をみた。1～5は土製、6は滑石製である。平面形が方形のもの（1）、円形のもの（2～5）の2種がある。中央の孔は切り目の対向する側に片寄って配されている。

2は側面に細い竹管の連続刺突文が沈線を挿んで2列施されている。3は、巾（推定）5.8cm、長さ4.3cm、厚さ1.3cmで、中心部が最も厚く凸レンズの断面をなしている。4・5はほぼ同一形状、サイズのもので、4が巾（推定）4.2cm、長さ3.8cm、厚さ0.9cm、5が巾（推定）4.2cm、長さ3.9cm、厚さ1.0cmを測る。3とは逆に中心部がくぼみ気味である。

6は片岩質の滑石を素材とするもので、平面形は梢円形をなしている。巾（推定）5.7cm、長さ4.7cm、厚さ0.5cmと、土製のものに比して大形、薄手である。孔はほぼ中央に位置している。但し、切り目の長さは約2.0cmで、土製のものとほぼ同じである。



第68圖 土器片鍛拓影圖



第69図 塊状耳飾実測図

3. 石器

石鏃 (第70・71図、図版38)

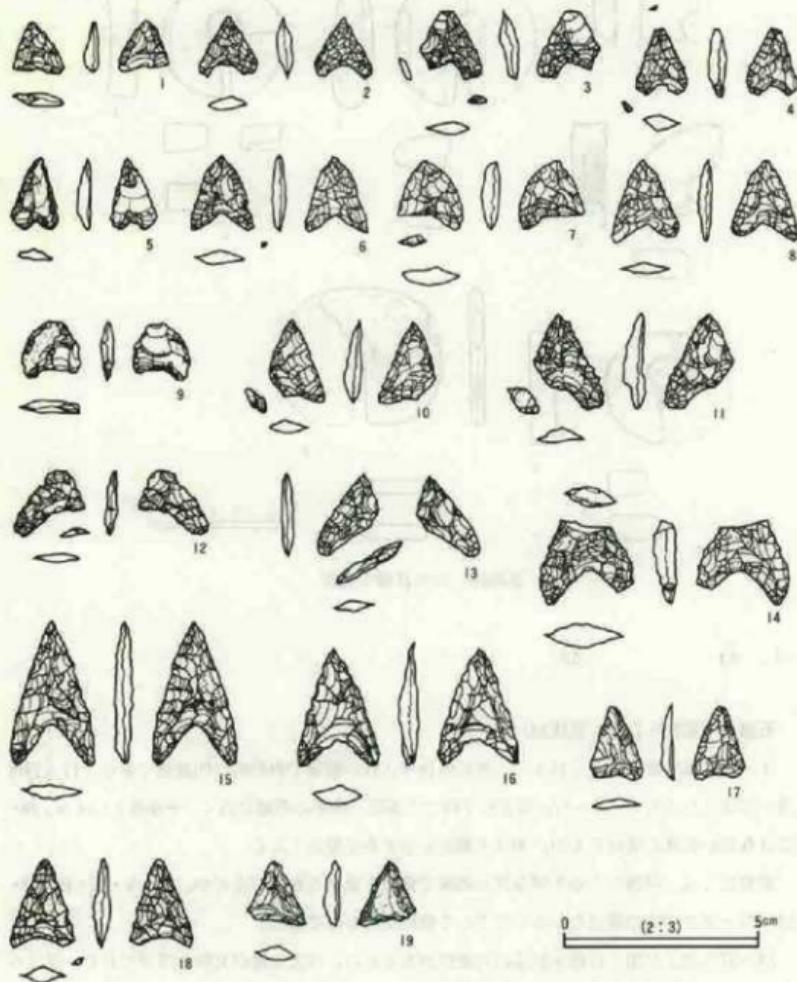
1～30は無茎鏃である。16までは基部の抉り込みの顯著で典型的な凹基鏃である。17～19は浅い凹基となるもの。20～27は基部が平坦で二等辺三角形の形態に近く、平基鏃といえる。28・29は基部が弧状に張出すもの。30は木葉形を呈する小型品である。

調整面では、両面からの丁寧な押圧剥離で整形を受けるものが主だが、5・9・17・19・20・24・27・28は剥片の縁辺をかるく加工して整形したものである。

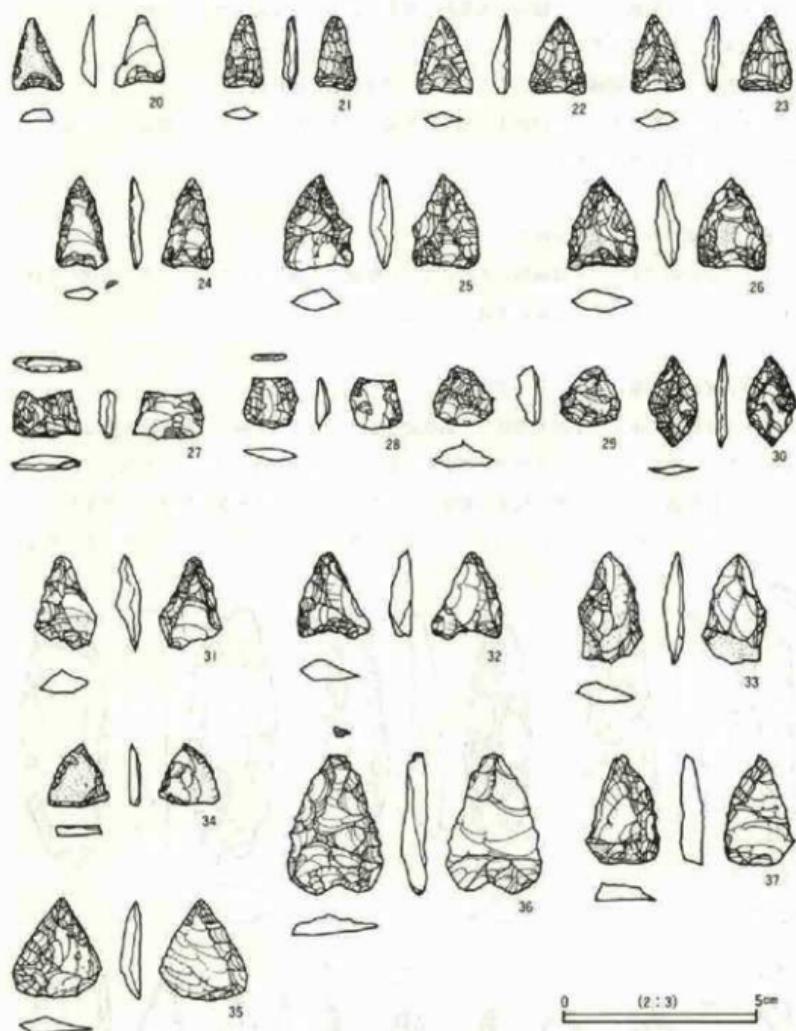
31～37は加工が粗く石鏃未製品の可能性があるもの。31は先端が丸味を帯びており、ドリル的な用途も考慮できよう。35は涙滴形をしている。36は先端のバルブが取りきれていない。加工は片面のみである。37は半欠品で尖頭状となっているが、加工はスクレイバー的である。

完成品と未完成との区別は石器の場合判別し難い面があり、31～35はそのままでも使用できないことはない。完全に未製品と断言できるものは36のみである。

石質は黒曜石を素材とするものが18点と最も多く、約半数を占め、次いでチャート15点、他は玄武岩が3点、メノウ1点である。



第70図 グリッド出土石器実測図(1)



第71図 グリッド出土石器実測図(2)

尖頭器 (第72図 1～5、図版37)

1・2は押圧剥離により、細長い木葉形に整形したもの。先端と基部は欠損している。先土器時代末から草創期の所産であろう。

3は肉厚の素材の周縁に加工のみられるもので未製品と思われる。

4・5は先端部である。5は加工が粗く未製品かと思われるもので、先端部が丸くなってしまっており石錘的な用途も考えられる。

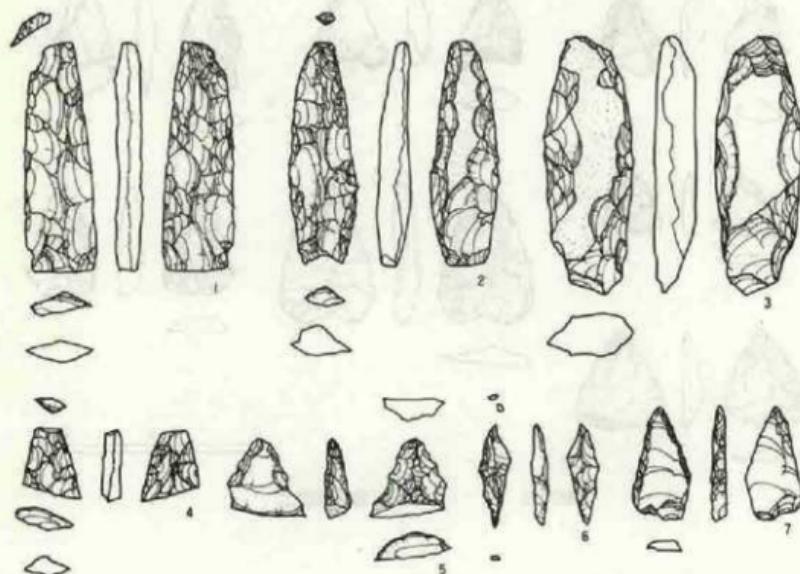
石錐 (第72図 6・7、図版37)

6・7は石錐である。6は細長い小形品で、片側縁に刃溝しがある。7は薄い板状の素材を尖頭状に作出したもので、先端が磨耗している。

スクレイパー (第73図 1～8、図版39)

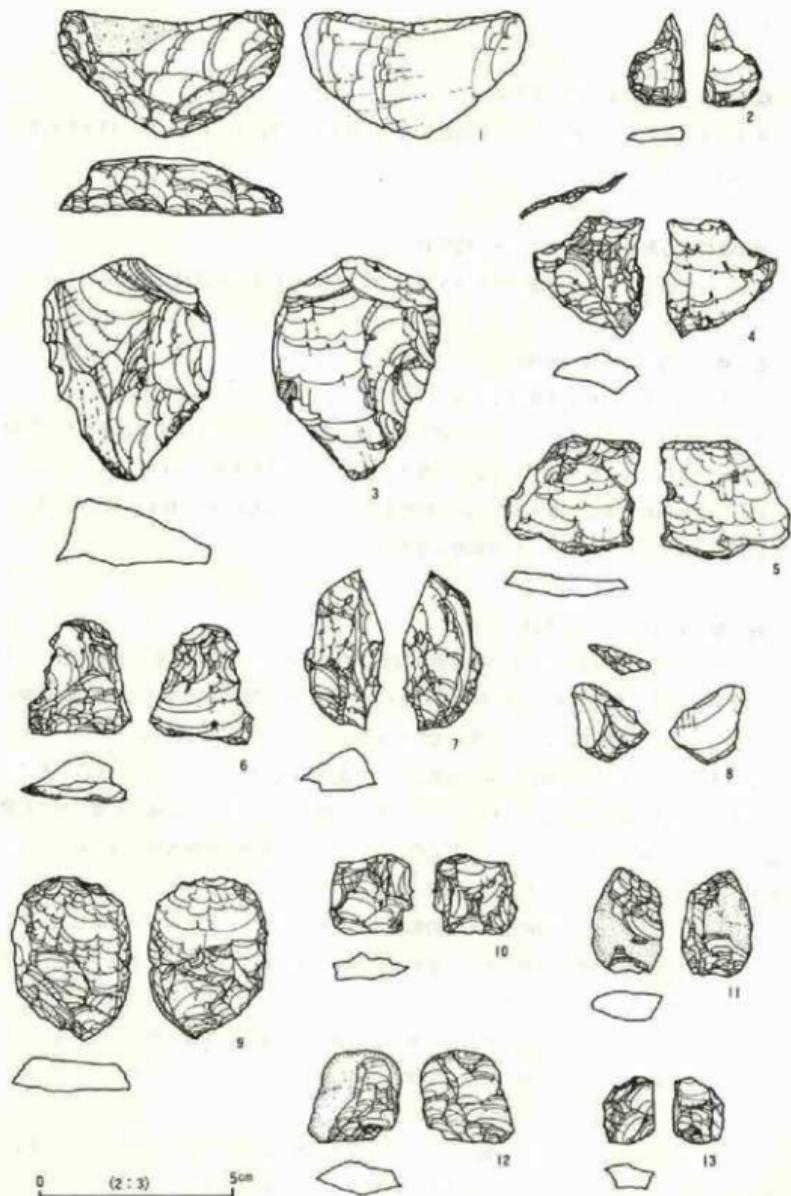
1・2は搔器である。1は大型品で、弧状に加工された刃部を持つ。基部は欠損している。玄武岩製の石質からみて先土器時代に属する可能性が高い。2は小品で半分欠損している。

3～8は削器である。刃溝し程度の簡単な加工がみられる。3・5はV字状の刃部をなしており、4・6は連続ノッチ状の刃部を持つ。7は半次品、8は小型のもの、石質は全て黒曜石



第72図 グリッド出土石器実測図(3)

0 (2:3) 5cm



第73図 グリッド出土石器実測図(4)

である。

楔形石器（第73図9～13、図版39）

9は玄武岩製で、梢円形を呈する。削器としての加工が一部にみられる。10～13は方形を呈する小形品である。

使用痕のある剝片（第74図1～9、図版40）

1～6は側縁、7～9は下端に使用痕を残す。1～3は縦長剝片が素材となっている。

石核（第74図10～14、図版40）

5点を図示した。石材は黒曜石である。

10は大柄な縦長剝片を素材として、下部から小剝片のとられているもの。11は多面から打撃が加えられている。一端が敲かれており、楔形石器としての使用も考えられる。

12～14は小型品である。12は多方向から打撃を受けている。13は一面に疊面が残されており、小剝片がとられている。14には打面調整の跡がみられる。

石斧（第75・76図、図版41）

石斧類を一括した。図示したものの総数は23点である。その内、打製石斧は計10点（1～3・11～13・19～22）、磨製石斧は計12点（4～10・14～18）、その他が1点（23）である。磨製石斧には、刃部のみを研磨する局部磨製のものが4点（4～7）含まれている。

1・2は偏平で小型の円盤の一端を両面加工し刃部を形成するもの。2には、もう一端に打痕がある。3は周縁部を両面から粗く打欠いて楔状に整形したもので、周縁は刃潰しがされ磨滅している。刃部は片面加工で丸ノミ状に作出されている。両面には研磨面が残されており、磨製石斧の下半部を再利用したものと推測される。

4は板状の素材を用いた短冊状の局部磨製石斧で、柄部は厚く、刃部で厚みが減している。

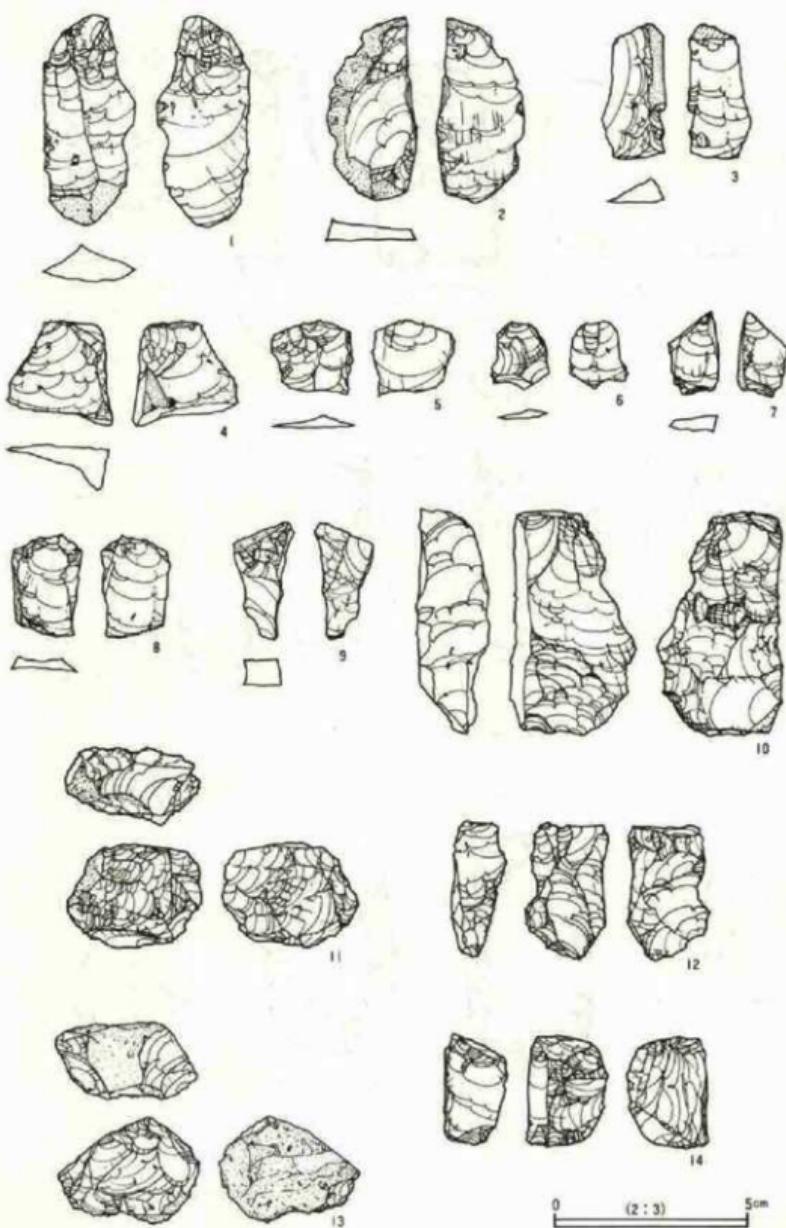
5・6は局部磨製石斧の刃部であり、整形時の剥離が残されている。5は刃部が使用によりさらに剝離されて直線状を呈している。

7は局部磨製石斧で、小判形に整形した剝片の一端を磨き弧状の刃部を作出している。

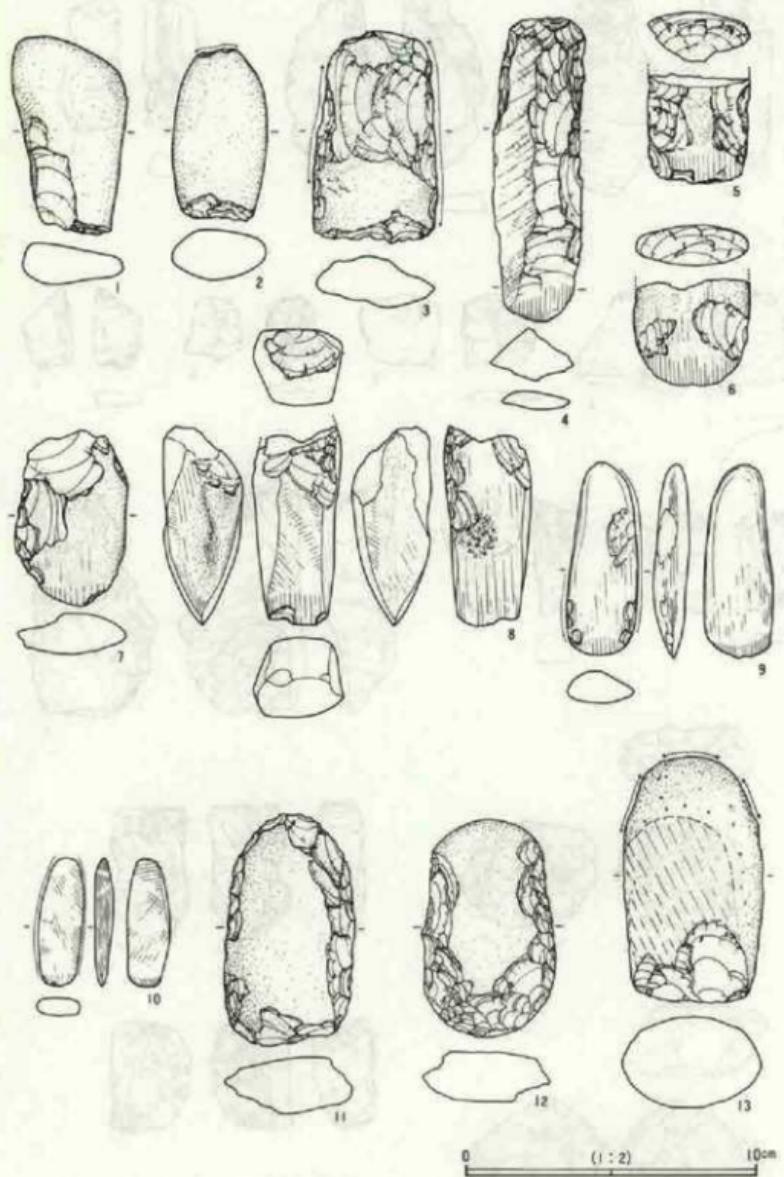
8は肉厚の素材の両面を丁寧に研磨して楔形に整形したもので、一端は欠損している。また一面に部分的な敲打痕がみられる。

9・10は小型品。9は蛇紋岩の偏平で細長い小石を丁寧に研磨して作成したもの。刃部は片刃気味である。10は最も小型のものであり、側縁もきれいに磨いてある。

11は梢円に整形し、両面及び側縁の一部を砥いでいる。刃部は使用による為であろうか、粗



第74図 グリッド出土石器実測図(5)



第75図 グリッド出土石器実測図(6)

く欠けている。あるいは未製品か、表面の風化が激しいので判然としない。

12は偏平な小円礫を素材とし、側縁を両面加工、刃部を片面加工で梢円形に整形しており、自然面が多く残されている。刃部は殆んど砥がれていない。

13は肉厚の梢円礫を細かく敲いて整形し、刃部を砥ぎ出したもの。刃部は片面から打撃を受け、大きく剝離されて、片刃状になった先端がさらに使用されている。基部、側縁には敲打痕が残されており、特に基部では、先端、側縁部（軽く抉りが入る）が著しい。楔としての用途、着柄のための加工等が考慮されよう。

14は偏平円礫の周縁を粗整形の後、基部周縁を平坦に擦り、刃部を片刃状の砥ぎ、両面剝離で梢円形に調整している。周縁には最初の剝離痕が残存している。

15は肉厚の始刀石斧、両面、側面ともよく磨かれている。剝離痕がかなり残されており、端部には敲打痕がある。

16～18は肉厚の断面長方形で、全面がよく磨かれた磨製石斧である。16は完形。末端に使用痕（擦痕）がある。17は基部を欠損するもので、始刀をなす。片側面に剝離、反対側の側面に敲打痕がある。敲石として転用されたものか。18は両端の割れで下端は薄く鶲状を呈している。上部に抉りの加工がされており、打製石斧のように柄をつけて転用されたことが考えられる。

19～22は打製石斧である。19は片岩系の石を素材とする大型のもので先端部は磨滅している。22は円礫の表皮の部分は簡単に加工したのみのもの。20は薄手で両刃部、ノッチ部に磨滅がみられる。21は小型品である。

23は棱形をした偏平な礫で、柄部の両側縁にノッチが入れられ、刃部にも2カ所剝離が入っている他は加工がない。自然礫を利用した鎧状の石製品で、打製石斧と同様の使用法がなされたものとみられる。

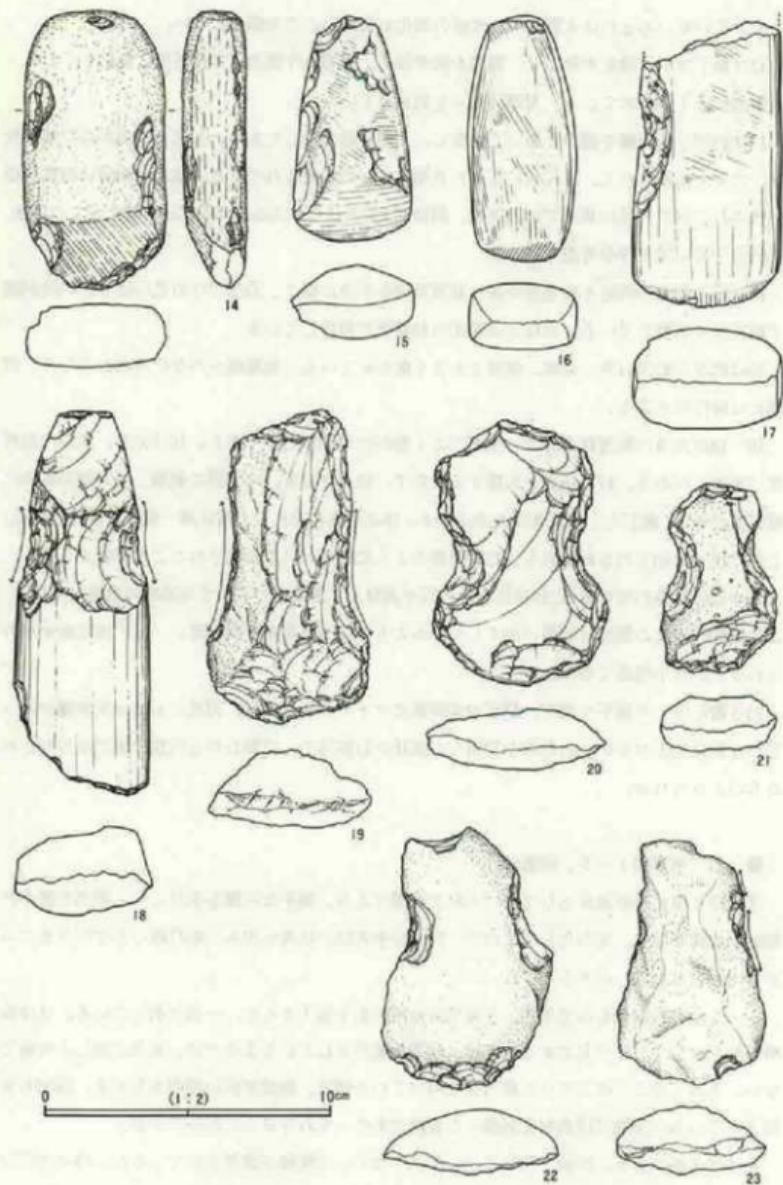
磨 石 (第77図1～5、図版42)

主に擦り潰し等の道具として用いられた石器である。偏平な円礫を素材とし、両面が磨かれ側縁が擦面をなす、定形化したもので、両面の中央部には浅い凹み（敲打痕のみで凹みまでいかない場合もある）がみられる。

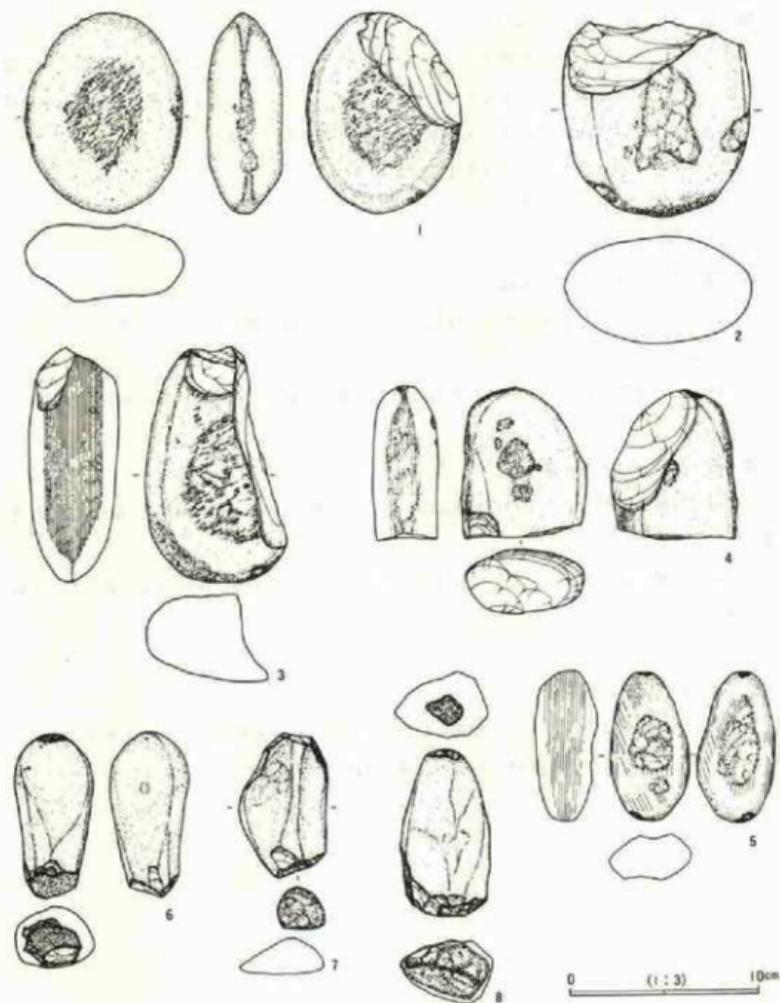
1～3は典型的なものである。1は平面が梢円形を呈するもの。一部欠損している。2は長梢円形をなしており半欠である。側縁、端部も使用されているようだが、風化が激しく明確でない。3は三分の一ほど欠けた梢円礫を用いている例で、側縁に広い擦面を有する。端部も使用されている。裏面には表皮を剥離した痕跡があり、それをさらに磨いている。

4は半欠品である。断面三角形に近い形状をなす。両側縁が使用されているが、特に巾広の側に使用痕が顕著である。

5は細長い卵形を呈した小型品である。小さいわりには磨石として整っている。表面の風化



第76図 グリッド出土石器実測図(7)



第77図 グリッド出土石器実測図(8)

が激しく明瞭ではないが側縁の他先端部も使用されていると思われる。

敲 石 (第77図 6～8、図版42)

3点図示したが、ほぼ同一形態をとっており定形化しているといえよう。長円礫の片端に敲いた痕（厳密にいえば敲いたのみならず、擦りも加えられていると思われる）があり、その使用面は擦り減って平坦な面をなす。末端部にも打痕が残されている。

6は先を小さく打欠いた上、片面を主に使用している。

8は使用部位が側面にまで及んでいる。

石 盆 (第78図 1・2、図版42)

1は半欠品。よく使われ深い凹みをなしている。裏面には雨垂れ石状の不規則な小さな凹みがみられる。

2は両面から使用され凹みのみられるもので、石皿片である。側縁には敲打痕を有する。

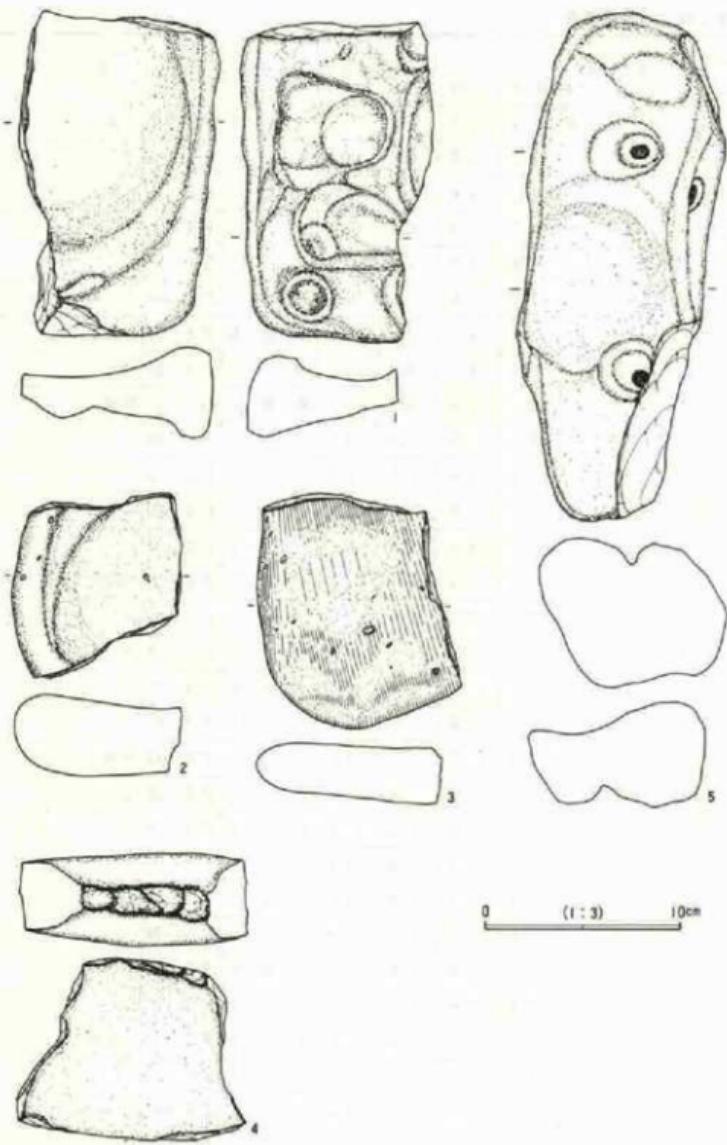
台 石 (第78図 3・4、図版42)

3は偏平な礫を素材としたもので半欠品。一面がよく磨られている。周縁にも若干使用痕（擦潰し痕）がある。

4は偏平な礫を截ち割って、台形に加工してあり、完成品である。両面がよく磨かれ、上縁には使用痕がみられる。

四 石 (第78図 5、図版42)

長さ26cm、巾10cmほどで、大きく細長い片岩系の軟質な礫を素材としている。表面は凹凸が激しいが使用によるものかは判然としない。深さ1cmほどの円錐状の小孔が4ヶ所みられる。



第78図 グリッド出土石器実測図(9)

第1表 石器観察表

擲出 番号	No.	器種	サ イ ズ			重量(g)	石 質	出土グリッド	備 考
			長(cm)	巾(cm)	厚(cm)				
70	1	石 鐛	(1.3)	(1.3)	0.4	(0.5)	チャート	F 3-16	片脚欠
	2	〃	1.5	1.5	0.4	0.5	黒曜石	F 4-33	完
	3	〃	(1.7)	(1.6)	0.4	(0.7)	〃	E 2-10	片脚欠
	4	〃	(1.7)	(1.3)	0.5	(0.7)	〃	F 4-26	
	5	〃	1.8	1.2	0.3	0.5	〃	E 3-87	完
	6	〃	(1.9)	(1.6)	0.3	(0.7)	チャート	F 4-04	
	7	〃	(1.8)	(1.7)	0.5	(1.0)	黒曜石	F 4-41	片脚欠
	8	〃	2.1	1.7	0.3	0.9	チャート	F 4-20	完
	9	〃	(1.5)	(1.6)	0.3	(0.6)	黒曜石	D 3-97	片脚欠
	10	〃	(2.1)	(1.5)	0.4	(0.9)	〃	F 4-35	〃
	11	〃	2.4	(1.8)	0.5	1.4	〃	E 2-29	〃
	12	〃	1.6	(1.9)	0.3	0.5	〃	E 1-29	〃
	13	〃	(2.0)	(1.4)	(0.4)	(0.7)	チャート	F 3-34	〃
	14	〃	(2.2)	(2.4)	0.6	(2.1)	黒曜石	F 3-59	先端欠
	15	〃	3.6	2.2	0.5	2.3	チャート	E 1-49	完
	16	〃	3.0	2.1	0.5	2.1	玄武岩	E 2-31	〃
	17	〃	(1.9)	(1.4)	0.3	(0.5)	黒曜石	F 4-02	
	18	〃	(2.3)	(1.6)	0.5	(1.0)	チャート	F 3-57	
	19	〃	(1.6)	(1.5)	0.4	0.6	〃	F 4-11	片脚欠
71	20	〃	1.8	1.3	0.4	0.8	チャート	F 3-49	完
	21	〃	(1.9)	1.0	0.3	(0.6)	チャート	E 3-56	
	22	〃	2.0	1.4	0.5	1.1	チャート	F 4-00	完
	23	〃	2.0	1.4	0.4	1.0	玄武岩	D 4-60	完
	24	〃	(2.4)	(1.3)	0.4	(0.9)	メノウ	E 3-78	
	25	〃	2.4	1.8	0.6	1.9	黒曜石	F 3-23	完
	26	〃	(2.4)	1.8	0.6	(2.0)	チャート	E 3-47	
	27	〃	(1.2)	1.8	0.4	(1.0)	チャート	F 4-32	先端欠
	28	〃	(1.3)	1.4	0.3	(0.6)	黒曜石	F 3-24	〃
	29	〃	1.5	1.5	0.7	1.1	〃	F 3-05	完
	30	〃	2.3	1.3	0.2	0.5	〃	E 2-88	〃
	31	石鍛(未製品)	2.4	1.6	0.6	1.5	チャート	F 3-68	
	32	〃	2.2	1.8	0.6	1.6	黒曜石	E 2-65	

拂団番号	No	器種	サイズ			重量(kg)	石質	出土グリッド	備考
			長(cm)	巾(cm)	厚(cm)				
71	33	石撫(未製品)	2.9	(1.6)	0.5	(2.0)	玄武岩	E 3-00	
	34	〃	1.6	1.6	0.3	0.7	黒曜石	F 3-24	
	35	〃	2.6	2.3	0.6	2.4	チャート	E 3-37	
	36	〃	3.6	2.5	0.6	6.0	チャート	F 4-07	
	37	〃	2.9	1.9	0.6	2.7	黒曜石	F 3-04	
72	1	尖頭器	(5.8)	1.8	0.7	(8.9)	頁岩	E 3-98	先端、基部欠
	2	〃	(5.7)	1.8	0.9	(8.6)	珪質頁岩	E 3-35	〃
	3	〃	6.6	2.3	1.1	20.7	玄武岩?	D 4-71	完
	4	〃	(1.9)	(1.5)	(0.5)	(1.4)	チャート	D 4-60	尖端部
	5	〃	(2.0)	(2.0)	(0.7)	(2.1)	玄武岩	F 3-03	〃
	6	石錐	2.6	0.9	0.5	0.6	チャート	E 2-39	完
	7	〃	3.0	1.5	0.4	2.1	玄武岩	E 3-66	〃
73	1	搔器	3.3	5.8	1.5	30.9	玄武岩	E 4-60	半欠
	2	〃	2.4	1.5	0.6	1.6	黒曜石	F 2-01	半欠
	3	削器	5.8	4.4	1.8	39.1	〃	E 1-49	完
	4	〃	3.0	2.9	1.1	6.3	〃	E 3-94	〃
	5	〃	3.0	3.4	0.8	7.0	〃	F 3-19	〃
	6	〃	3.0	2.7	1.1	6.5	〃	F 3-14	〃
	7	〃	4.1	(2.1)	1.0	(7.2)	〃	F 3-04	半欠
	8	〃	2.0	2.0	0.6	1.4	〃	F 3-05	完
	9	楔形石器	4.2	3.0	1.1	17.1	玄武岩	E 3-92	〃
	10	〃	2.1	2.2	0.9	3.7	チャート	F 3-58	〃
	11	〃	2.7	1.8	0.8	4.8	〃	F 3-58	〃
	12	〃	2.4	2.2	1.0	5.2	〃	F 4-42	〃
	13	〃	1.8	1.3	0.6	1.4	黒曜石	E 2-39	〃
74	1	使用痕のある剝片	5.4	2.4	1.1	9.2	黒曜石	F 3-11	
	2	〃	4.7	2.3	1.1	8.5	〃	F 3-04	
	3	〃	3.4	1.7	0.7	3.6	チャート	F 4-01	
	4	〃	2.7	2.7	1.1	5.1	黒曜石	F 3-05	
	5	〃	1.9	2.2	0.4	1.2	チャート	E 2-00	
	6	〃	1.8	1.5	0.3	0.6	黒曜石	F 3-05	
	7	〃	2.1	1.3	0.6	1.3	〃	F 3-04	
	8	〃	2.6	1.8	0.5	2.3	チャート	F 4-00	

捕獲番号	No.	器種	サイズ			重量(g)	石質	出土グリッド	備考
			長(cm)	巾(cm)	厚(cm)				
74	9	使用痕のある剝片	3.0	1.5	0.9	4.2	々	E 3-83	
	10	石核	5.8	3.3	1.9	28.4	黒曜石	F 3-44	
	11	々	2.7	3.5	2.0	19.5	々	E 2-70	
	12	々	3.5	2.2	1.4	8.8	々	E 2-87	
	13	々	2.8	3.7	1.9	19.0	々	F 3-02	
	14	々	2.9	2.1	1.7	10.1	々	E 2-60	
75	1	打製石斧	6.6	4.0	1.6	58.7	安山岩?	F 4-21	完
	2	々	5.7	3.2	1.6	47.1	安山岩	F 4-30	完
	3	々	7.1	4.2	2.0	81.7	砂岩	E 4-83	完
	4	局部磨製石斧	10.4	3.1	1.9	65.7	頁岩?	D 4-71	完
	5	々	(3.7)	(3.5)	(1.7)	(29.3)	流紋岩	F 3-24	基部欠
	6	々	(3.7)	(3.9)	(1.4)	(26.0)	安山岩	F 2-17	刃部
	7	々	5.9	3.9	1.4	39.9	玄武岩	F 3-03	完
	8	磨製石斧	6.7	3.0	2.6	74.7	凝灰岩	F 3-67	々
	9	々	6.5	2.5	1.1	28.5	蛇紋岩	E 3-65	々
	10	々	4.4	1.5	0.6	6.5	砂岩	F 3-34	々
	11	打製石斧	7.7	4.3	2.0	90	砂岩	F 3-58	々
	12	々	7.3	4.6	1.7	89.2	砂岩	F 4-24	々
	13	々	8.3	4.8	3.3	202	安山岩?	F 4-01	々
76	14	磨製石斧	9.5	5.0	2.2	201	閃綠岩	E 4-90	々
	15	々	7.6	4.1	2.6	110	頁岩	E 2-86	々
	16	々	8.6	3.9	2.3	145	砂岩	E 4-55	々
	17	々	(9.8)	5.2	(3.5)	(286)	凝灰岩	E 3-76	基部欠
	18	々	(13.1)	(4.8)	(3.1)	(216)	緑泥片岩?	F 2-07	刃部欠、二次転用
	19	打製石斧	10.7	5.7	2.3	189	雲母片岩	D 3-96	完
	20	々	9.0	6.2	1.6	96	頁岩?	E 2-97	々
	21	々	6.4	3.9	1.6	52.6	安山岩	F 3-09	々
	22	々	9.0	5.6	1.6	101	砂岩	E 3-01	々
	23	鑿状石器	8.6	5.1	2.2	101	頁岩	E 4-61	々
77	1	磨石	105.0	82.6	40.7	478	石英斑石	E 2-20	一部欠
	2	々	(103.0)	98.5	58.5	(880)	玢岩	D 3-94	半欠
	3	々	125.0	68.7	46.0	595	砂岩	E 3-09	
	4	々	(77.4)	65.7	37.3	(290)	砂岩	E 2-97	半欠

擲出番号	No	器種	サイズ			重量(kg)	石質	出土グリッド	備考
			長mm	巾mm	厚mm				
77	5	磨石	79.2	40.5	30.3	114	安山岩	F 3-01	
	6	敲石	85.8	41.4	32.5	153	砂岩	E 2-79	
	7	〃	74.9	47.3	24.7	116	砂岩	F 2-18	
	8	〃	87.7	47.2	35.9	197	チャート	F 3-09	
78	1	石皿	166.0	(101.6)	47.0	(640)	砂岩	E 4-87	半欠
	2	〃	92.5	(88.0)	44.7	(540)	安山岩	E 3-81	破片
	3	台石	120.5	(94.4)	32.6	(612)	閃綠岩	E 3-80	半欠
	4	〃	113.7	94.7	47.4	759	砂岩	F 2-17	
	5	凹石	259.0	96.4	79.3	2670	片麻岩	E 4-00	

IV まとめ

1. 繩文時代

(1) 遺構

縄文時代の遺構は、住居址4軒（001号址～004号址）、埋甕土塙2基（005・006号址）、炉穴4基（007号址～010号址）、陥穴状土塙8基（011号址～018号址）、土塙8基（019号址～026号址）が検出されているが、そのうち住居址と炉穴について若干触れてみたい。

住居址は、出土遺物が僅少であることと、縄文時代各期の遺物包含層と重なることから、各住居址の時期を確実に決定出来るとは言いがたい。ただ、001号址は床面より若干浮いて第XI群の加曾利E I式がややまとまって出土していることから、該期のものと言えよう。002号址～004号址は、土器が僅か数点出土しているのみで、時期決定には無理がある。しかし、4軒の住居址には極めて共通した点がいくつか認められる。①竪穴の掘り込みが概して浅い。②床面が全体に軟質。③003号址の主柱穴が4本である他は主柱穴が3本。といった点である。また各住居址の位置をみると、001号址・002号址・004号址がほぼ一直線上に並び、各々の住居址の地床炉を基点に距離をみると、001号址～002号址間33.0m、002号址～003号址間29.5m、002号址～004号址間28.5m、003号址～004号址間31.5mと、ほぼ30m前後の距離となる。これら、直線上の配列と類似する距離を偶然性の問題として片付けるならば、それまでであるが、各住居址自体の類似性も考慮するならば、4軒の住居址は一時期の集落構成を示している可能性も充分考えられる。

4基の炉穴は、全て台地縁辺部から緩やかに傾斜した場所に立地する。炉穴の時期は条痕文系土器に当るが、条痕文系土器が相当の時間幅をもつため、厳密には対比出来ないが、条痕文系土器は台地縁辺部に沿って分布し、炉穴はその外側に立地する。該期の生活空間での炉穴の位置を知る資料の一つとなるのではないだろうか。

(2) 土器

出土土器の内、最も量的に多いものは第I群の燃糸文系土器であり、計14,000点余と総数の8割以上を占めている。これに次ぐものは、住居址の所属する時期である第XI群古期加曾利E I式であるが、約1,500点と十分の一の出土量しかない。この2群以外の土器はさらに少なくな

る。しかしながら押型文土器(量は3点と僅少)、沈線文系土器の最古段階に位置づけられる三戸式、およびその擦痕文土器を始め、当地域での縄文文化変遷を解明する上で重要な意味をもつ土器が含まれている。

〈早期の土器について〉

第Ⅰ群土器

14,000点あまりが出土。主体はI e類稻荷台式である。I a～I c類井草期ではE 2・3、F 3区を中心に分布がみられた(第79図)。稻荷台期では、南東部のE 4、F 3・4区に拡がる傾向がみられる(第79図)。

口縁部片での出土数の比率は、I a、I b類井草I式(4.2%)、I c類井草II式(15.5%)、I d類夏島式(7.4%)、井草、夏島式の無文土器(2.2%)、I e類稻荷台式有文土器(35.4%)、同無文土器(36.4%)となっている。

井草I式で注目されるのは、I b類中の第41図10の地文斜繩文で、口縁部外面の他内面にも撚紐圧痕文の施文されているものである。これらの文様は大谷寺3式などの表裏繩文の施文方法と相通じるところがある。井草I式でも古い様相を示すものだろうか。また肥厚せず緩く外反するのみの単純な口縁部形態にも共通性のみられるところである。

稻荷台式はほぼ7割を占めており、かつ無文土器の比率が高くなっている。有文の内ではほとんど撚糸文が占めており、繩文はごく僅かである。

稻荷台式での撚糸文と繩文の比率は、総体的にみて武藏野、相模台地方面では撚糸文が主体であり、下総、常総台地では繩文が主体となる傾向がある。⁽²⁾ 本遺跡での9割以上が撚糸文が主流を占めるという事実は、それらの地域に近接しているという地理的な条件を反映したものであろう。

第Ⅱ群土器

三戸式・田戸下層式有文土器(II a類)、三戸式無文土器(II b類)、三戸式条痕文土器(II c類)を一括した。計310点の出土である。

三戸式は、有文24点、無文(擦痕文)272点、条痕文2点であり、田戸下層式の要素を持つ大沈線文をもつものは12点である。E 2区南東、F 2区北東部の径25cm程の範囲に集中してみられた(第79図)。破片数は多いが、個体数では多くみてもせいぜい十数点どまりである。

II a類三戸式土器の口唇は、磨かれて平坦面をなしているが、内削ぎ状の形態はとらず角頭状であり、田戸下層式に近い印象を受ける。最大の特徴は沈線による多段構成をとることである。このような多段構成のものは、神崎町舟塚原遺跡⁽³⁾、佐原市神田台遺跡⁽⁴⁾、埼玉県稻荷原遺跡⁽⁵⁾、茨城県伏見遺跡⁽⁶⁾、地域的に少し離れるが福島県竹之内遺跡⁽⁷⁾があげられる。最も類似するのは、

胴下半に擦痕を有する点で、竹之内遺跡の例であろう。

三戸式の細分については、西川博孝氏の考察がある。氏は三戸式を条痕、細沈線の巾広く施文される類を三戸類、本遺跡例の様に多段構成の盛行する類を舟塚原・福荷原類とし、前者から後者への変遷を考えている。この見解は当類土器の田戸下層式的な様相から考慮しても妥当なところと思われる。ただし、三戸式自体未だ資料的には多くはない。空港遺跡群では、三戸期の豊富な資料があり、それが明らかになれば問題解決の一助となろう。

II a 類中の田戸下層式としたものは、沈線（太沈線が主）を重層させ、横位・斜位に施文するものである。沈線文により菱形の区画を構成する、あるいは貝殻腹縁文を用いる様な典型的なものはみられない。

この太沈線を有する土器については、高野安夫氏により印旛郡白井町捕込附遺跡で、三戸式に含まれるもののが報告され、田戸下層式との関連性について問題提起されている。⁽¹⁹⁾ 条痕文の内削ぎ状口縁の存在、多段構成をとらないという文様構成からみて、捕込附遺跡の三戸式は、古い段階に相当するものと思われる所以、太沈線文はこの時期まで遡る可能性が高くなつた。

ここで問題となるのは第48回12~19の土器を、三戸式、田戸下層式のいずれに所属させるべきかである。三戸式前半期に既に存在しているとすれば、当然田戸下層式に直接連なる後半期にも採用されているであろう。本遺跡の三戸式は後半期とみられることや、典型的な田戸下層式がないことから、これらを三戸式の範疇でとらえてもおかしくはない。今回は一応田戸下層式として取扱ったが、今後よく検討すべきであろう。

また燃糸文系土器と三戸式土器への過渡的な段階の土器として、無文土器群、即ち平板式・花輪台式が設定されている。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾ II b 類の擦痕文の土器は、この平板式とされるものに近似している。ただし、無文土器の位置づけは困難な面があり、これらが一つの型式として認定できるかは疑問である。当遺跡での II b 類に関しては、焼成、胎土（火山岩碎礫を含む）、口唇形状や器形等が第II群中の三戸式有文土器と同一であるので、三戸式中の一つの文様要素として具現されたものととらえたい。

第三群土器

3点の出土。山形文の施文されたもので、胎土や焼成等、押型文土器の典型的なものである。押型文土器を出土する遺跡は県内20ヶ所以上にのぼっている（表2）。なかでも、四街道市鹿渡遺跡は正式報告はないが、良好な資料の多数出土が知られている。⁽¹²⁾

押型文土器とそれに併行する南関東の型式との関係は未解決の問題である。今後の資料の増加を期待したい。

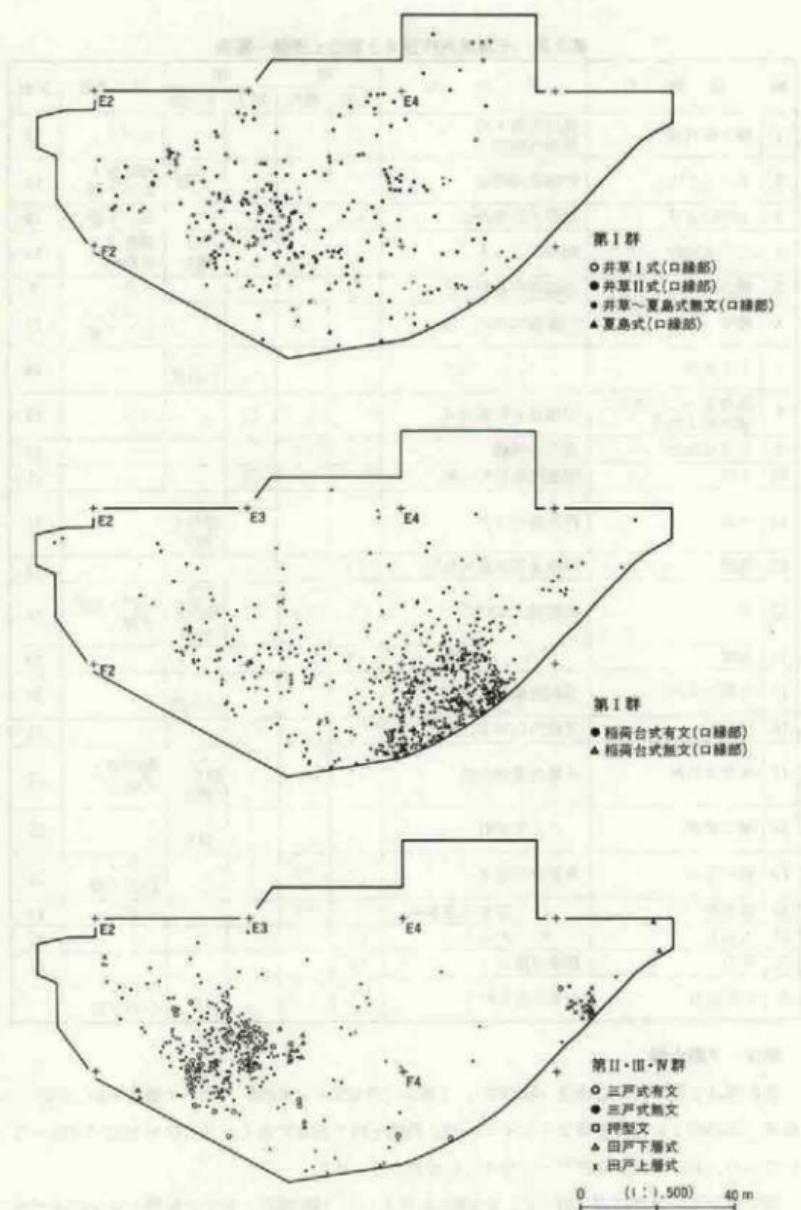
第2表 千葉県内押型文土器出土遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	種類				伴出土器	文献
			山形	楕円	格子	その他		
1	猪ヶ崎貝塚	流山市猪ヶ崎 東福寺境内	○				田戸	13
2	ボタモチ山	野田市尾崎境				不明	稻荷原・ 田戸下層	14
3	水神山古墳	我孫子市高野山	○				田戸下層	15
4	ニッ木向台	松戸市ニッ木				○ 線杉	稻荷原・ 花輪台	16
5	捕込財	印旛郡白井町十余一	○				三戸	9
6	鶴塚	印旛郡印西町小林		○			三戸・ 田戸下層	17
7	木下庵寺	〃 別所				○ 日計式		18
8	龍角寺ニュータウン 遺跡No.3地点	印旛郡栄町龍角寺			○		三戸	19
9	三里塚No.62	成田市東峰		○				20
10	大堀	印旛郡富里町大堀			○			21
11	中台	四街道市中台				○ 線杉+ 燃糸		21
12	鹿渡	四街道市鹿渡向柳作	○					12
13	所	香取郡大栄町所		○		○ 楕円+ 山形	三戸・田戸 下層	22
14	庚塚	〃 南敷	○					20
15	今都カチ内	香取郡東庄町今郡				○ 日計式		23
16	江原台	佐倉市白井字江原台			○			24
17	東寺山石神	千葉市東寺山町	○			○ 線杉+ 燃糸	稻荷原・ 花輪台	21
18	南二重堀	〃 生実町				○ 線杉		25
19	笠子込山	木更津市笠子	○	○			三戸・ 田戸下層	26
20	清水谷	〃 管生字清水谷		○			三戸	14
21	大田B	〃 大田	○					21
22	坂田	君津市坂田	○					21
23	辺田山谷	千葉市辺田町	○				三戸・ 田戸下層	

第IV・V群土器

第IV群は2個体のみの出土(第79図)。1個体(第52図)は典型的な田戸上層式だが、別の1個体(第55図1)は後述のようにその所属に問題を残す土器である。後者は分布図では扱っていないが、E 2-79・89グリッドを中心に分布がみられた。

第V群土器は台地縁辺に沿って、約590点が出土した(第80図)。炉穴の配置とは分布状況が



第79図 繩文土器平面分布図(1)

重なっている。主体は茅山上層式である。

さて第IV群土器で問題となるのは、第55図1に図示した内外面に条痕文を施文され、胎土に纖維の混入のみられない土器である。条痕文自体は撫糸文期に初現があり、三戸式前半では主文様の一つとなる。田戸式では従の文様として存在するが、条痕文土器ではその名称の示すごとく、性格を特徴づける文様としての位置を獲得している。そして前期初頭の花積下層式までは明確に残存している。このように条痕文は、縄文に次ぎ息の長い文様要素なので理解を一層難しくしている。

内面にも擦痕があることは、これが条痕文系土器との密接な関係のあることを物語っている。胎土内の纖維含有量の少なき点では条痕文期初頭の子母口式、そして早期末葉～前期初頭の東海、中部系の土器の両者に類似性があげられよう。しかし、後者には概当する例を知らない。前者の子母口式では擦痕が主文様であり、内面の文様と共に通する。一方、口縁の肥厚、竹管を器面に寝かせ気味に押捺して施した連続刺突文は、田戸下層式によくみられる特徴である。田戸下層・上原式でも貝殻文が主文様の一つであり、田戸上層式では条痕文も存在しているので、これらの流れの内に位置づけるのが妥当であろう。

あまり確証はないが、結論的に言うと、田戸下層式の伝統の内にありながら、子母口式に近縁性を持つという性格上、田戸上層式にその所属が求められるのではないかと思っている。

〈前期から中期初頭の土器〉

第VI群合纖維縄文土器206点、第VII群諸磯式113点、十三普提式4点、第VIII群浮島・興津式898点、第IX群前期末から中期初頭の縄文施文土器59点、その他沈線文等800点余がある(第80図)。

従来、東京湾岸地域は諸磯系土器の勢力の強いところとされていた。しかし、当遺跡においては全く逆転している。但し、第VII群諸磯b式と第VIII群興津式とでは時期差があるので単純な比較はできない。併行する諸磯c式、十三普提式はごく僅かである。従って、少なくともこの遺跡に関する限り、浮島系勢力圏にあったことは確実である。

第IX群土器

浮島・興津式を主とする遺跡で、縄文施文の土器が出土することは、利根川下流域を中心とした西村正衛氏の研究で指摘されたところである。⁽²⁷⁾ その特徴は体部に横位の斜縄文を有することで、口唇部施文、口唇に波状貼付文、撫糸側面压痕文もみられる。これらは、同意匠をもつ東北南部地域の型式の大木5式との関連で注目されている。

これら縄文施文土器群に対し安藤文一氏は銚子市栗島台遺跡での結果をもとに栗島台式を設定し、興津式と後続する中期初頭の下小野式との間を結ぶ型式としている。⁽²⁸⁾ ただ提示された資料だけでは、一つの型式として独立させる根拠は薄い様である。最近の研究では、芳賀英一氏

が大木式の中心地東北南部を軸に、関東地方の例を加え集約した論考を出しており、改めて大木5式と興津式との併存を唱えている。これらが、独立した型式かどうかはともかく、芳賀氏の考え方のように少なくとも興津式の時期には大木5式の影響が濃くあり、それらの縄文施文の手法が取り入れられ、母胎となって下小野式の成立に関わったという点は、疑義のないところであろう。

本遺跡でも、浮島式、下小野式の出土量は興津式に比して僅かであり、これらの土器は興津式に伴う可能性が濃厚である。

〈中・後期の土器〉

第X群土器

66点の出土である。阿玉台式にあたる。個体数も少ない。

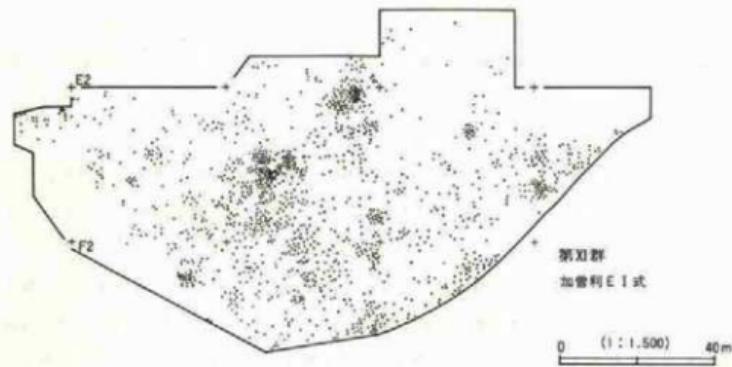
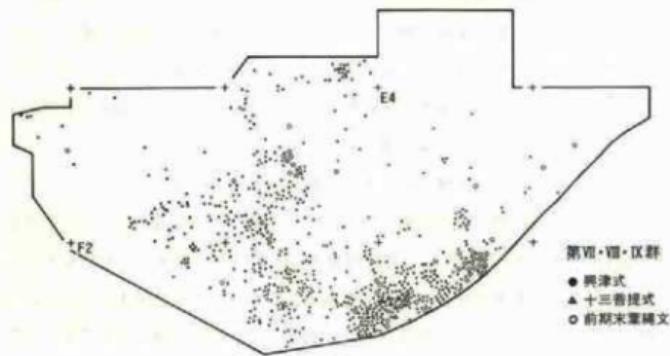
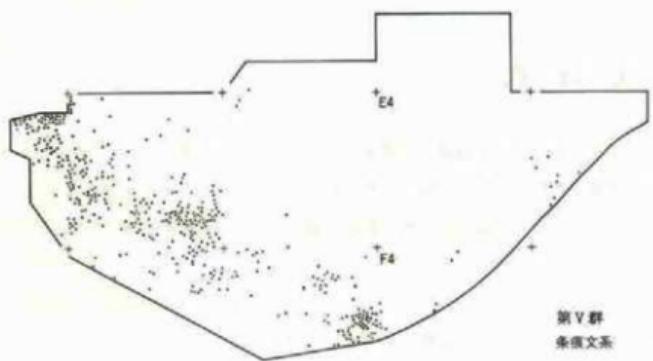
第XI・ XII群土器

総数1,062点の出土で総量の1割強を占めており、第I群土器に次ぐ出土量である。遺跡のほぼ全面に分布するが(第80図)、特にE3区では2ヶ所の集中が認められる。その内訳は、第XI群加曾利E I式が主体で500点、第XII群のE III式24点、E IV式57点、他は胴部1,000点余りであり、その大半はE I式に所属している。

縄文時代の遺構では住居址4軒、埋甕土塙1基、土塙2基が加曇利E I式、埋甕土塙1基が加曇利E III式の時期の所産である。特に005・006号址の埋甕土塙でE I・E III式の完形に近い土器が出土していることが目につく。

第XIII群土器

出土点数は少ない。目立つものは称名寺式の半完形土器の出土が特筆される程度である。しかし残念ながら包含層からの出土で遺構には伴っていない。



第80図 縄文土器平面分布図(2)

2. 歷史時代

歴史時代の溝を方形に巡らす遺構は、現在「方形周溝（状）遺構」と呼称されることが多い。この名称は、遺構の性格が不明な段階で呼称されたものであり、現在は墓地として使用されていたことは明白なことから、渡辺修一氏の提起を基に、「方形区画墓」と本書では呼称することとした。

方形区画墓は、近年になって注目されたもので、山岸良二・村上玲子、金丸誠、山岸良二、渡辺修一、田中新史、各氏の論稿が相い次いで発表されている。^{(31) (32) (33)}

上記の論稿によれば、千葉県内でも、市原市・千葉市・四街道市・佐倉市に群として捉えられる遺跡が集中し、一部茨城県石岡市周辺にも検出されている。その中で、本遺跡と水系こそ違うが、近接した地域の千葉市東南部地区と市原市千原台地区の大規模な発掘によって、古墳時代後期の方墳との関連の中で捉えられ始めている。直接方形区画墓について言及してはいないが、栗田則久氏⁽³⁷⁾は方墳と方形区画墓が共に検出されているムコアラク遺跡や六通金山遺跡の方墳を取り上げ、千葉市東南部地区の方墳が7世紀後葉になって突然発生することから、墓制に関する一大変革、ひいては社会構造の大きな変動が窺われる述べている。渡辺修一氏は東南部地区と千原台地区の古墳時代後期群集墳と方形区画墓が、同一遺跡内で共に群を形成していることに着目し、律令国家成立後の方形区画墓造営の意味を、「共同体の構造に殆ど変化がないことの顕われ」とし、「国家はせいぜい地方豪族層までを掌握するに留まったのではなかったか。」と推察している。また「律令国家成立当時の東国支配の特質を考える上で重大な問題である」と指摘している。以上、方形区画墓の研究の流れについて簡単にみてみたが、渡辺氏が言及するように、律令体制の中で方形区画墓をどう位置付けるかといった点について、考えていくねばならない段階であろう。

本遺跡では、14基の方形区画墓が検出されているが、まず個々の方形区画墓から帰納される点について触れてみたい。

現表上面からセクションベルトを残し掘り下げた遺構のうち、027号址を除いて全て周溝内側のみに旧表土層が認められ、また027・029・030・035号址の現表土層下の土層が盛り土の特色を示していることから、方形区画墓は本来墳丘があったものと考えられる。しかし、大刀や他の遺物出土状況から、墓域が後世の人为的な改変をほとんど受けないとと思われるにもかかわらず、セクション面では全く盛り土による盛り上りが認められず、しかも遺物が周溝内外で接合する例がみられることは、墳丘自体は極めて低位なものであったと思われる。029号址以外に主体部は全く検出されなかったが、恐らく低位な墳丘に極く浅く掘り込まれたものではなかつたであろうか。出土遺物については、大刀が本体は主体部最上層で出土しているものの、付属

する頭と柄金具が離れて出土し、須恵器・土師器も小破片で周溝内側に散乱し、一部周溝外からも出土していることを考えると、これらの遺物は副葬品と共に墳丘上に置かれた供獻品としても考える必要がある。

方形区画墓の出土遺物のうち、須恵器・土師器は027・029・034・037号址のものを図示したが、郷堀英司氏の御教示によれば、図示しなかった破片も含めて、8世紀中葉を中心とした時期であるとのことである。また須恵器環は土氣・南河原坂窯址⁽³⁸⁾をはじめ千葉市周辺の窯で焼かれた製品の可能性があるという。

027号址からは7基の土塁状落ち込みが検出されている。土塁Fが3層を掘り込んでいる以外は、全て3層下からの掘り込みである。Fは、最上層で大刀が検出され、炭化材も多く検出されていることと、土塁の規模を考えると、火葬墓塚であったと思われる。他の土塁は、若干の炭化材が検出されているのみで、火葬墓塚の可能性もあるが、今一つ明確ではない。

辻田山谷遺跡は、コロニー遺跡と同一台地に立地し、直線距離で250m以上離れている。コロニー遺跡は、現在県立袖ヶ浦養護学校が建っているあたりで、方形区画墓が12基検出されている。本遺跡とコロニー内遺跡の間には、現在千葉県リハビリテーションセンターが建ち、未調査のまま破壊されてしまったため、両遺跡の繋がりは知る術もないが、同時代の方形区画墓が共に検出されていることは、両遺跡が立地する台地が該期には広範囲な墓域として利用されていた可能性が充分考えられる。また両遺跡の位置付けは、調査が進んでいる東南部地区と千原台地区で、方形区画墓は当初後期古墳群と立地を同じくしていたが、時代が降るにつれ、より支谷奥部の後期古墳群が築造されていない台地上に立地する傾向が窺われることから、それら村田川水系の遺跡や都川水系の新山、塚原、中原等の後期古墳群との関連で考えていかねばならないであろう。

027号址で出土した大刀は、双脚足金物を有する方頭大刀である。双脚足金物方頭大刀については神林淳雄、滝瀬芳之、各氏の研究がある。これらの研究によれば、双脚足金物方頭大刀は、群馬県高崎市（伝）・勢多郡柏川村・藤岡市（2例）・茨城県勝田市、の東国での出土例が多く知られる。本遺跡の大刀とは、全長等数値は違うが、勢多郡柏川村出土例と極めて類似している。年代的には、滝瀬氏は方頭大刀を7世紀中葉以降としているが、本遺跡の双脚足金物方頭大刀は、正倉院蔵の銅漆作大刀や黒作大刀、伴出須恵器の年代、及び伝世期間を考慮して、8世紀前半の製作としたい。

以上、本遺跡で検出された方形区画墓と伴出遺物、及びコロニー遺跡との関連について触れてきたが、以下個々の事例から考えられる点について若干触れてみたい。

まず、双脚足金物大刀と被葬者との関係であるが、大刀の製作地を確実に比定することは現状では不可能ではあるが、畿内にしろ地方の官営工房にしろ、律令国家権力のもとで製作されたことは間違いないであろう。とすれば、027号址に埋葬されていた人物、あるいはその一族は、

律令国家権力と密接な繋がりがあったものと思われる。このような人物を中心とした集団が、後期古墳から続く葬制を取り入れていることは、渡辺氏⁽³⁰⁾が既に述べているように、葬制について国家の規制ではなく、集団の構造に殆ど変化がなかったものと考えられる。ただ、今までに後期古墳が全く築造されていない支谷最奥部に墓域が占地したり、火葬墓を取り入れていることから、国家からの何らかの規制や影響を多少なりとも受けているといえるであろう。

ところで、中山敏史氏によれば、郡衙の成立期を7世紀末～8世紀初頭、国衙の成立期を8世紀前半～中葉とし、8世紀前半は律令国家の地域支配を在地豪族の伝統的支配力によっていたと述べている。もし、本遺跡の地でも同様な展開であったとすれば、先述したような、葬制への規制や集団の構造変革に対しては、殆ど影響を与えることはなかったと思われる。

次に、方形区画墓が群として捉えられることは、占地する場所が墓域として占有されることを意味する。このような場所は支谷最奥部で、農業生産の面から考えれば最も開発の対象地としては成り立たないところではあるが、律令体制の中で墓域を形成した集団によって私有されていた点について考えてみる必要があるであろう。

方形区画墓は、千葉県内でも一定の地域で群として捉えられる点も含めて、律令国家成立段階の東国を考える上で、重要な資料を提供するものと思われる。

最後に、本書を執筆するに当り、同僚である田村隆、田島新、橋本勝雄、郷畠英司、原田昌幸、小林清隆、及び明治大学学生新田浩三の各氏には、遺物の実測・トレースを始め多くの御教示を得たことを記し、ここに感謝の意を表したい。

引用文献

- 1 橋 静夫 1976 「大谷寺洞穴遺跡」『栃木県史料編』考古1
- 2 西村正漸 1955 「千葉県西之城貝塚」『石器時代2』
- 3 西川博孝 1980 「三戸式土器の研究」『古代探叢』
- 4 池田大助他 1978 「佐原市神田台遺跡」千葉県文化財センター
- 5 安間路洋 1966 「稻荷原」大宮市教育委員会
- 6 小野真一 1980 「常陸伏見」伏見遺跡調査会 鹿島考古学資料刊行会
- 7 馬目順一 1982 「竹之内遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告
- 8 宮 重行 1984 「No 6 遺跡(新東京国際空港内)の撫糸文期の資料」『研究連絡誌』第9号 千葉県文化財センター
- 9 高野安夫他 1985 「寺向、捕込附遺跡」山武考古学研究所
- 10 吉田 格 1979 「花輪台貝塚」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』
- 11 畠本 勇 1953 「相模・平板貝塚」『駿台史学』
- 12 千葉県教育庁文化課 1983 「千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—昭和56年度」
- 13 江坂輝弥 1942 「千葉県鰐ヶ崎貝塚出土の山形押捺文土器」『古代文化』13
- 14 中山吉秀 1975 「清水谷遺跡」

- 15 東大考古学研究室 1969 「我孫子古墳群」
- 16 庄司克・堀越正行 1974 「松戸市ニッ木向台遺跡における早期縄文式土器の研究」「史館」3
- 17 鹿野光行 1975 「鶴塚遺跡出土の縄文式土器」「古代58」
- 18 赤い本同人会 1983 「赤い本」
- 19 龍角寺ニュータウン遺跡調査会 1982 「龍角寺ニュータウン遺跡群」
- 20 千葉県文化財センター 1982 「年報」No.6
- 21 鈴木道之助 1977 「東寺山石神道路」千葉県文化財センター
- 22 高野安夫 1983 「大栄町所遺跡探集の三戸式土器」「足あと」No.1
- 23 小宮 孟 1984 「東総用水」千葉県文化財センター
- 24 佐倉市教育委員会 1979 「江原台」
- 25 伊藤智樹 1983 「千葉東南部ニュータウン」12 千葉県文化財センター
- 26 石井則行・堀越正行 1974 「木更津市猿子込山遺跡の研究」「史館」2
- 27 西村正衛 1977 「茨城県稻敷郡興津貝塚(第2次調査)―東部関東における縄文前期後半の文化研究(その四)―」「早稲田大学教育学部学術研究」第26号
- 28 安藤文一 1977 「要島台式土器の設定―東関東における縄文前期終末の一様相一」「房総文化」第14号
- 29 芳賀英一 1985 「大木5式土器東部関東との関係」「古代」第80号 西村正衛先生古稀記念石器時代論集
- 30 渡辺修一 1983 「群小区画墓の終焉期」「研究連絡誌」第6号 千葉県文化財センター
- 31 山岸良二・村上玲子 1979 「千葉県における方形周溝状遺構地名表」「東邦考古」5 東邦大学付属高校考古学研究会
- 32 金丸 誠 1982 「房総半島における方形・円形周溝について」「研究連絡誌」第1号 千葉県文化財センター
- 33 金丸 誠 1983 「佐倉市立山遺跡」 千葉県文化財センター
- 34 山岸良二 1983 「方形周溝状遺構研究序説(1)」「研究紀要」第2号 東邦大学付属東邦中学校
- 35 渡辺修一 1985 「群小区画墓の終焉期(2)」「研究連絡誌」第14号 千葉県文化財センター
- 36 田中新史 1985 「古墳時代終末期の地域色」「古代探叢」II 早稲田大学出版部
- 37 栗田則久 1983 「千葉東南部地区における方墳の様相」「研究連絡誌」第5号 千葉県文化財センター
- 38 野村幸希・松原典明 1984 「南河原坂第4遺跡」「千葉市土気地区遺跡調査会
- 39 栗本住弘・菊池真太郎 1976 「千葉市若狭町立コロニー内遺跡」「千葉県文化財センター
- 40 神林淳雄 1936 「雙脚足金物に就いて」「考古学雑誌」第26卷7号
- 41 滝瀬芳之 1984 「円頭・圭頭・方頭大刀について」「日本古代文化研究」創刊号
- 42 東京国立博物館 1976 「日本の武器武具」
- 43 山中敏史 1984 「国衙・都衙の構造と変遷」「講座日本歴史」2・古代2 東京大学出版会

写 真 図 版

油ヶ池リード

日本平温泉
日本平公園

ヨモギ内宿跡



新潟市内
測量基点 約1:25,000 (1985.1.7撮影)



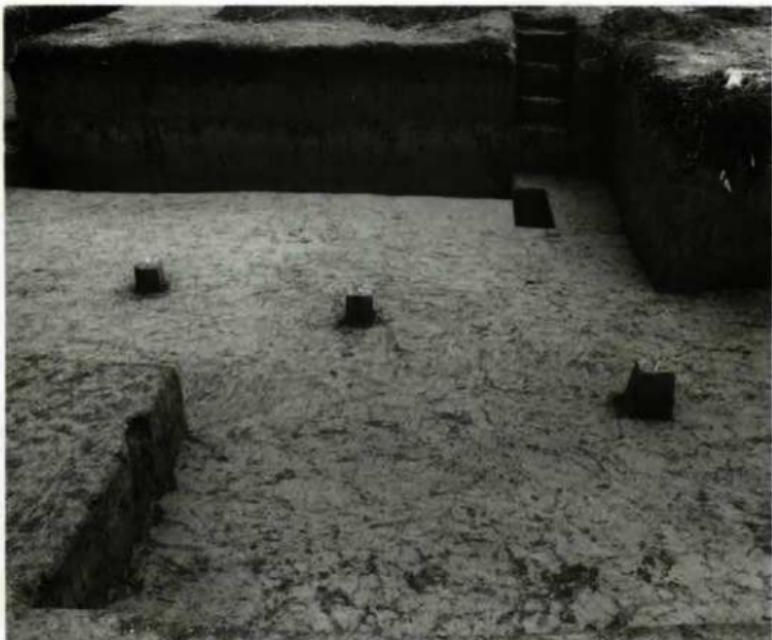
1. 確認調査開始時（北東から）



2. 確認調査開始時（南西から）



3. 遺跡南西部（北東から）



先土器B地点遺物出土状況



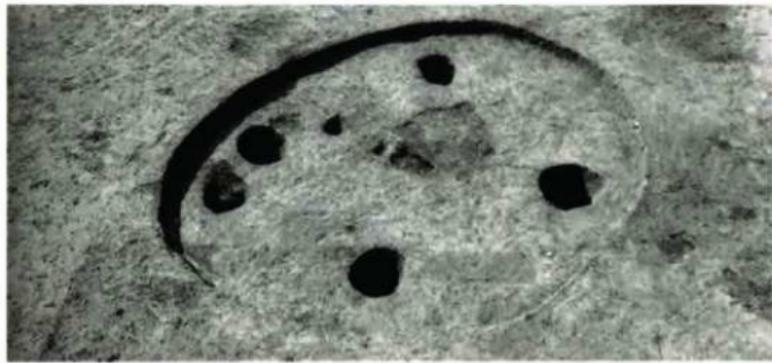
先土器C地点遺物出土状況



001号址全景



001号址南端遗物出土状况



002号址全景



003号址全景



004号址全景



1. 005号址



2. 006号址



3. 006号址



4. 006号址



5. 007号址



6. 008号址



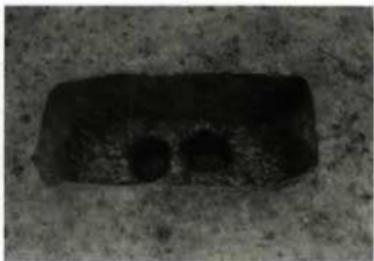
7. 009号址



8. 010号址



1. 011号址



2. 014号址



3. 015号址



4. 017号址



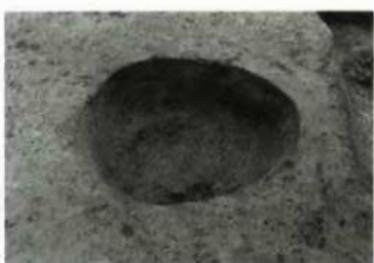
5. 021号址



6. 021号址



7. 024号址



8. 026号址



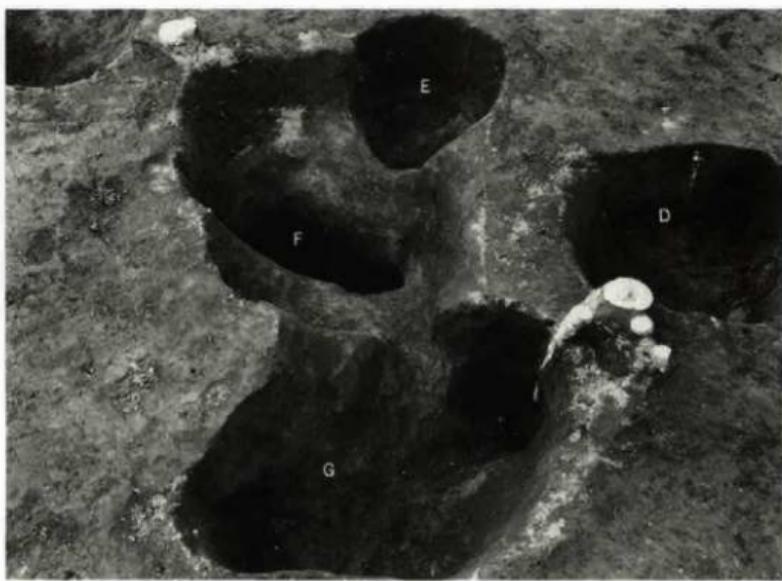
027号址全景



027号址掘り方全景



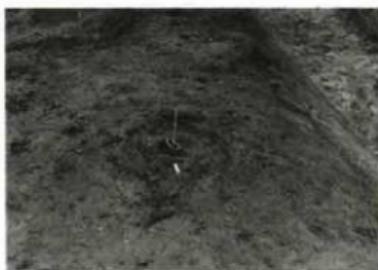
027号址大刀检出状况



027号址检出土坡



1. 027号址大刀確認狀況



2. 027号址谭出土狀況



3. 027号址柄頭出土狀況



4. 027号址周溝斷面



5. 028号址全景



上。029号址全景

右。029号址腰溝断面



3. 030号址全景



上。031号址全景

右。031号址周溝断面



032号址全景



033号址全景



034号址全景

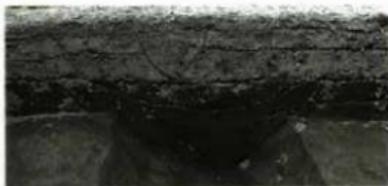


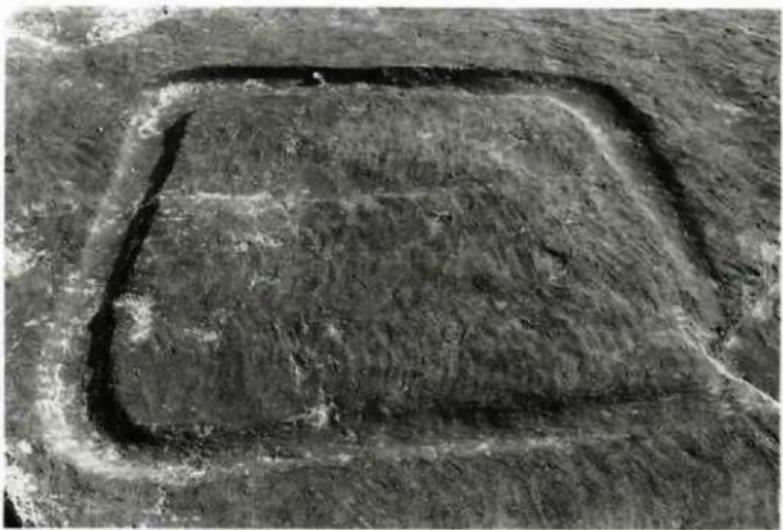
035号址全景



上. 036号址全景

右. 036号址周溝断面





上。037号址全景



右。037号址遗物出土状况



038号址全景



039号址全景



040号址全景



001号址



005号址



001号址



006号址

006号址

遗构出土绳文土器 (1)



009号址



021号址

026号址

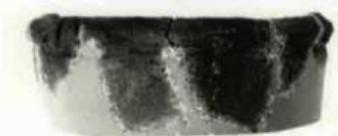
遺構出土繩文土器 (2)



第IV群土器



第IX群土器

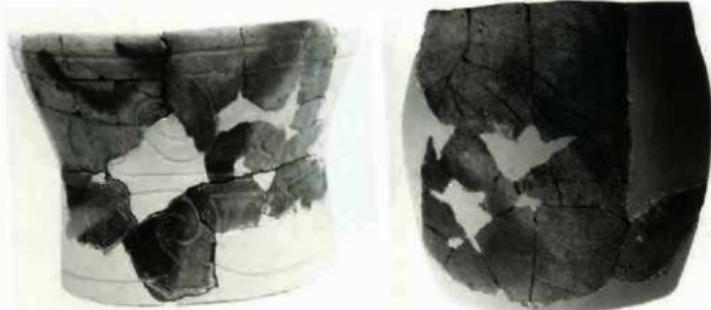


第XI群土器

グリッド出土土器 (1)

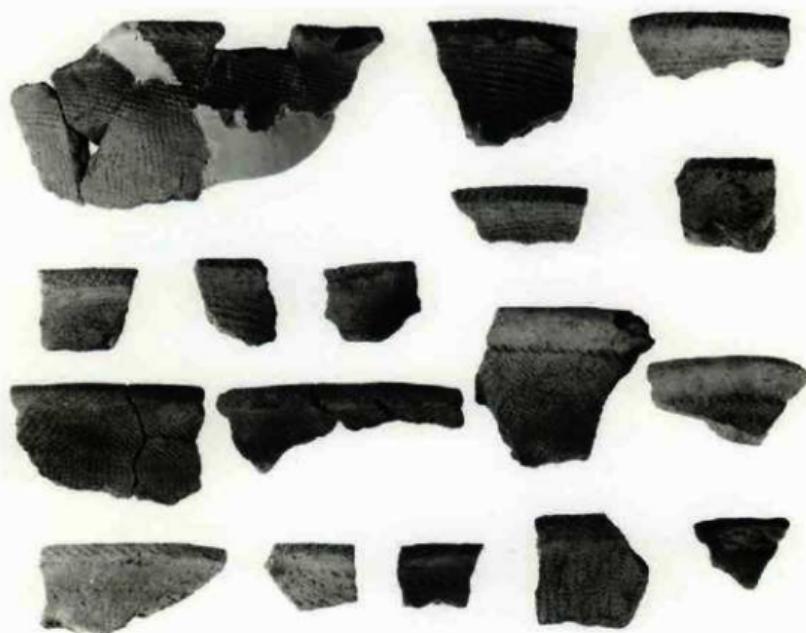


第3群土器



第3群土器

グリッド出土土器 (2)

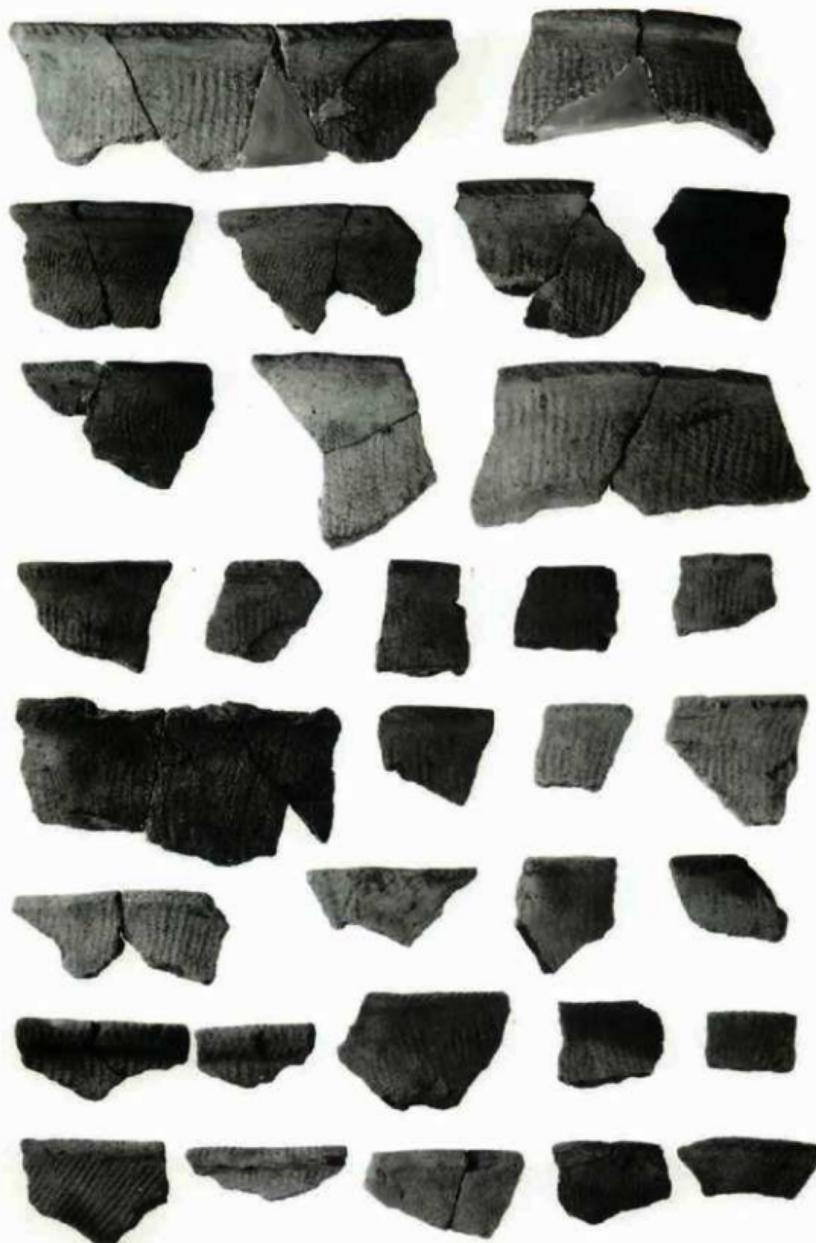


第Ⅰ群土器

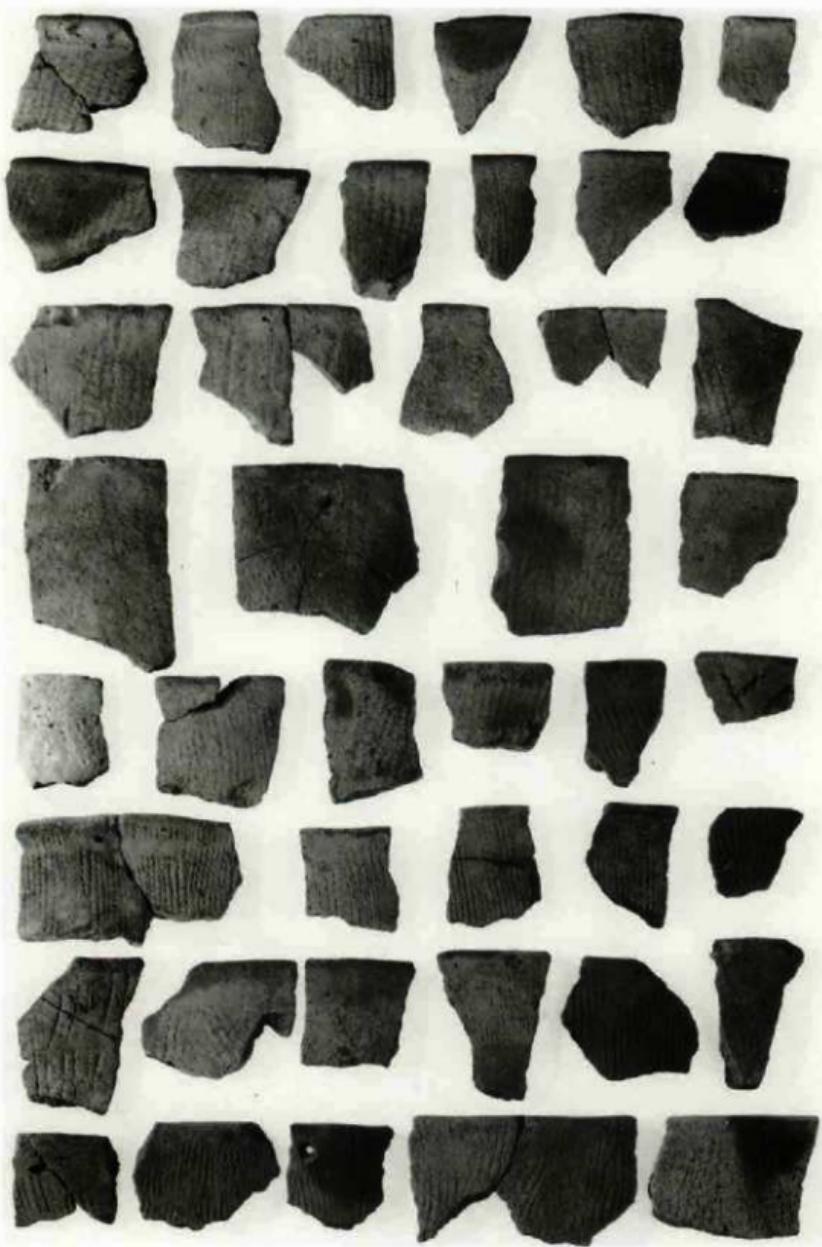


第Ⅲ群土器

グリッド出土土器 (3)



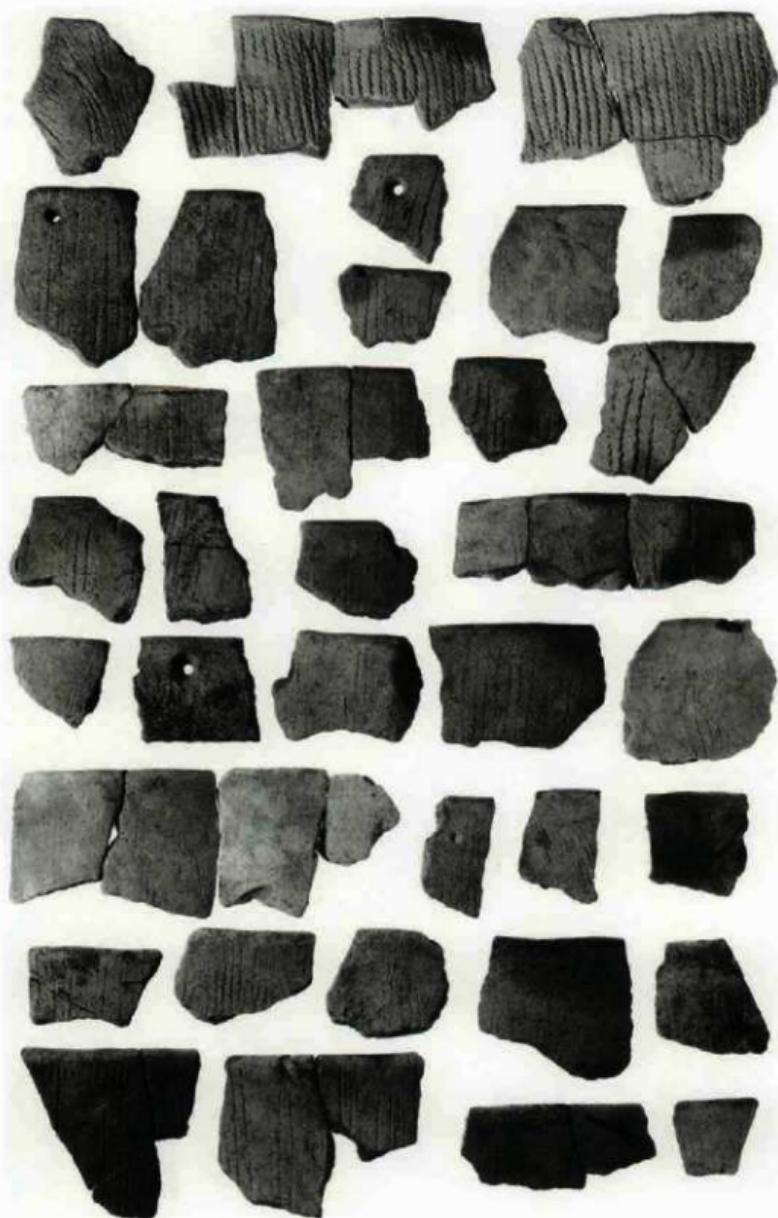
グリッド出土土器(4) 第I群土器



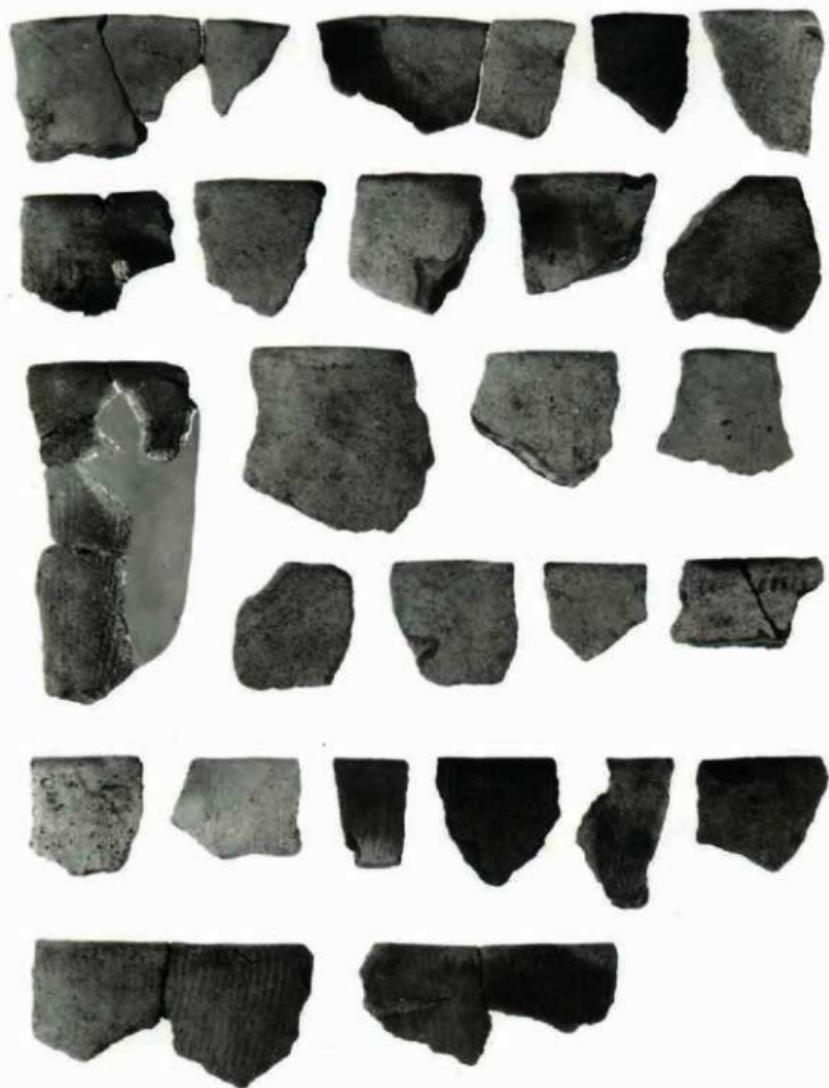
グリッド出土土器(5) 第Ⅰ群土器



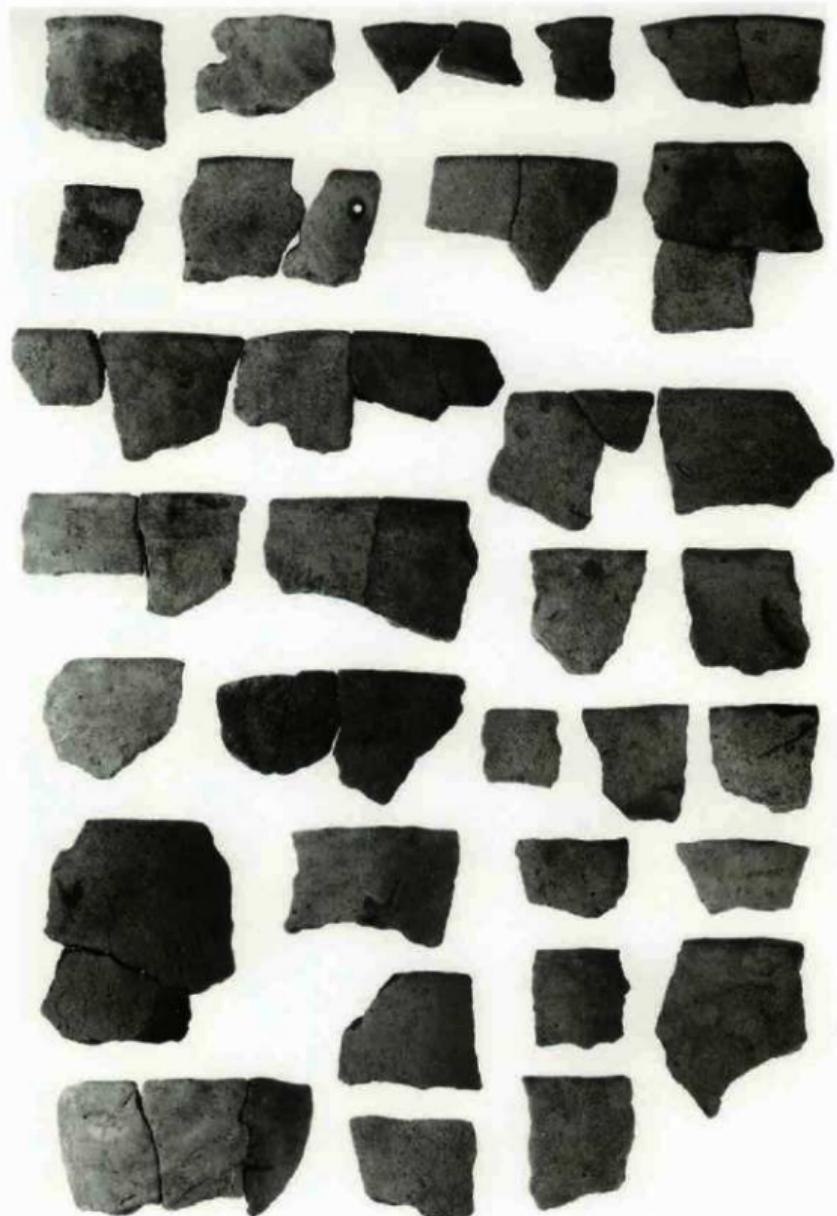
グリッド出土土器(6) 第Ⅰ群土器



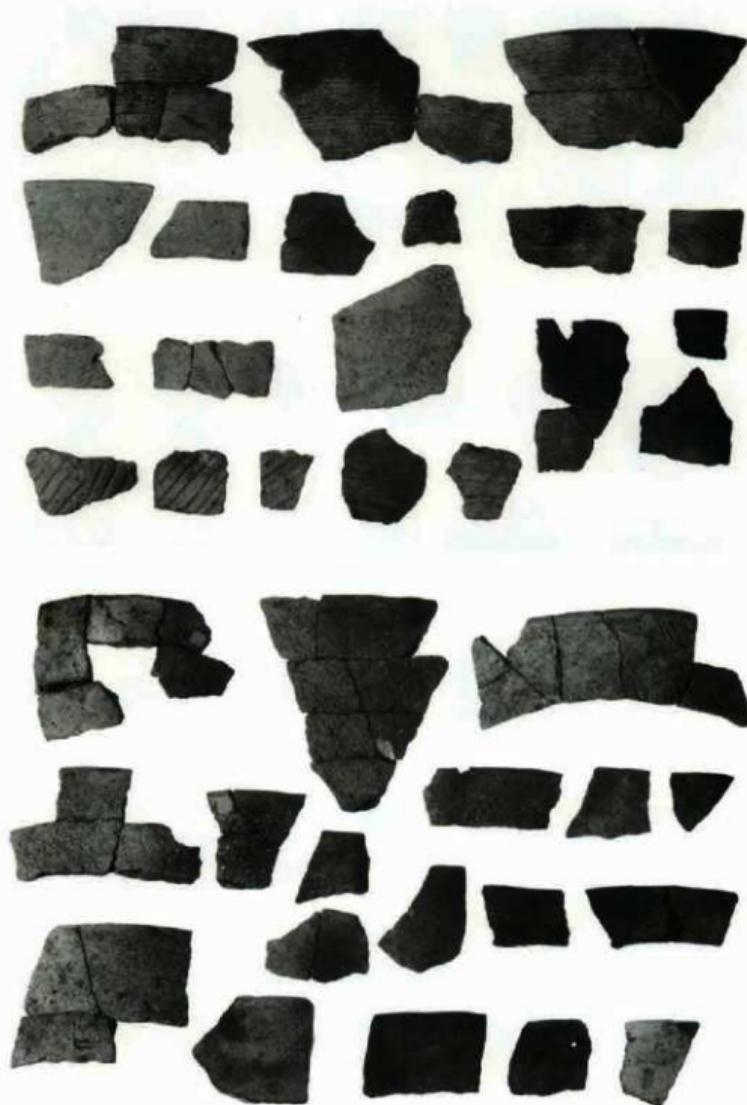
グリッド出土土器(7) 第Ⅰ群土器



グリッド出土土器(8) 第I群土器



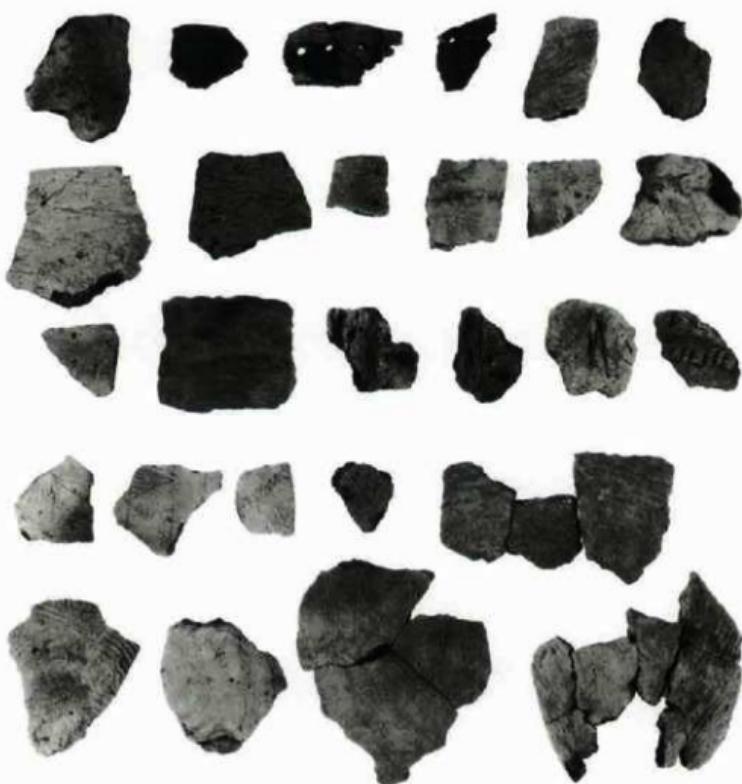
グリッド出土土器(9) 第I群土器



グリッド出土土器群 第II群土器

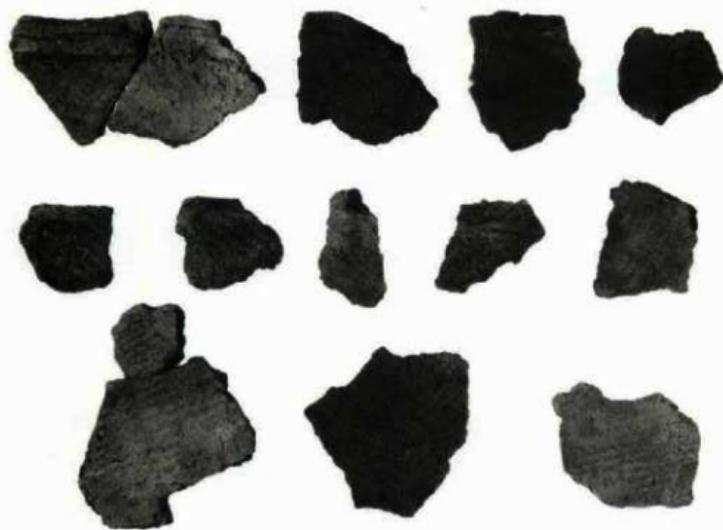


第IV群土器

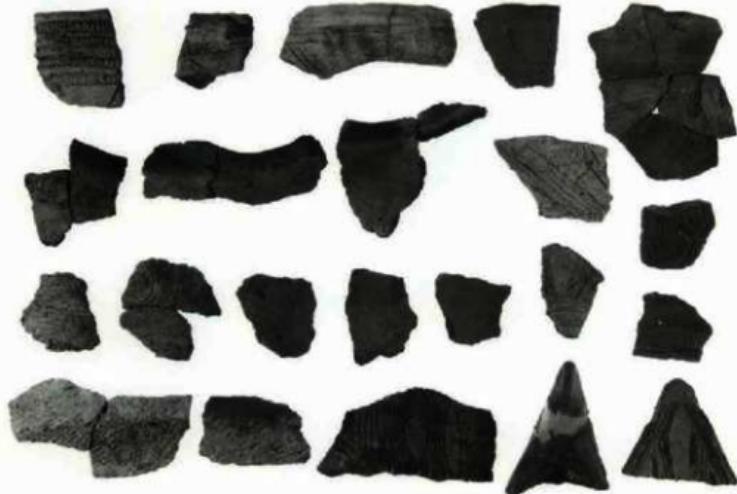


第V群土器

グリッド出土土器 ⑩

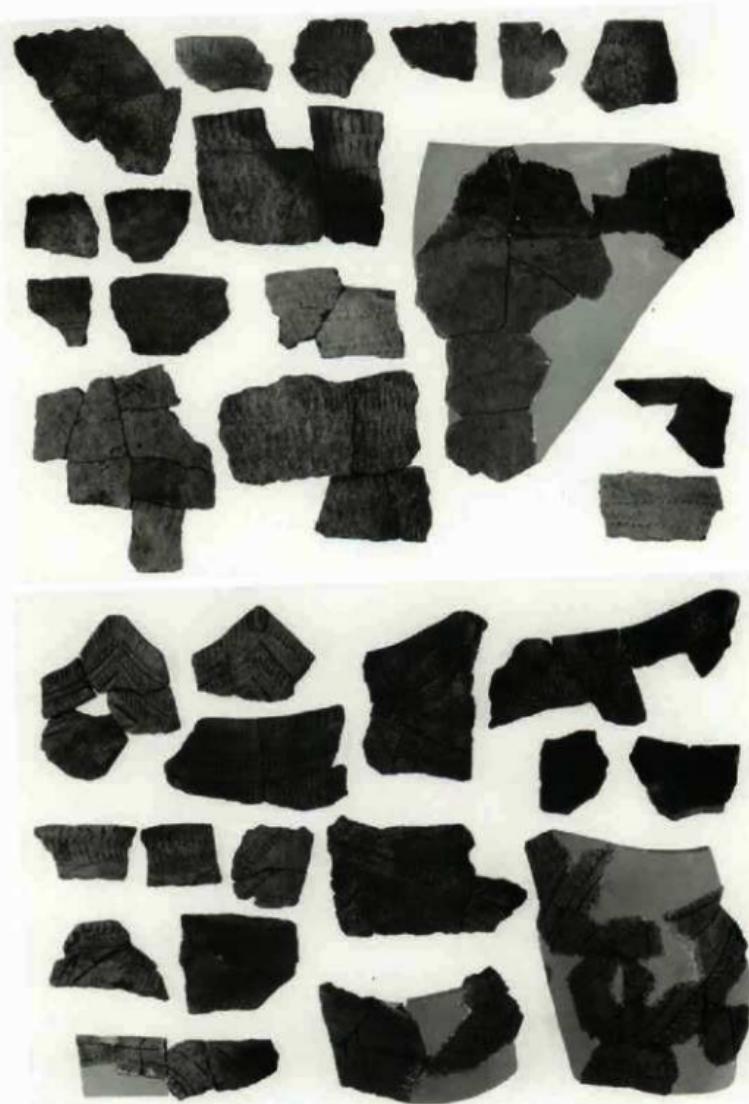


第VI群土器

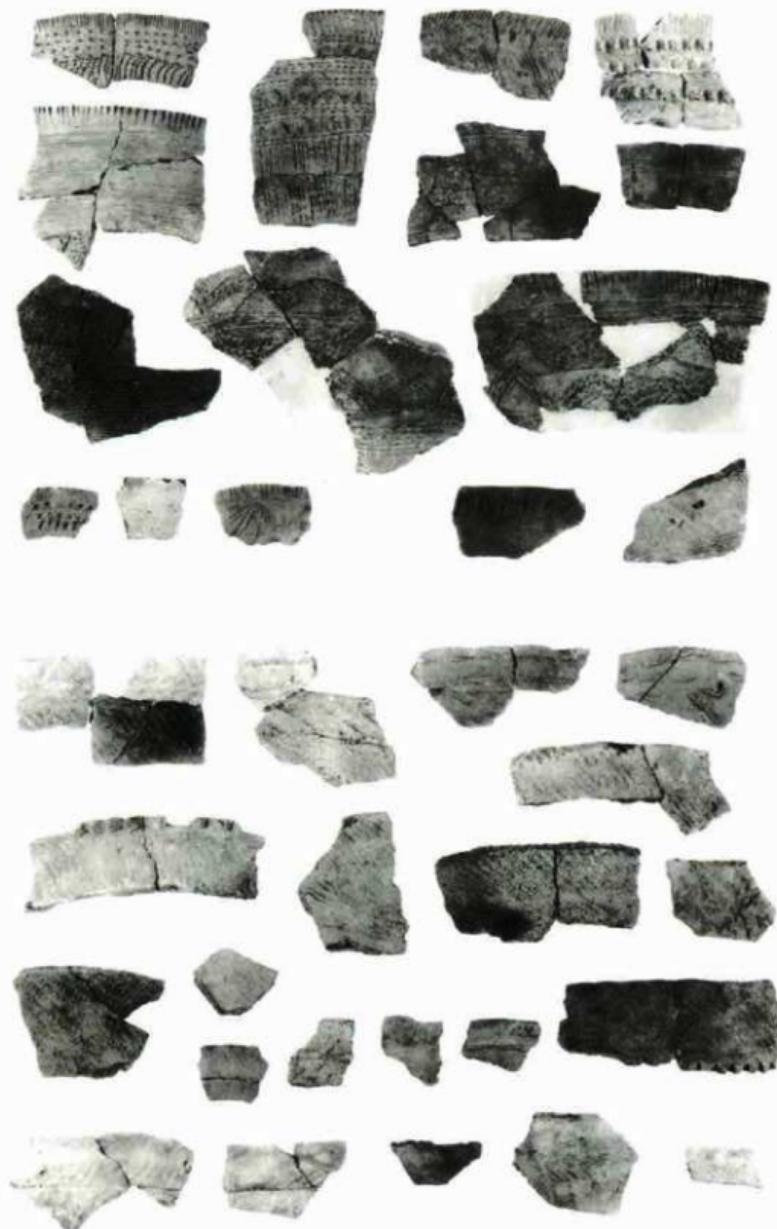


第VII群土器

グリッド出土土器 02



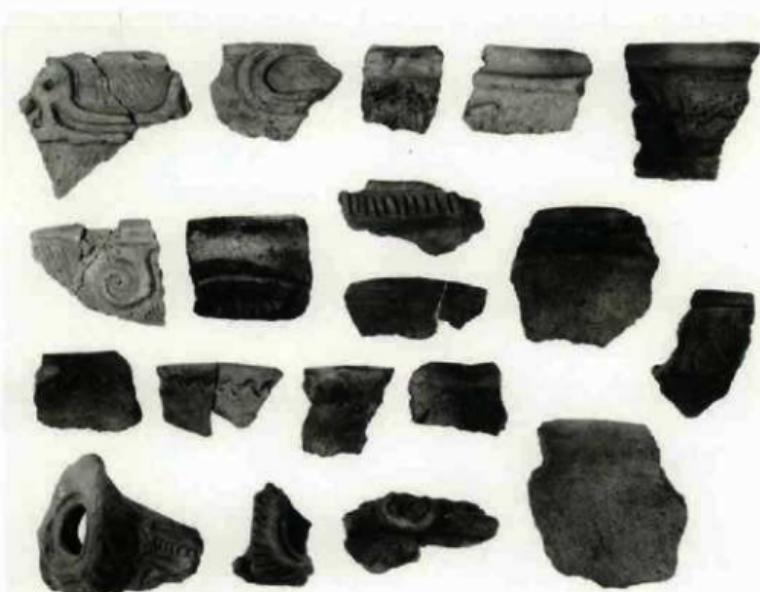
グリッド出土土器③ 第VIII群土器



グリッド出土土器04 第VIII・IX群土器



第X群土器

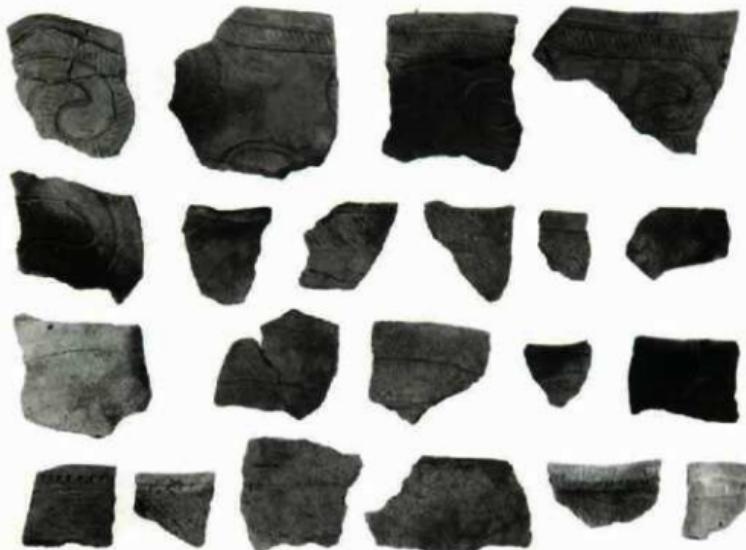


第XI群土器

グリッド出土土器 09

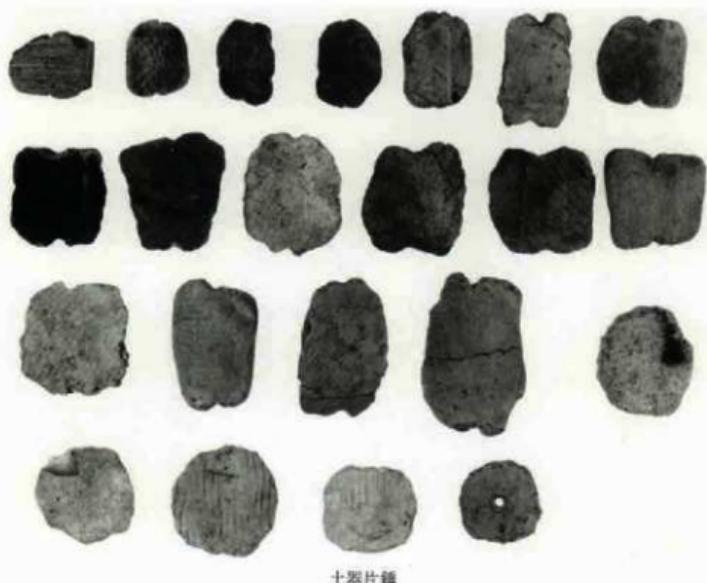


第Ⅲ群土器

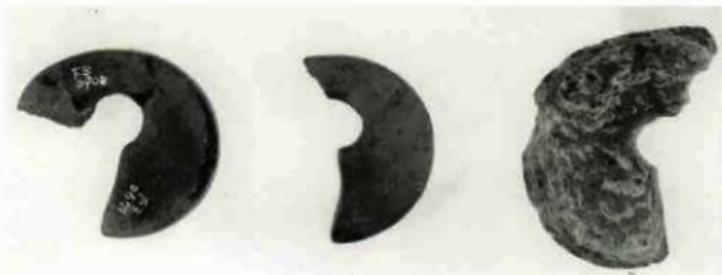
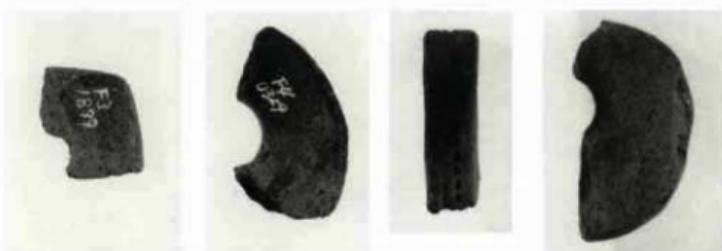


第Ⅳ群土器

グリッド出土土器 06



土器片



块状耳飾

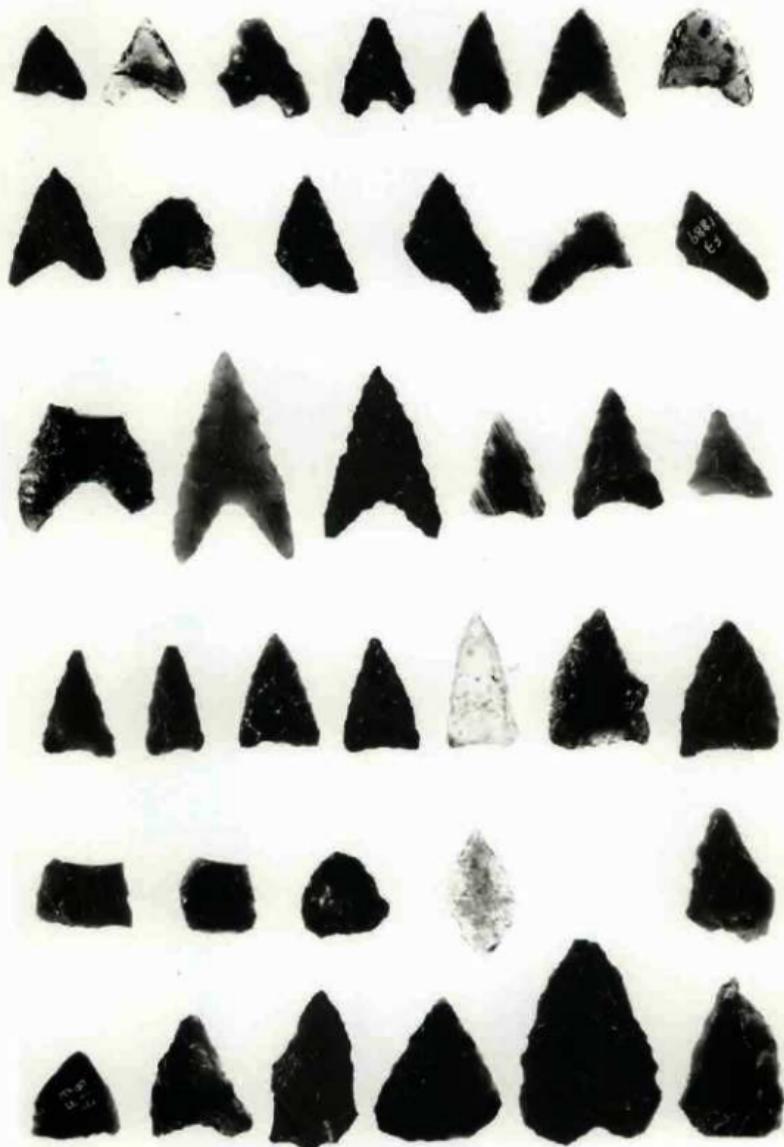
グリッド出土土製品・石製品



先土器時代石器



グリッド出土石器 (1)



グリッド出土石器 (2)



グリッド出土石器 (3)



グリッド出土石器 (4)



グリッド出土石器 (5)



グリッド出土石器 (6)



027号址出土大刀·貴金具·環·柄頭



027号址



029号址



029号址



034号址



037号址

027 • 029 • 034 • 037号址出土遗物

昭和61年3月15日 印刷

昭和61年3月31日 発行

千葉市辺田山谷遺跡

—千葉県小児医療センター(仮称)建設予定地内埋蔵文化財調査報告書—

発行 財團法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2-10-1

印刷 (有)みつわ軽印刷社
千葉市新港213-5
